

神様転生自己満海賊

YADANAKA

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

- ①時間ができた！ハイキューの続き描き始める！
 - ②突然フィルムZのある曲が脳内再生される！
 - ③ONE PIECEのアインとオリ主読みたい！書きたい！
 - ④なら書くか！友人「レイジユ好きだから書いて」
- 結果誕生した作品w

気づいたら凄いもので、ヒロインがかなりふえていますね、はい。

アイン・モネ・レイジユ・ハンコック・レベツカ・カリファ・ベビー5・バカラ・ステューシー・ヒナ・コアラ・ビビ・ヴィオラ・たしぎ・ハニークイーン・うるティ・カ

リーナ・小紫（光月日和）・ヤマト

うーむ。なぜこうなった？他にも要望あれば教えてくださいませ♪

目次

はちわ	79
ななわ	70
ろくわ	60
尉官	
ごわ	50
よんわ	39
さんわ	28
にわ	17
いちわ	7
新兵	
皆のアイト	1

にじゅうわ	272
じゅうきゅうわ	239
じゅうはち	222
じゅうななわ	201
じゅうろくわ	190
じゅうごわ	175
じゅうよん	160
じゅうさんわ	147
左官	
じゅうにわ	135
じゅういちわ	120
じゅうわ	103
きゅうわ	90

将校

にじゅういちわ

—————

299

にじゅうにわ

—————

318

にじゅうさんわ

—————

337

にじゅうよんわ

—————

361

にじゅうごわ

—————

378

にじゅうろくわ

—————

406

皆のアイト

現在のヒロイン達のアイトに対する好感度的なやつです。
評価値は0～10で、最高が10です。

——はまだ会ってすらない

3 何とも思っていない

4 可もなく不可もなく

5 良い人だなあ…

6 好意的に感じてる

7 友達以上恋人未満

8 恋人になれたらいいなあ…

9 めちゃくちゃ好き。

10 世界で1番好き・愛してる

アイト 10

モネ 10

レイジユ 7

ハンコック	5
レベツカ	6
カリファ	7
ベビー	5 3
バカラ	9
ステューシー	6
ヒナ	10
コアラ	8
ビビ	10
ヴィオラ	7
たしぎ	6
ハニークイーン	—
うるテイ	10
カリーナ	—
小紫(光月日和)	—
ヤマト	—

たしぎとは作中の描写こそ有りませんが、スモーカーの紹介でアイトと会って軽く話したりはしています。

ヒナ嬢は可愛い弟のように見てる一方で、知らず知らずのうちにアイトの事を1人の男性として好きになってたりする。

レイジュはアイトの事を話のわかるいい人と感じている節が強い。恋愛感情はまだ先の感じだったりする。

※レイジュの言葉で「♡」は、ウインクを表しています。惚れたわけではありません。まさか書き忘れてたとは……

文字数稼ぎの上に載ってなかった人も載せときます。

5 可もなく不可もなく

7 大事に守る対象

9 最優先事項

10 命に変えても守る

センゴク 7

おばあちゃん 7

せんべい	9
ゴリアテ	10
青キジ	7
モモニキ	10
オニグモ	10
葉巻狼	9
中将の人達	8
その他の海兵	5
会軍参加者（上述除く）	9

アイト達に関わる人達です。

もう既に関わってたり、今後関わる人達なのです。

※ここに書くのはあくまで暫定で、読者の皆様にバレても問題ないもの達です。もしかしたらお気づきの方もいらっしやると思うので……。

トサカ&葉巻&義足

全てがビッグなマダム

e t c .

アイトに関して

能力だけでの技の時は漢字表記（カタカナ）として、カタカナの部分が読み方になるかと思っています。

例えば、大津波（アクア・ラグナ）
という感じです。

また、ヒロインズの技に関してもこれが該当するようにして行こうと思っています。
ただ、モネは原作で「カマクラ」だったり、「雪兎（ゆきラビ）」となっていたため、必ず当てはまるわけでは無いことを知っておいて下さい。

あくまで何となく決めただけですので、「あれ？おかしくないか？」と思っても、目くじらを立てないようお願いします。

アイトの戦闘力（にじゅうごわ現在）は、中将以上大将以下（No7未満）、となつて
います。

今後ここは随時更新していき、出来る限り最新話に合わせるつもりですが、忘れて
いる可能性がものすごくあります。

自慢ではないですが、誤字脱字常習犯、である以上更新をすっかり忘れてる事も起
こりうります（確信犯）

もしお気づきになった際は、マイページ登録している方は報告等で、登録されていない方は、感想等でご連絡お願いします。

お手数かけますが、この作品を読んできました以上、乗りかかった船、ということでは何卒よろしゅう願います。

以上、文字数稼ぎでした。

新兵

いちわ

目の前には多くの同志達。

むさ苦しい男達だ。

皆がそれぞれ訓練をしている。

何やらコスプレをして……

ん？

おかしいなこんなイベントあったっけ？

少なくとも夢の中じゃないとおかしい。そう思つて頬をつねつた。

「へ？……いつたたたたた?!?!」

なるほど痛くない。つまりここは夢の世界というわk 「何するんですか!?!」

何やら隣から可愛らしい声が聞こえるなど思いそちらを向くと…

「ホントにもう！何なんですか？いきなり…」

…天使がいた。

こんな可愛い子に会えるのか…夢って素晴らしい………ん？
ちよつと待てよこの子どこかで見たような気がする。

「……………」(じー…)

「な、なんですか？なんか変ですか？」

しかしもし俺の考えがあつてるのだとしたらそれはおかしい。もしここが予想通りのアニメの世界だとしたらもつとボンツキキュボンの人が多いはず。

「……………」(じー…)

「なんか失礼な視線を感じるんですが…」(ジト目)

ところが目の前の天使は服の起伏が小さい。現代日本人のようだ。いや、今時の人はこれよりもあるか？

「アイン!!アイト!!お前らの番だぞ!!」

そんな事を考えてると前方から熊のようなヤクザの声か。そしてそのヤクザの足元にはピンクの変わった男が伸びていた。

「今行きます！行くわよ、アイト!!」

「アイト? 誰それ」

「決まってるじゃない、あなたの名前よ? 今日はどうしたの? 熱? それとも調子が悪いのかしら?」

そう言つて額に額をくつつける天使ことアイン。

ああ〜? いー匂いだ〜…つてあれ? ブラ見えとる。 ……水色か」

「え?」

あ……………やつべえぞ♪

—————

なんだかんだでタツプリ扱かれて夜になった。

俺は与えられた宿舎に向かつて歩いてる。場所は地図見たらなんか思い出した。

にしてもなぜに俺はONE PIECEの世界に来たんだろうか?

神様に会つたわけでもな……………いや、なんか会つたような気がする。

何を話したのかは覚えてないがそれはいい。今大事なのはここがいつの世界なのかだ。

ゼファーには両腕があつたし映画の時よりもなんかめつちや強かつた気がする。

てことは原作よりもそれなりに前のはず。

そしてアインは2年後の時点で28歳とかだったはず…そんなアインがまだ新兵として俺と訓練してる。

ここから考えてまだ10代だと思う。でも海軍の入隊って22歳とかだったような？

「私とあなたはゼファア先生に入学させてもらったんじゃない。それに海軍学校の入学年齢は14歳だから問題無いわ」

「そうなん？…てかなんで俺の考えが分かった？」

「あなたの顔一体何年見てると思ってるの？」

「あらやだ照れる」

「通報するわよ」

何年見てるって昔からの知り合いなのか？

まてよ…なんか小さい頃の記憶にミニアインがいるんだが……

というか通報ってどこにするのやら。するまでもないだろうに。こいつの筋力人間じゃないし。

「……全く、どうせならもつと感のいい幼馴染が良かったわよ。………せつかく同い年

……」

いや溜め息吐かなくてもいいじゃん。そもそもなんで溜め息吐くんだよ。

「溜め息吐いたり疲れたとか言うのと運気が逃げるんだってよ?」

「運気とかよりも努力を信じるわ……それになんていきなりうんちく語るのよ……」

さいですかい。

てかなんでこんなツンツンしてんだ? 少なくともさつきまでは天使だったのに……

ゼファー(ゴリアテ)と訓練中に「大丈夫?」って言ってタオルとか水分くれたあの

子はどこへ行ったんだ。

「15で海軍に入隊して早1年……あつという間だったわね」

なんでいきなり思い出話?

でも俺15歳なのか。若返ったなあ……

『社会人3年目 アニメ界において新兵となる』ってか

絶対流行らんな。

俺がそんな下らない事を考えてるとアインはクルツと回ってこつちを見る。夜の街

頭に照らされた彼女の顔は間違いなく天使だった。

これであと少し膨らんでれば……

「今日の訓練がなんの為に厳しかったか——知ってるわよね？」

おろ？真面目モードですか。眼鏡掛けたら似合うかな？

「知ってるわよね？」

「（あ、これふざけたらヤバイやつ）…明後日が入隊試験という名の入隊式だからだろ？
気を引き締めるためとかじゃないのか？…ああ、あと七武海に新しい海賊が決まったことか？」

「ちゃんと覚えてたのね。私達の入隊はかなり早いから忘れてないか気になったけれど…杞憂だったのね。特例なのは嬉しいけど、大方ガープさんのせ…お陰だと思うけど」

おいお前今「せい」って言い掛けたよな？

「平和のためとはいえ海賊の手を借りるなんてね」

露骨に話題を流すなや。そんなもってなんで心読めるんだよ。謎すぎて草も生えん。

「全くだ。しかしまさかあんな美女とはな…ふまれ」私が踏んづけてあげよつか？…嘘ですごめんさい」

なんで流れるように足を頭の上に乗っけるんだよ。ふざけただけなのに……あ、だからか。

「明日寝坊とかしないですよ？」

「ふっ誰に言ってるんだ？俺が今まで遅刻した事はないだろ？」

「そうね。けどあなたの事だからガープさんと遊びに行きそうな気がするのよ」

いや新兵が英雄と遊びに行くってそれなんの遊びだよ。それにガープと遊んだら次の日血だらけになってそう。主に動物の返り血で。

命の危険はあると思うが、死にやしないはずだ。あの人は死ななそうな所に投げ捨けないと思うし。孫思いだしさ。……そうだよね？

—————

はいどうも。この度無事に海軍に入隊しました。一兵卒のアイトです。

いやー本日から海兵としての1日が始まるわけなんですけど、何故か気づいたら高い所にいました。眼下には数え切れないほどの人・人・人。そして周りの人達見るとゴツいのばかり。あとなんか見覚えがありすぎてなんか眩暈もする。

アインが隣にいますと思ってたけどどうやらないようで場所が離れてるらしい。

「ふわあく…暇じゃのう。早帰って茶でも飲みたいわ」
「そうですね」

代わりに英雄がいるけどね。ハハ：
なんでこうなったのか、それは今日の朝に遡る。

朝起きて外出たらせんべいの袋片手にガープがいた。

昨日の夜俺が日記を付けていた事に気づき見てみると嬉しい事に記憶が全部戻りました。やったね♪

その代わりに何故かガープに気に入られている。理由は分からん。

そんなわけで個人的にこの人のこと好きだしあと和食？食べたかったから断る理由もなく部屋に通しました。

そんなわけで朝からせんべい食ってだべってました。

これが存外に面白くてついつい盛り上がっちゃったんだな。気づいた頃には隣の部屋の奴とか友人は全員出てった後だった。

いくら突っ立って話を聞くだけとは言え流石にまずい。特に俺とアインは特例でこの年で入隊するから下手したら取り消しになるやもしれん。

「ま、まずいですよガープさん！いきなり遅刻したなんてバレたら…」

「安心せい！わしの時は普通にサボった！」

「…怒られなかったんで？」

「……とにかく行くぞ！」

「怒られるの確定案件じゃねえか!!」

俺がツツコミをしている間に何やらパリンツと乾いた音が。

そこを見ると何やら腕まくりをしているお爺さんがいた。

「よし口を閉じとくんじゃぞ？」

「へ？」

なんで掴むんです？

「拳骨…メテオ!!」

あろうことがじいばい俺を空高く投げ飛ばした。

「ウソだろおおお!!」

!!!!!!

俺が空を高速で飛んでいると何やら地面を爆走する男がいた。

「ぶわっはっはっは!!空の旅は気持ちかろう！」

「なわけあるかー!!」

と言うわけだ。

あの後グループが俺をキャッチして「関係者以外立ち入り禁止」って書かれた所を通つてここに到着した。

簡単に書くところな感じ←

朝起きる↓せんべい食わんか？↓お茶入れる↓雑談↓間に合わない↓こっさり入れ
ばバレない↓要人席にIN

いやもうほんとどんな1日の始まりだよ。

にわ

あの後ガープがセンゴクやゼファア、鶴さんにバレて何故か俺まで大目玉を食らいました。

俺は悪くないと思うんですが？だって海軍の英雄にして現役中将。断れるわけないじゃないですか!?

と伝えたものの「お前らはいつもそうだろうが!!」と怒られました。

ちよつと待てそれは日記に書かれてないぞ？日記に書かれてたのは「ガープと今日も遊んだ」という事だけ。

悪い事はしてないはず。

初めつからドタバタしていたがあれから暫くは訓練・演習の繰り返しでした。つまらないから飛ばしたが：異論は無いよな？

で、今日は俺の誕生日兼昇格試験だ。

昇格試験といつても二等兵を倒したら一等兵にしてやるって言われただけなんだがね。

そんなわけで目の前には三年先輩の二等兵さんが。

「何故俺がよりによつてコイツの相手を？」

かなり不満ですと顔に書きながら構えました。

ちなみに審判としてゼファーがいます。

「まあいい、舐めた真似をする奴は見せしめなくては。気の緩みは隙を生み出す。戦闘中にそのような事になっては倒せる相手も倒せん。ならばこそ先達としてここで示さなければなるまい。それにアインがべったりしている奴を潰せば……」

うわー面倒くさそうな人だった。

前半の言葉からして真面目なのだろうが後半はただの嫉妬だな。というか俺を潰した所でアインが振り向くとは思えないが。だってアイツ俺に惚れてるわけないし。

「そろそろ始めるが……いいいな？」

「いつでもいいですよ。ゼファー先生」

「俺も大丈夫です」

そう言つて俺は訓練用の槍を、先輩は模擬剣を構える。

「それでは……昇格試験——開始！」

その瞬間に先輩は仕掛けてきた。

二等兵とは言え本部の海兵というだけあって一つ一つの攻撃が速く鋭い。先輩の武器は剣だから懐に入られたら厄介だが別段問題はない。何せ連撃となっていないし攻撃も軽くて単調。

簡単に言えば格ゲーの通常攻撃の繰り返し。

そんなわけで俺は苦勞もせず、避けて避けて避けて……

「そー！」

「グワッ!？」

先輩が喉を狙って突こうとしたところで俺はそれを避けて逆に槍を叩き込んだ。

「一本！そこまで!!」

途端にざわめくギャラリィ。ショックを受ける先輩。喜ぶ友人とガープ。拍手をする先生とその他のお偉いさん。

ん？

ガープ!？

なんでおるねん!?

「よーアイト! 良かったぞー! 推薦しただけあったわ。ぶわっはっはっは!!」

いや何がおもしろいん?

「アイト! おめでとう!!」

そう言つてパタパタと効果音を出しながら走り寄ってくるのは青髪のアイン。
うん可愛い。

アインが可愛いからいいや。

そんなわけで一等兵になりました。

一等兵つてそこまで強くないよなあ。やっぱり速く将校になりたい。その為には六式と覇氣を習得する事が急務だな。

てか伍長になりたい。俺はケロ○軍曹大好きなんですよ。特にギ○口

「ふーむ…まあいい。死ぬなよ?」

そんなわけでやってきましたゴリアテの元に。どうでもいいけどドン・クリークと似てる気がする。

まさか隠し子とかじゃないだろうな?伏線としてギンとかいたし…原作では出てるのかもなあ。

ちなみに誕生日の夜は仲間とかお偉方等いろんな方が来てなかなか楽しかったです。ただ、参加者の半分が年配ってこともあつてめっちゃ飲まされました。飲むのは楽しいからいいんだが、日本食が出なかつたので減点。

—————

翌日

「こんなんではばるな!まだまだ序の口だぞ!!」

「はい!まだまだいけます!」

—————

1週間後

「そんなやわなモンは鉄塊じゃねえぞ!!」

「オス!もう1発お願いします!!」

ああ、目の前に天使が来たみたいだな。早かったなあ俺の人生…もつとも女の子とイチャイチャしたかった。折角ボインの人が多いつてのに……

「……………何考えてるの？」

あれ？なんか天使の目からハイライトが消えたような気が……

「見た目よりも中身の方が大事よね？……………じゃなくて、折角心配したのに相変わらずの変態っぷりね」

「悪かったな。男つてのはみーんなボンツキュツボンが好きなんだよ」

「ほんつとにコイツは…つてそのグロープ…」

ん？今なんかキャラ崩壊してなかったか？折角の篠原ボイスなんだから大事にして頂きたい。何せ俺が好きな女優No. 2なんだから。1位？言ってもいいけど…知らないと思う。

「これか？お前が誕生日の時にくれた奴だよ。貰いもんだから保管しとこうかと思ったけど、使いやすそうだから使つてる。ありがとな」

「………あーっもう！これだから——」

おろ？なんか照れてらっしやる…？海がすぐ近くだから涼しいのに手で仰ぐなんてそう言うことでは？しかし残念。髪は揺れても胸は微動だにしないようだ。

「ゴホンツ！それよりも聞いたわよ？3日後にNorth Blueに行くんですつて

「お鶴さんの部隊に入って」

「ああ、いろんな海で経験積んで来いって先生（ゼファー）に言われたからな」

「先生といえばあなた毎日朝から晩までちぎっては投げられ、ちぎっては投げられてるじゃない。Mなの？なんでそこまで追い込むの？」

「んー？そりやおまえ…可愛い彼女欲しいからに決まってるだろうが」

「……………え？」

「先生も殺されてしまったとはいえ、美人なお嫁さんがいただろう？あのゴリア…先生があんなに別嬪さん貰えたんだ。てことは大将とか中將になれば綺麗なお嫁さん（ダイナマイトボディ）が貰えるはず。だからだよ」

「そ、そう……………」

—————

「そんなわけで彼女欲しいんですよ」

「なぜ俺に聞く？」

突然ですが私は今どこにいるでしょーか!?

3・2・1!! こつこでーす!ここ!ここ!!

正解はですね!ゴリアテの家でした!

「たしかにお前ぐらいの歳なら彼女がいても不思議ではないな。というかその顔で彼女が1人もいない事が信じられん。俺やガープがお前らぐらいの頃は皆んな彼女の1人や2人…それどころか3人作るもんだつたが」

「いやいや、3人つて複数持ちつていずれ刺される奴じゃないすか」

「何も同時とは言つてない。作りたいと思つた時に作つて、飽きたり合わなかつたら別れるつてもんだ。それこそアインはどうなんだ?」

よく一緒にいるだろう、そう言つて辛い酒(シエリー酒)を喉に流し込む熊。

「いやー…アインは人気がめっちゃ高いんですよ。もし仮に付き合えたとしても次の日には俺生きてませんよ」

「それは聞き捨てならんな」

「ですよねー。嫉妬はみぐるさ「そんなやわに鍛えてないはずだ。何せこの俺が徹底的に鍛え上げたんだ。覇気はまだでも、六式の剃・月歩・嵐脚・紙絵が出来るんだ。過小評価はよせ」」

この訓練馬鹿が…

「それで？アイン以外だと誰かいらないのか？」

「いませんけどなにか」

「寂しい奴だな…仕方ない、俺が人肌脱いでやろう」

—————

出港日

今日が初めての遠出。それもNorth Blue。ドフラミンゴとかジェルマと
かいるんだろうなあ。合わないように祈つとこ。

あ、でもジェルマはサンジが子供の頃なんか大移動してたよな？てことは合わない
な。

「それじゃあよろしく頼むよ。アイト。初めてだからって遠慮はいらないさ。実力があ
るんだからな。ただドフラミンゴに遭ったら気を付けな。奴は厄介だからね」

アツハツハツハツハ…フラグ回収はえー。

「それとゼファーが言ってたが…アンタ本当に本部尉官並みの実力あるんだろうね？」

ナニソレキイテナイ

「覇気とかからして充分それくらいありそうだけど……まるでつよそうじゃないんだよねえ。ま、とりあえず行くよ！」

そう言っただけでなく、マントを翻すお婆ちゃん。意外にお胸がお有りで。仲間の海兵も結構な数が女性なのな。大体3分の1ぐらいか？

「さてさて、アイトロー！これを持っけ!!」

そう言っただけで渡されたのは封筒だった。投げたのは遠投の盟主・せんべい。何が入っているかは分からなかったが俺はそれを受け取り船に乗り込んだ。

てか誰が尉官並みの実力とか言っただろな。まああの2人のうちどっちかだよな。

さんわ

マリルフォードを出発してNorth Blueへ向かう鶴率いる海軍船計3隻。一隻に少なくとも200人ほど乗船している。

本来はここまで大規模なものにする予定はなかったそうだが、アイトの知識通りにジェルマがEast Blueに移動した事で今荒れている為特別に増やしたそうだ。

グランドラインに位置するマリルフォードからNorth Blueに行くにはカームベルトを通る必要がある。しかしカームベルトは海王類の巣窟。

故に……

「右舷より1体出現!!」

「砲弾装填完了!!」

「帆を畳むんじゃないよ! 止まるわけにはいかないからね!」

『了解!!』

このように激しい戦闘が行われる。

いくら船底に海棲石を搭載していたとしても3隻の船が通過してたらバレてもおかしくはない。

「放てえー!!」

本部大佐の合図に従い一斉に砲撃が行われる。流星は鶴さんの部隊。放たれた砲弾はほぼ全てが命中した。

「ギャオオオ………!!!」

衝撃に顔を歪める海王類。一隻だけだとそこまでのダメージにはならないかもしれない。しかし3隻いるとなると話は別だ。流星の海王類と言えども怯んだ。

大参謀・鶴がその隙を逃すはずもなく六式を使える部下を連れて襲いかかった。

「何してんだい！アンタも来な!!」

そして当然俺もそのうちの一人。鉄塊とか指銃は出来ないがそれ以外のは扱える。ゴリアテ曰く、最低レベルらしいが。

—————

戦闘後

「アンタなかなかやるじゃないか」

そう言っただけで話しかけてきたのは洗濯ばあちゃん。もちろん鶴さんだ。

「どもつす。まだ四式しか使えないですけど。お役に立てたようで」

「十分さね。四式つて言つても残りの2つも出来る時があつたじゃないか。まあ練度はまだまだ低かつたが」

上げるのか下がるのかどつちなのやら。上げて下げるつて意外と心にくるのね。

そこで俺は恨めしげな視線を送る。

「今日は目標の島に行く途中で中継地に寄つて一泊するけどアンタはどうする？多少なら観光もして構わないが、何かやりたい事とかあるかい？」

無視ですか。そうですか。

「やりたい事は特にないですけど……もし可能なら鶴さんの時間を頂きたいです」

「おや、いきなり口説くのかい？悪いが尻の青い若造は守備範囲外だね」

「分かつて言つてませんか？……どうせならこの航海中に六式身につけたいんですよ。ゼ

フアー先生に一泡吹かせたいので」

「アイツに一泡を？それはまた難しい内容だねえ。……何せもと海軍大将。実力は当時とさして変わつてない」

あーやつぱりそんぐらい強いんだ。納得だよ。だつて次期3大将がのされてるんだもん。

とはいえ強くなつてモテるためにはまだまだ鍛えなくちゃならない。

実戦をする事で得られる経験も多いだろうし、それにプラスする形で鶴さんに修行し

てもらえたらかなり効率が良いはず。

「アタシの鍛え方でいいならたっぷり扱いてやるさ。覚悟しなよ?」

「それならご安心を。普段からちぎっては投げられてますから。この前なんか殴り飛ばされて軍艦5隻貫通しましたから」

「それは……大丈夫なのかい?」

鶴さんがなんか心配してくれているが普通ではないか? 最近の俺は海の底やら空島まで吹っ飛ばされている。ゴリアテ曰く鉄塊が出来ればそうならなくなるそうだ。

だから大丈夫さ。はっはっはっは…… (白目)

—————

翌日

ここはNorth Blueのとある海域。

俺は鶴さんとの実戦訓練で体がかなりボロボロにされたので今は見張りをしている。

あの人も大概だ。デコピンで人を砲弾のように消し飛ばすんだから。武装色つて凄
いよなあ。

そんな風にのんびりと回想してたら左舷に何やら特徴的な船を発見した。というかあの船何処かで見たような…

「…フラミンゴ？」

「どうした？」

「いやあれ…」

「どれどれ………?!?左舷より海賊船発見！繰り返す！海賊船発見!!距離およそ500！海賊旗からドンキホーテ海賊団と思われまます!!」

先輩が大声で周りに伝える。すごいうるさい。拡声器とかないのこの声量ってバケモンや………

「アンタら準備しなよお!!」

『はっ!!』

「お鶴さん武装完了しました！」

「こちらもです！」

「よし…アイト！アンタも行けるね!？」

「うす！」

—————

「放てえー!!」

「接舷しろお!!」

突如始まった砲撃戦。互いに進行方向が間反対の為すれ違うことになる。もちろん通り過ぎす事なんてさせやしない。大佐に連れられて部隊が乗り込んでいく。

「乗り込…ギヤアアア!!」

「うわああ?」

しかし敵はあのドンキホーテ海賊団。乗っている下つ端も実力はこつちの海兵とそこまで差はない。その上強い幹部達。

そしてその中でも幹部筆頭の3人組が海兵を蹴散らしていた。

鼻水を垂らした男・トレーボル

「んねー…んねー…これで何人目だ?もうかなり殺したな。べへへへへ」

ヒラヒラ剣士・ディアマンテ

「うっはっはっは…!残念これは鋼鉄のマントだ」

声と体格が反面教師・ピーカ

「ピツキヤピツキヤピツキヤララ…さあ、俺達の手でドフィの道を開くのだ」

対するこちらにも本部の将校達が立ち向かっていく。そしてドフラミンゴと鶴さんもさつきからそこかしこで戦っている。多分鶴さんが優勢だ。早すぎてよく見えんのよ。

で、さっきの幹部以外にも強い幹部がいる。そんな中子供もいるけど基本的にみんな強い。実際、今現在戦ってるけど中々落ちない。

ただ残念な事にローではない。折角ならシヨタのローを見たかった：

もうすでに抜けたのだろうか？抜けてるのならやりやすい。能力をうまく扱えなくてもローは強いだろうし。そもそも戦いたくない。

でもモネとシユガーらしき人がいたのは確認できた。シユガー1人だと見つかったらどうかがナイスなボディが近くにいたからすぐに見つけられた。

そんな事を考えながら俺はようやく空中から2人の子供を叩き落として甲板に降り立つ。飛行機みたいなやつを蹴落としたからベビー5にダメージはない。てか攻撃出来ない。

因みに空飛んで戦ったのは月歩を習得したから使いたかったからだ。何度やっても不思議な感覚で慣れない。

「グッ！コイツ速いでヤンス！」

「気を付けてバツファロー!!」

俺としてはローと比べてこの2人ならそこまで気にはならない。てか子供？と戦うって今更だがどうかと思う。一応行つとくが俺は酒飲めるから大人だ。

いやでもベビー5は結構グラマラスだな…子供ではないな、うん。

「つたく何手間取ってんだ」

その言葉と同時に現れてのはセニョール。この頃はまだそこらのイケメンのようだ。

俺は槍を右で持つて後ろに構える。

対するセニョールは両手をポケットに突っ込んだままだ。

数秒後どちらともなく飛び出した。

セニョールは遠距離攻撃は銃ぐらいしか描写はなかったはず。一方の俺も嵐脚を打つには溜めを作る必要がある。

そのため近接戦の乱打戦となる。

俺が槍で突けばセニョールがそれを流し、セニョールが蹴りを繰り出したら俺は紙絵で避ける。

そこからパワーではまだ敵わない俺は剃と月歩を多用して高速戦闘にも連れ込ませる。

何回鏢迫り合いみたいになつただろうか。2桁以上ぶつかり合つたところで俺の槍がセニョールの腹部を払いで吹っ飛ばした。

もつとも飛ばされたセニョールはすぐに体制を整えて来たからそこまで聞いてなさ

そうだが。

「グフウ!?!…ゲホ、ゴホ…やるな」

そろそろ能力を使ってくるかと思つたその瞬間。

突如船が何かに激突した。

「うわあああああ!?!」

「な、何が起こつた!?!」

その衝撃で多くの海兵が海へと投げ出される。フラミンゴの船に乗ってる奴らも殆どが落とされた。

「……………ここまでだな」

そして俺の意識が他に向いた隙をセニヨールは逃さなかつた。

姿が消えたと思つたら俺は吹き飛ばされていた。

その結果俺の意識はそこでプツリと音を立てて途切れてしまうのだった。

—————

戦闘後

「起きな!!」

「へブツ!？」

俺の意識を戻したのは鶴さん。

戦った後だったのになんてパワフルなんだ。

やはり胸が大きいからか………？

「とりあえず無事だったようで何よりだ。体は動くかい？」

「あつはい。つて、いつつ……」

なんか鳩尾と背中がめちやくちや痛い。

「意識が戻ったんならすぐに救助に行きな。体制を整えて直ぐに追うからね」

—————

「大丈夫ですか？」

「ああ、すまない。助かるよ」

「怪我は無いですか？」

「海に落ちただけで後はかすり傷だよ」

それ結構地味に痛いだろ。めっちゃやしみそう。

「まあ敵の声で気が緩んでしまったが故なんだけどね。敵の声を聞いた瞬間に俺含めて

結構な数の仲間が笑っちゃって……」

ああ……ピーカに吹っ飛ばされて落ちたのね。

意識が戻ってから色々話を聞いたが、なんでもベタベタするやつが海軍の船につけられていたそうだ。乗り込むために使うのかと思つたら突如それを引つ張つて軍艦同士をぶつけたんだとか。

なるほど。ベタベタチエーンをそうやって使つてきたのか。

うーむ……してやられたなあ。

流石はドンキホーテ海賊団。一癖も二癖もある。

てかモネはまだ乗船してたのな。これはまずい。あんな美少女に手をあげることが果たして俺に出来るだろうか……

よんわ

救助が終わってから俺達は一先ずドンキホーテ海賊団が行った方の島に停泊する事にした。

あのまま追っても問題はなかったが無闇に探すよりも情報を集めるんだそうで。

この辺りにはそんなに島がないから特定するまで時間がかからないらしい。

そんなわけで俺達は一日中情報収集に勤しんだ。その結果その日の昼にはドンキホーテ海賊団の船を見つけることができた。

というか、俺たちがいる島の隣の周囲がネズミ返しになつて島の裏側にいた。距離は1kmくらい。見分色で気付かなかったのかと鶴さんに聞いたら…

「アタシはどちらかという武装色が得意分野なんでね。——文句あるかい？」
つて脅された。

—————

翌日 隣の島

俺は今件の島に仲間達とこっさり上陸していた。

海軍はこの島で戦うにしても海上で戦うにしても島民の避難とか保護はしなくちゃあならない。そんなわけで俺含めて30人が上陸に成功したんだ。

因みにこの部隊の指揮官は俺です。

ん？つてなるよな。俺もなった。でもねついさつき言われたんですよ。

「アイト！30人くらい連れて島民守つてきな！出来たら本部曹長にでも推薦してやるよー！」

まあこの前の一等兵になったのと同じ感じだな。

そんなわけで俺たちは島に上陸して避難指示をしようと思つたんだが、ネズミ返しを超えると俺の目には信じ難い光景が広がっていた。

—————

数時間前

「頼んだぞ、モネ。海軍が来た時の為に少しでも時間を稼げ。町を荒らされていれば奴らは助けに行くしかないからな」

「かしこまりました。若様」

ドフラミンゴ達は追撃を恐れてはいたが自身も仲間も大小様々な傷を負った為暫しの休息をしていた。

もちろんただ休息をしていたわけではない。傷が治るのを相手が待つわけないのだから。そこでまだまだ余力が十分にあるモネやシユガーと言った者達を動かす。

モネにあらかじめここに待機させていた約200人の部下を率いさせて港町を占拠したり、おもちゃを捨て駒用に試運転したり、幹部の中でも動ける奴らを中心に情報を収集させたりもした。

(モネは最悪捨て駒になつて海軍を引きつけてくれればそれでいい。それに自然系の能力者。そうそうやられないだろう。そのために町を派手に壊させた。…とはいえ、アイツを消してもそこまで変わらなかつたとは。まだ他にも内通者がいるかもしれないな) ドフラミンゴは幹部以上の仲間を「家族」と呼び大事にしている。しかしそれはあくまで自分の思い通りに動けばの話なのであった。

—————

「()はひどい…」

「誰がこんなことを…!」

仲間達が呆然としながら同時に怒りを覚えながら燃える町を見ている。生物学的な

ものらしく、火は動物に恐怖を与える。特にここまで大きな火は普段の実戦とはまた別の恐怖を与える。

だが、何にせよ。足を止めるわけにはいかない。助けるべき市民が困ってるなら助けないなんて理由はない。

「行くぞ！市民を救出する！！各自2人から3人1組で迎え！俺は島中を飛び回って主犯格を探す！！誰か鶴さんに連絡しろ！」

『了解!!』

俺達はすぐさま街に入ってしまった。放火をした犯人はどこにいるのだろうか。恐らくだが火災の被害がそこまでないところだろう。自分達まで燃えては意味がないし。

この放火とかで荒らし回ってる奴らは昨日戦った奴らと同じようなものを身につけている。そこから考えるまでもないがコイツらは十中八九ドフラミンゴの部下だろう。

俺は市民の救出を最優先にしながら可能な範囲で海賊も倒してく。屋根の上からざっと見た感じでも結構な数がある。多分100人以上いる。こんなに動ける奴らがあったのか。

俺が屋根の上を飛び回って救出していたからだろうか。周りに指示を出している敵の主犯格らしき女性が俺めがけて何かを投げてきた。

俺はそれを走りながらなんとか紙絵でかわし槍を構えて体制を整える。

「つたくいつたいただが……」

「避けられちゃったみたいね。……次は当てなきや」

その声は女性の声だった。見覚えがあつたためアイトは目を見開いて屋根から飛び降りた。

顔を動かす度に艶やかに揺れる光り輝く緑の髪に、長いまつ毛と雪のように真っ白な肌、出るところが出て締まるところは締まっている抜群のプロポーション。

間違いなくモネだった。

（あれは確かベビー5達を倒したやつね。セニョールにも能力なしとはいえ張り合つたようだし……雑兵はいないほうがいいわね。）

そう思いモネはここから離れさらに被害を拡大させるように指示を出そうとした。しかしある者がそうはさせなかった。

「……綺麗だ」

「……………え？」

「俺の名前はアイト。もし宜しければ女神様……貴女のお名前をお聞かせ願いたい」

原作の知識があるうとなかろうと美少女の前で男は無力である。何を思ったのかアイトはモネの前で騎士のように跪いた。加えてアイトはここでとある物を無意識に状況に合わせて暗唱していた。

「え、ええつと…わ、私の…ことかしら？私はモネだけだ——」

「モネ！なんと素晴らしい名前なんだ！貴女の美しさを体現しているいい名前だ！！貴女のような世界最高峰の美少女に会えるとは…俺は何という果報者なのでしょうか…！！」

「そ、そう？あ、ありがとう…ごいませ…」（落）

「モネよ！この後予定は空いているだろうか?!出来ればこの後貴女の時間を10分、いや5分…いや1分…は少なすぎるが時間を貰えないだろうか?!」

《この海兵は何を言ってるんだ…》

一応言っておくとアイトもモネを前にしてドギマギして緊張で何言ってるか理解してません。

「ええ?! 詳しいや…その…——」

《こんなんでこの人が頷くわけが——》

「…わっ私で良ければ…いくらでもいい、ですよ?」

《いいのによ!!!》

「本当か!!ではしほし待っていてくれ!周りの海賊を捕らえねばならぬのでな!!」

アイトを見てはもじもじして顔を赤らめるモネ。ここまで完全に惚れていた…というか恋をしていた?が、そのアイトの言葉が耳に届いた瞬間。180度雰囲気を変化した。

「…残念です。若様の邪魔をするのなら……！私が相手になるわ！」

そういうや否やモネは一気にアイトの懐に入り込み蹴り飛ばした。

「グハツ!」

アイトは突然のことにまるで反応できず家に突っ込んだ。

「あなた達は今のうちに島中を荒らしてきなさい」

『はっ!!』

さて…そうやってモネはアイトが突っ込んだ家を見て、確実に仕留めるために腰につけているレイピアを構えて能力を使い周囲をここだけ雪景色に変えた。

「…どう来るかしら」

—————

その頃吹っ飛ばされて家に突っ込んだアイトは月歩で空に人知れず登っていた。

いやーアツハツハ…危なかった。

もしモネに蹴られなかったらあのままお持ち帰りしようとしてたかも。そもそもなんでアインは俺にあの手紙を渡したんだ？ゴリアテに頼んだやつとは別件か？

にしてもどうするかねえ。

てか能力もう持ってんのか。厄介なことこの上なしじゃねえかよ…武装色は大分モ

ノになつてゐるけどどうまくいくかなあ…

「まあやるしかないか……!」

海兵として市民に対する乱暴は鎮圧せねばならん。美少女だろうが怪物だろうが立ち向かわねば、男が廢る!!!

ついでに戦つてゐる最中に胸を触らせて頂こう。決して本命ではない。本気で止めなきゃと思つてゐるし。

—————

「来ない…「セイヤツ!!」ツ!?!」

モネが咄嗟に避けた為突き刺した槍はその衝撃で粉々に砕け散つたが。

モネが避ける前にいた場所に目をやると槍を突き刺した結果クレーターとなつた地面があつた。

「まさか空から来るなんて…あなたも能力者なの?」

「いや?別にそんなこと——ないよ!!」

「ツ!!!」

剃で一気に距離を近づけたアイトは武装色を纏つた拳を振り抜く。これは雪の柱で

塞がれるが一撃で破壊された事にモネは驚きを隠せなかった。

勢いそのままにその隙を逃さずアイトはセクハラギリギリのところまで懐に入り込んで内股狩りで組み伏せようとするも雪になって逃げられる。

その後も懐に入り込めたら一本背負いや大外狩り等を次々と仕掛けるもなかなか上手く決まらない。

「ハア…………ハア…………なんで逃げるんだよ」

「なんか邪な視線をずっと感じるのよね」

「ギクツ」

あれから暫く戦ってたがモネはひたすらこちらを冷やしたり格闘したり雪の弾丸を打ってきたりと色々してきたが俺はそれを鉄塊や紙絵で対処する。

対する俺も槍で色々と攻撃をしたり空からひたすら嵐脚をしたが雪に潜られて躲されたり互いに決定打にかけていた。

ちなみにこの前の鶴さんとの戦闘訓練で六式は全部習得してます。覇気は武装色はいけるけど武器とか嵐脚に付与は出来ない。

ここまで出来たのはかなり早いですが死線を潜ってきたおかげだと思う。まじで鶴さん容赦ない。

そんなわけで膠着してたわけだが戦いは予想もしない決着を見る。

「!?おい！危ねえ!!!」

「え？」

どこからともなく「軍艦の砲弾」がモネに当たりそうになったから俺は咄嗟に飛び込んでモネを庇った。

「軍艦の砲弾」はそこらの船の砲弾より2回りぐらい大きくその分威力も高い。鉄塊が出来てれば良かったのだろうが動きながらの鉄塊はまだまだできない。

お陰で俺はその場に膝をついてしまう。

「だっ大丈夫!?怪我は……」

「俺は……敵だぞ?今がチャンスだと思うが……?それよりも今打ってきたの——」

モネが心配して駆け寄ってくるが俺は砲弾が来た方に目を向ける。

そこにいたのはドフラミンゴの船だった。ドフラミンゴもデカイ砲弾を打てるのを持ってたのか。

「ドフラミンゴだよな……」

「……………構わないわ」

「なんで？」

「私達は拾われた身だったから…若様が無事ならそれでいいわ」

「…なんだよそれ。モネが自然系の能力者だから問題ないとおもったのか？だとしたら阿呆だな、アイツ。100%の物事なんて存在しない。信賴してる？なわけない。口先でそう言ってるだけで今の行動が信賴の証になるわけがない。そもそもドフラミンゴが無事だからってモネが無事じゃなきや意味がない」

「だとしても…私は——」

「決めた。モネさ、うちに来なよ」

「恩を返し……………え!?い、今なんて——」

「とりあえずお持ち帰りさせてもらおうわ」

「チヨツ……………どういう事!？」

ごわ

俺は折れた槍をその場に捨ててモネをお姫様抱っこをしてその場から離れて鶴さんの元へ向かっていた。

仲間達には海賊達の制圧、火災の鎮火が完了したと報告が来たのでそのまま市民の救助してもらっている。ただ多くの海賊が船で逃げてしまったそうだ。戦力の分散とか時間稼ぎだったのだろう。

モネを届けるだけならそこまで時間もかからないし速く戻り救助をするつもりだ。ただドフラミンゴと鶴さん達がまだ戦っていると、流れ弾に注意して向かっていたが杞憂だったようでもうすでに戦闘は終わっていた。

遠くの方にフラミンゴが見えるがこれ以上の追撃はしないようで鶴さんは碇を降ろさせて停泊の準備をしていた。

「アイト！連絡は聞いたよ。あとは救助で終わりなんだね？」

「はい！ただ海賊の三分の一が逃亡したものの捕らえた者達もそこそこ多い為護送はかなり時間がかかるかと。それにここだけに部隊を駐屯させていたとは考えにくいので

他の周辺の島も治安確認等をすべきと思います」

「そうだね。その辺りの判断も十分合格点だ……が、その娘は誰だい？」

そりや聞くよね。ここで嘘ついても良いんだけど、バレたら後が怖いから正直に言う
としよう。

「今回街に被害を出していた海賊の指揮官……恐らくですがドンキホーテ海賊団の幹部と
かでは無いかと」

「なるほど捕縛したわけだね。よくやったよ。これなら尉官に昇進させることも余裕で
出来るだろうさ」

「……その事でお願いがありません」

「なんだい？言ってみな、ある程度の我儘は聞いてやるよ」

「できればコイツを俺の部下として入隊させることは出来ないでしょうか？勿論、最初
は監視付きでも構わないので」

「アンタ……いくらその娘が美少女だからってそれは聞けないよ。大体なんでアンタの
部下にするんだい？」

「コイツ、モネって言うんですけど根が真面目で凄いい忠誠心もあるし海賊にしておくに
はもつたいたいと思っただからです」

「ふーむ……モネで合ってるかい？お嬢ちゃん」

「は、はい」

「アンタはこれからどうしたい？コイツの部下になるか牢屋に入れられるか……はたまたここで命を落とすか、好きな道を選びな」

「……………私は——」

—————

数日後

俺とモネは鶴さんの船に乗ってマリソフオードへと帰ってきた。

そんなに長い間船に乗ってたわけではないが久々に戻ってきた気がする。歓迎の敬礼をしている海兵達に手を振りながら鶴さんの後を俺とモネは歩いていた。

一応モネは鶴さんのマントを羽織ってる。海賊だともしバレたら面倒だからな。バレないと思うけど。

「今更聞くのは変かもしれないけどなんで一緒にきたの？島から出る時とかいつでも逃げ出せたと思うけど」

「うーん……なんででしょうね……分からないけれど今は海軍の一員にでもなっておけば、いずれスパイとして良い情報を流せるでしょう？」

裏切る気満々か。でも堂々としてらっしゃるのは怯えたりするよりかは良いか。接しやすし。

てか鶴さん逃す気は全くなかったよな。選択肢のうち2つがバッドエンドってどうかと思う。

にしてもドフラミンゴは許せん。モネという美少女を犠牲に自身の身を大事にする事もそうだが、それ以上に市民を蹂躪する事は決して許せない。天竜人の一族だからか本当に容赦のない惨劇を部下に作らせていた。

何年後かは直ぐに分からんが頂上戦争の2年後には必ずルフィと共にぶつ倒す。その為には今のうちにイツシヨウに接触すべきか？

……いや無理だな。何一つ知らないし。それならいつその事頂上戦争の時に消すか？

「アイトー！」

「歓迎の敬礼とかを通り過ぎて諸々の報告を済ませて宿舎に向かっていると目の前に絶壁の天使が現れた。あれから短期間で結構成長したらしく絶壁ではないかもしれないらしい。」

しかしモネというマグナムがいる以上、必然的に絶壁となってしまう。そんなアインにはいずれ浴衣とか着せたい。絶対似合う。

一方その頃海軍の重鎮達と言うと……

「それでこのモネだが、どうしたものか」

「ぶわっはっはっは！まさか口説き落としてくるとはな！」

「笑い事ではないぞ！ガープ！海軍が海賊を仲間として引き入れるのはともかく！性欲の可能性があるのならもつてのほかだろうが！」

「まあ落ち着けセンゴク」

「ゼファア…しかしそうは行かんだろう。そもそもモネはあのドフラミンゴの部下だったんだ。信用はならん」

「安心しなよセンゴク。モネの人となりはアイトの言う通りいい娘さね。ある程度の期間は監視をつける必要があるがね」

「ならばいいが、監視はどうする？」

「アインに任せればいいんじゃないかい？この際、アイトの直属の部下としてアインも入れるかい？」

「そうなるかと少なくともアイトには将校、大尉にはなつてもらわねばならんが——」

「大丈夫じゃってセンゴク。アイトは下心で2人に手を出したりせん。あれはそう言う男じゃ」

「だろいな。アイトの師として言うがアイトは娼館どころかアイン以外の女子に話しかける事も苦手なようだからな」

「それはそうとガープ。アイトに渡したあの手紙はなんだい？アイト曰くあれが発端で

モネを口説いたようなもんだよ?」

「あああれか。あれはゼファーと話してアインにそれとなく書かせたんじゃよ」

「……何を書かせたかったんだい?」

「?そりゃあアインが言つてもらいたい言葉じゃよ。それをアイトに言われたら間違はなくアインは落ちるじやろう?」

「それにアイトがアイン以外に話す時の参考にもなるだろう。あれは我ながらいい考えだったな」

「アンタらはアホか!なんでアンタらが間違えてるんだい!?アインはそもそもアイトが好きだろう!!それにアイトにアインを意識させる手紙なら心配する手紙が普通だろう!?なんでそんな的外れな事を書かせたんだい!」

「いや…それしか思いつかなかったし」

「アンタらは……!!」

「ま、まあまあ落ち着け鶴ちゃん。コイツらも悪気があつてやったわけじゃないだろうし——」

「だからこそだろうが!いいからそこに正座しな!!3人とも全員だ!!」

「ツ!?な、なんでまた——」

「いいから座んな！センゴクもだよ！この脳筋2人組を制御するのはアンタだろう！」
こうして彼らの夜は過ぎて行つたんだそうだ。翌日ガープさんとゴリアテがげつそりしてたから聞いてみたけど、そういやセンゴクさんとは話した事ないなあ…

—————

1週間後 就任式

諸君おはよう！今日は快晴！絶好の准尉就任式だ！そう “准尉” のだ。

鶴さんの言う通りに俺は尉官へと昇進した。色々すつ飛ばし過ぎだと思う。でもこの階位は確かフルボデイより下だったはず。そう考えると大した事無さそうだな。（失礼）

あとなんかアインも軍曹になった上に俺の部下になつてる。モネの監視役らしい。まあだからと言って何か変化する事はないな。今日もゴリアテとガープの訓練があるし。

ちなみに一昨日にゴリアテに勝負挑んだんだよ。結果から言うと今までのの中では一番粘れた。やったね♪1分だけだけど。

あと武器を頑丈にしてもらつた。この前まで使つてたのは木で出来た槍だったけど今回ののは鉄だけで作られてる。なんでもガープが圧縮しまくつて作ってくれたんだとか。なるほどそれで変な形なのか。

そんなわけで訓練が始まる。今回から六式をより強くしていく事になるんだが、見聞色の覇気が中心の訓練になっている。

訓練方法は簡単。目隠しをして六式使って戦うだけ。これを満足いくまで鍛えるんだとか。10年以上掛けても出来無さそう。

「ぶわっはっはっは!!ア、アイトそれは人じゃなくて街灯だぞ……!!がっはっはっはっは!!」

「そう笑ってやるなガープ。初めては皆あんなもんだろう」

目隠しをされた俺はヨロヨロと立っていた。するとどこからか拳が振られる。そして俺は避けられず顔を殴られる。

さつきからずつとこの調子だ。俺だつて真面目にやってる。馬鹿にする奴は結果で見返すのが俺の流儀というか前世からの格言みたいなもんだが…ガープは許さん。

習得したら真つ先にぶっ倒す…!武器は作ってくれてありがとう。それは感謝してる。けどこれもなかなか曲がってるんだよなあ?ならいいよな?

この時俺は完全に失念していた。もうタイムリミットが直前まで迫ってきていたあの事に。楽しい日常は突如として崩壊を迎える。誰も望まない形で。

—————

19歳 中尉昇格試験

俺は今日モネやその他の部下計200人を率いて巡回に出る。近場とはいえ回るのはグランドライン前半の海だ。懸賞金も高いのに遭遇することも多い。

ただ戦う必要はない。今回俺に与えられた試験は部隊を無事に生還させること。凶悪な海賊と遭遇した場合は撤退を最優先にする事を義務づけられている。

正直言つて助かる。何せ俺はまだ見聞色が中途半端だ。本当はアインと共にゴリアテの演習艦に乗りたかった。そっちのが絶対実力を上げられるし。

「そんじゃあ気をつけてな、アイン。それにピンズも」

「ええあなたが驚くような戦果を上げてみせるわ」

「拙者は無理しない程度で頑張るのみ」

「ゼファー先生がいるし2人とも強いから大丈夫だと思っけど…油断はするなよな」

俺達が話していると俺の部下の1人が走ってきた。

「アイト少尉！準備完了しました！」

「よし！じゃあ行くこうか…！」

こうして俺は1ヶ月に及ぶ試験にアインとピンズは演習に出発した。

尉官

ろくわ

今ここはグラウンドラインのとある海域。船の上を大きな鷗が飛んでいく。今回の試験は5つある中継地点を順番に時間通りに停泊する事が最優先事項だ。

ただ残念な事に海軍船が一隻だけで航行していると海賊達は嬉々として襲いかかってくる。弱そうに見えたからと毎回言ってくるけどなぜそう見えるのかは知らん。

今は1週間かけて2つ目の中継地点に向かつてる最中。1つ目からの航路で3回も海賊との戦闘になった。どれも懸賞金は2000万くらいでそれなりに規模が大きい。

もつとも俺一人で全員倒したけど。六式と覇気のある程度習得してる以上、能力者に遭遇するもそうそう負けない。思っていたよりも強くなつてたようだ。

「少尉！中継地点が見えました！」

「よし。お前ら上陸準備をしろお！」

『はっ!!』

みんなが俺の号令に従って準備を始める。俺は鶴さんとの航海で准尉になったと思つたら何故か少しして少尉に昇格した。

理由は特に聞いてないが早く階級を上げたい俺としてはありがたい事この上ない。だから二つ返事で受けた。

「アイト、全部終わったようよ。私達も行きましよう」

そう言つて現れたのはチョモランマ・モネ。海兵の格好をしてる姿が眩しい。これだけでもこの世界に来て良かったと思う。

—————

捕らえた海賊達を無事に引き渡し俺達はしばしの休息をしていた。といつても俺は責任者としてやる事がある為ナシだけどな。

それから順調に航行をしていると俺の電電虫が鳴り出した。なんでも新しい七武海としてドフランミンゴが決まったんだとか。

俺個人としては特に思うところは…あるけれども俺がどうこう言つて変わる事じゃない。出来る事ならドレスローザに助けに行きたいが、俺の今の實力ではどうしようも無い。

だが必ず仕留めてみせる。その為には訓練が大事だな。

そんなわけで次の中継地点目指して航海中だが訓練開始だ。

3人ずつ俺に挑む形でローテーションで訓練を行う。モネは対一でやりたいと言われたからそうするけど。待つ間彼らは仕事だ。ちゃんと人員は配置しとかないといけないからな。

「次は私ね。能力は有りかしら？」

「船に被害が出ない範囲で好きにどうぞ」

その言葉と同時にモネが仕掛けてくる。甲板を銀世界に変えて背後に瞬間移動をして刺してきた。

俺は序盤で守りに徹するつもりで鉄塊をしてたため運良く防げた。けどなにそれアイスピック？それ刺したの？殺す気か!?

恐怖を感じた俺は剃で距離をとり武装色を両腕に纏って構え直す。モネも覇気について大体知ってる為迂闊には攻めてこない。

対する俺は再び剃で急接近し鳩尾を喰らわせる。当ててくるとは思ってたのかモネはその場に膝をつく。勝負有りだ。

その後もどんどんローテを回してひたすら訓練を行った。勝率は10割。完勝だ。

しかしずっと訓練をしてた為航行速度が下がってしまい、中継地点につく事なく海上に碇をおろすハメになったが仕方がない。

真夜中になり見張りを除いて全員が眠りについた頃、俺は胸騒ぎがした為船の後ろでシエリー酒を飲んでた。軽く飲んだだけでこの酒は酔える。

日本酒並みに辛いなこれ。初めて飲んだ時はすぐ酔っちゃったが慣れればこれほど美味しい酒は中々無さそうだな。

俺が1人寂しく飲んでいると背後から誰かが近づいてきた。料理長かな？ツمامミが無いから持ってきてくれたのかと思ひ、貰うために手を出しながら振り向くと……

「ムニユ」という効果音的なものが聞こえた。

あれ？なんだこの柔らかいのは……？ツمامミにこんな柔らかいのがあったっけ？………しかしこれ病みつきになる感触だな。

俺はそのまま揉み続けていたが突如海に落とされた。

「ゲホツ!?ゴホ、ゴホ……!!な、なんだいつて人の胸を散々揉んでおいて理由を求めろのかしら?」

見上げるとそこには月明かりに照らされたモネがいた。

海に落とされたお陰で酔いが覚めた俺はとりあえずモネに謝罪したが俺の事を異性

として見てないのかそっけない返事をされた。

「せっかく心配して来たって言うのに…」

「心配？なんでまた…俺なんか変だったか？」

「変って言うか、なんと言うかはわからないけれど…それよりも私と最初戦った時は手を抜いてたの？今回は随分と殴ってくれたじゃない」

あー…御立腹のようですね。ちなみに顔とかは一切攻撃してないのでご安心を。鳩尾しかやってないから大丈夫だと思ってたが違ったようで。

「別に怒って無いわよ。この前と大分違ったからその理由を聞きたいのよ」

「なんでこう俺の周りの女子は読めるんだ？…で、この前と違う理由だっけ？あの時はなんかいい奴ぼく見えたから手を出す気になれなかったんだよ」

「…一目惚れってやつかしら？」

「いやそれは違うけど、そうだったらもつとしつかり告るし。直感ってやつだよ。説明は無理だな。まっ普段は性別に関係なく悪いことしてるやつにあつたら潰すから安心しつよ」

「ふーん。そっじゃあ私は寝るわ。あなたは服乾かしてから寝なさいよ」

そう言つてモネはさっさと帰っていく。なんか胸を守るように歩いている気がする。

すんませんでした。

—————

翌日

今日も今日とて訓練と行きたかったが昨日の遅れを取り戻す為にもそうはいかない。中継地点に着いたら必要最低限の物資の整理をしてすぐに出発。

4つ目の中継地点を目指して向かつてる途中で商船を襲つてる海賊団を撃破し、さらにそこから近くの街を襲おうとしている海賊団も撃破して無事中継地点に到着。

いよいよ次がラストだ。1週間かかる為気を緩める事なく行こう。にしても海賊船多すぎないか？ここまで戦うのだろうか？

そんなこんなで最後の5つ目中継地点に到着。ここあたりは流石に海賊がないように、後はマリンプォードに戻るだけだ。油断せずに遭遇した海賊を撃破していい。

今俺たちの船の前には巨大な海賊船がある。今まで見た中でもかなりの大きさだ。とは言え見た事ない海賊旗なので部下に調べてもらつてる。

「アイト少尉！あれは懸賞金50000万のパラダイス海賊団のシユバルツです！副船長が2人いて共に2500万と19000万の賞金首です!!」

「了解。アイツらは街を攻撃してるのか？」

「そのようですよ！かなりの数が攻め込んでいる模様！」

ここで見逃せば俺は試験の合格を貰えるのだろう。だがそれは市民の命の代償としてだ。そんな事で昇格などしたいわけがない。後ろから強襲並びに近くの支部に増援を呼ぼう。

「海軍が市民を助けられないなどあつてはならん！これより戦闘を開始する！曹長は増援を呼べ！！軍曹は部隊を二つに分けて1つは俺に続け！もう一つは島民を救出せよ！！モネは俺と来い！」

『了解！！』

俺はその言葉と共に槍を構えて月歩を使い海賊船に襲いかかった。海賊船の中は喧騒に包まれており、俺の事にはまるで気づいてないようだ。

そこで俺はそいつらを六式と覇気をフルに使って片っ端から片付けて行く。質は高くないようで俺の部下達も難なく撃破していく。結果大した事なく2人を除いて全員を撃破出来た。

「なんだあ？テメエは…？俺の部下をボコしてくれやがつて」

「海軍ですか。厄介ですね」

残つてるのは突然敵の船長と副船長の1人。そこまで強くなさそうだがどうするか。

「アイト、ここは私に任せて。私1人で十分よ。すぐに倒せるわ」

そう言うて前に出るモネ。たしかにモネは自然系の能力者。コイツらなら俺よりも楽に倒せそうだな。

「じゃあ頼んだぞ！お前らはここに半分残れ！モネが撃破したら制圧するように!!」

『はっ!!』

俺はすぐさま月歩で飛び立つ。街を見ると中々攻め込まれている。コイツはまずい。急がなくては。

—————

アイトが部隊を半分連れて居なくなるのを待つて武器を構える2人の海賊。戦力が減った事に少し安堵してるようで、モネの事も存分に甘く見ていた。

「ちっ逃げやがって…。まあいいお前をさっさと血祭りにして——」

「悪いけど、話すつもりはないわ」

そう言うや否や船は海兵達のところを除いて雪で覆われた。そして2人を雪でしっかりと拘束し瞬間移動をしてレイピアで斬り伏せる。

時間にしてわずか1分足らずで戦闘が終わったのだった。

「他愛もないわね。それじゃあ制圧しましょう」

—————

アイトは全速力で空を走り抜けていた。慣れたもので六式は指銃以外はかなり得意

になっていた。もつとも指銃が苦手なのは指に血がべつとりつくからだが。

しかしアイトが全力で向かつても現実には時に無情であった。

部下を指揮する副船長を後ろから槍で突き刺し海賊達の戦意を下げると、

そのままそこで市民の保護をしていた部隊と合流して殲滅を開始する。

ここまでは上手く行っていた。しかしアイトが最初に討ち取ったと思っていた副船長はまだ息があつた。

「ククク……死ねえ!!」

「うわあ!?!」

「ギャア!?!」

その為近くを通つた海兵が次々と殺されてしまった。運が悪い事にアイトはそれの近くで見ってしまった。

「なっ……!?! 貴様!!」

「よくも……!!」

その副船長は部下達が数人がかりで仕留めたが、近くにいたアイトは目の前で自分のミスで部下を死なせてしまった事実に関頭がついていかなかった。

さらにトドメとばかりに船に戻ると凶報が届いた。

なんとあのゴリアテ・ゼファアが腕を失ったのだ。アインら部下達も全滅に近い被害だと聞きアイトは目の前が暗くなってしまった。

そのままアイト達は街の復興をする為にそこに留まり後の海軍中将・モモンガと会う事になる。

ななわ

アイトは復興支援をする為に表では気丈に振る舞っていた。もつとも部下達はそれに気づいていた。しかし自分達よりも年下の少年が頑張ろうとしている以上、その意思を否定したくない。

注意するにしても年上だからと上から目線で言うようになってしまいうけにもいかない。そのため態度で示すしかなかった。

しかしそんなアイトに声をかけて寄り添ってくれる者がここにはいた。そう、モネである。

朝昼晩問わず可能な範囲で出来るだけアイトと共に行動したのだ。懐柔しようだとかそんな事は一切考えず、ただ無意識でアイトを助けたいが故にモネは活動していた。

そのおかげかアイトは以前より少しマシになっていた。

「アイト、お客さんが来たわよ」

今アイトは船長室にいる。市民の前に出る時を少なくしないと崩れそうだからだ。そんなアイトの元にやってきたのは頭が寒そうな男・モモンガ。

「直接話すのは初めてだなアイト少尉。海軍本部准将・モモンガだ。増援としてやって来た」

「ご協力感謝します。モモンガ准将」

「うむ。しかし其方は随分と落ち着いているな。俺が初めて仲間を失った時はもっと動揺していたものだが……」

「俺が落ち着いているように見えますか？落ち着いているわけないでしょう!?俺が自分の変な正義感で市民を助けようとしたから！俺が撃ち漏らしたから！それがなければ……こんな事にはならなかったんだ!!……モモンガ准将、俺は間違った選択をしたのでしようか……?」

「俺は……お前がどんな状況で海賊を捕らえると判断したのかは知らん。その場に居なかったのだからな。だが、どんなに傷ついていようが生き残ったのなら残ったものは進まねばならん。俺らが選んだその選択がどんな結果を呼ぶとしても模索しながら進むしかない。……お前は市民を助ける選択をした事を後悔しているのか?」

そう言われたアイトは助けた市民達の笑顔を思い出す。その笑顔は実際アイトの心を救っていた。モネが付き添ってくれた事もそうだが、あの笑顔を見て間違った選択などとは到底思えなかった。

「後悔なんてするわけがないです」

「——してないならお前が落ち込む理由はない。間違った選択をして後悔しているわけではないのだから。お前は正しい選択をしたんだ。変な正義感などない。責任ある立場の人間として、この結果に不甲斐ないと思うならより精進してより多くの市民を、仲間を守って見せろ」

そこまで言うともモンガは船室の扉を開け振り返った。

「我ら海軍が第一にすべき事は罪なき市民の明日を守る事だ。その為に存在している。それが出来て亡くなった者達も少しは浮かべられるだろう。意味ある行動だったのだから。ただしそれを良しとは認めな。認めればお前は海賊と同じだ。その事を今回の件で学んだお前は、誰よりも命の大切さを理解した。辛い経験は忘れるのが人間だ……だが、忘れるなよ」

そう残してモモンガは陣頭指揮に戻っていった。後に残ったのはアイトとモネだけ。2人だけの静かな空間。アイトはやつと目に生気が戻ってきた感じがしていた。

「なあモネ。モモンガさんを兄さんと呼んだら怒られるか?」

「どうかしら? 堅物のようにはしか見えないから……怒られるんじゃない?」

「ハハツ……今度呼んでみるか……モネ、サンキユな。もう大丈夫だ。俺達も行くこう」
これ以後アイトは命を守ることを最優先に考えるようになり、市民や仲間を救う事を信念として掲げるようになる。

「そう言えばモネはもう海兵としてやって行くのか？」
「……そうね。私は物心ついた頃からスラムで人を殺して生き延びて来たわ。それから若様……いえ、ドフラミンゴに拾われて同じような事をして来た。でも町を襲った時、何処かの勢力と抗争した時に、亡くなった人を見て胸がちくりとした。あの時は何でか分からなかったけれど、今となつては分かるわ。市民を助け出した時にお礼を言われて不思議とむず痒かった。その時に確信したわ。ああ、私は人助けをしたいんだって。私のような境遇の人を少しでも多く助けたいって。……妹が心配だけでも生きてると信じて探すしかないわ。ドフラミンゴが七武海になったから生きてるとは思うんだけど……」
「そうか……じゃあ将校になった暁には必ず探しに行こう。将校にならない限り七武海の世界に単独で行けるようにはならないらしいからな」
こうしてモネが正式に（精神的に）仲間に加わった。

—————

数週間後

俺達は無事にマリノンフォードに帰ってきた。行く時と同じ場所に立つてあたりを見回す。なんか景色は変わってないはずなのに変わったように思える。

一先ず報告して長い航海（一週間でも長いんだよ!!）でついた埃を落とす為に、シャワーを軽く浴びて宿舎にいつも通り行こうと思っていたが、目の前から松葉杖でアインが近づいて来てそうもしてられなくなった。

「アイン!!大丈夫なのか!?!その怪我は…!!」

「アイト!!久しぶりね、私は大丈夫よ。…私は本当に大した怪我じゃないの。ただ……私を庇って先生が……先生の腕が……!!」

松葉杖を落とし泣きながら俺に抱きつくアイン。俺は頭を撫でながら慰める。今までそれこそ記憶が戻るまでの間に何度もこうして慰めた事があった。

その経験からか自然とできる。何度も何度も来てたはずなのに、今俺の腕の中にいる少女は今にも壊れそうなくらい華奢に見えた。

しばらく慰めていると安心したのか小さな寝息が聞こえて来た。

「……うアイン?寝たのか?」

俺はモネに預けようと思ったが服を離そうとはしてくれず、そのまま自室で寝る事にした。

シャワー浴びといて良かった。

翌日 夜

俺は今ゼファー先生と話している。出発する前に見えていたゴリアテ感は消えてそこらにいるお爺さんのような雰囲気だった。

「…まずは試験合格おめでとう。明日正式に発表される事だろう。しかしよくもまあこんな短期間で中尉になったもんだ。最速記録を塗り替えたかもしれないぞ？そもそも俺が覇気を習得出来たのは34歳の頃だった。お前は才能に溢れてる。いい事だ」

シエリー酒は辛い。わかりきってた事だが、今はより辛く沁みる。

「どうでしょう。記録の更新に…興味は有りません。俺が興味あるのは市民を、仲間を守る事だけです。昔は早く昇進してモテたいとか本気で思っていましたけど…今となつてはそれ以上に守りたい命が数え切れないほどあります」

「今回の試験中に学んだようだな。…何よりだ。世の中は時に無情で残酷。わかりきってた事だが…お互いにその事を知れたのが今回だった。人は絶えず進み、そして危機に立ち、滅びる。それか生き延びて、また危機に立つ。その繰り返しだ。俺はここまでだ…悲しみを乗り越える事がもう出来なくなつたからな。…お前は止まるなよ？」

「……………はい。先生はこれからどうなさるおつもりで？」

「さあな。俺はもう65だ。あとはのんびり余生を過ごすさ。それこそ余程のことがない限りはな」

「なら愚痴を言いに来ても？いい着になると思うんですけど」

「はっはっは…お前の話が俺の晩酌に釣り合うのか？ククク……なら楽しみに待ってようじゃないか。来る時は言え。諸々の準備は俺がしておこう」

こうして俺とゴリアテ…いや、ゼファアの夜はふけて行く。亀の甲より年の功。色んな時に頼りになってくれそうだ。

「そう言えばアインとモネとの仲はどうだ？順調か？」

「いや何でその話になるんだよ」

「同じ布団で寝たと聞いたが…」

「何で知ってんだよ?!?!」

—————

マリンフォードにて

今日から訓練監督がゼファアからせんべいに変わった。ゼファアの教え方は雑だが

理にかなったやり方だった。

簡潔にいうと死にかければ強くなる論法。

何度も死にかけたお陰でかなり強くなった事は確かだが、果たしてせんべいはどんな訓練方法なのだろうか。

「それじゃあ早速始めるとするかのう……訓練方法は簡単じゃ。1人が順番にワシと戦い、他の皆は各々の鍛えたいところを鍛える。鍛え方は今回手伝ってくれるモモンガ准将に聞くといい。ワシと違って真面目じゃからの確な助言をしてくれるはずじゃ」

うん、対して変わらないわ。俺含めた全員が最終的にはゼファアの時と同じように死屍累々になってる事だろう。

—————

今日も今日とて訓練をする気でいたが訓練場で突然ガーブから出向命令が出た。何でも億越えの海賊団を倒してこいとの事。

いや無理だろ。相手が自然系の能力を持って余してるとかなら良いが、それでもキツいと思う。本部の海兵だからって中尉が億越えを倒せるとでも？カリブーとかにも勝てる気がしないんだが。

俺がウンウン悩んでると前からやって来たのはアインとモネ。アインはこの前一緒に寝た事もあつてか距離が近くなつた気がする。一方でモネの方も俺以外の海兵達と話すようになった気がする。

モネが仲間になつた事は本当に心強い。しかしアインに怒られなかつたのは驚いたな。通報されると思つてた。

「アイト? そんなところで何してるのかしら?」

「今日も朝から訓練って言つてなかつた?」

確か2人は俺の部下だよな。時間あるらならちようどいい。相談に乗つて貰おう。

はちわ

今俺達はシャボンデイ諸島周辺を航海している。

件の海賊団はこの辺りにいるらしい。この辺りの支部からの情報を元にモネが奴らの現在地を割り出した。アインはアインで他の部下達の訓練をしてる。

俺？俺は俺で指揮してる。これも大事なお仕事だ。モネが出した場所に行くように指示を出したり、訓練の監督をしたり…

別にサボってるわけではない。断じて違う。優秀な部下に任せられた方が安全なんだよ。決して俺が無能というわけでもない。

にしても意外なことに今回はアインとの初の任務なんだよなあ。アイン自体の能力は大体本部少佐くらいだから頼りになる。てか強すぎる。因みにモネは能力が能力だから本部大佐以上は確定。

色々おかしい。なにせ2人の階級はアインが准尉、モネが伍長。…随分と違っているように。

そんな2人は色んな面で対比的だ。

ボンツキュツボンとスレンダー

ゆるふわとクール

斬撃と打撃

能力者と非能力者

だがとても馬が合ってるのかめっちゃ仲がよろしい。俺を怒る時なんかハマりまくってた事まである。

折角だし2人の歌でも考えてみるか。………鳴の水兵の替え歌でいくとしよう。

—————

突然だが今回討伐令が出された海賊団は今まで何度か「天上金」を強奪したことがあるそうで結構強いんだとか。そんで分かっていることは船長が能力者で斬撃が効かない人だつてこと、後は副船長が刀を使ってくるって事。

部下の中に強いのもいるそうなので能力者じゃない事を祈るしかなさそうだ。いても2人だけにしてほしい。それならアインとモネに安心して任せられる。

けど船長は絶対自然系だろ。武装色が出るからって全然熟練度ないんやぞ？内部破壊とかもまるで出来ないし。見聞色の方も成功率は30%ほど。

これ死亡案件では？アインがモドモドの実を食ってたらなんとかなるだろうけどキツイよなあ。けどモネに任せても勝負つかなそうだ。

そんな事を考えているとモネが何やら走りながらやってきた。メロンが揺れてGO ODです。

「アイト、この先の支部が襲撃を受けている見たいよ。それも今回の討伐対象らしいわ」「それま？なら急がないとな、総員全速前進!!これより支部の救援に向かう!!」「はッ!!」

俺が指示を出すと訓練をしていたアインらも操作しに行く。言ってなかったが俺らに乗ってるのは1000人規模の軍艦。そう、あの左官クラスが指揮を執るヤツだ。

この前アイン達に相談して質が高くてそれなりの数をつけてもらおうように頼んだのさ。何せ相手は億越えの海賊団だからな。

しかし乗ってる奴らは全員が精鋭。なんと普段はガープの航海に随伴する者達なのだ。

つまり普段からダラける者の元で働いてきたエリート達。

お陰で俺は優雅に水平線を見てられていたわけだ。ありがとうございます。

—————

俺たちが支部のすぐ近くまで救援に向かっていると報告があった。何でも海賊が撤

退していったとの事。タイミング的には俺たちの船が見えた所だろうか？

頭がキレるのが居るのかもしれない。大嵐並みに面倒だ。

伊達に億越えてただけはあるな。さつき見た所、懸賞金は船長が1億5000万。副船長が9700万で後は8900万の戦闘員が1名と2000万越えが複数人。

アツハツハツハ……多いわ。

そんな大海賊と戦いたくねえー…市民が安全なら良くない？アイツらは海軍しか狙ってこないみたいだしさあ…？いやまあ全然良くないんだけども。

「アイト中尉!!目標と思しき敵船を発見しました!距離はおよそ1Km!!」

おーそーか……いや1Kmつてよくそんな遠くまで見えるな。お前も能力者か？

それは置いといてここはシャボンディ諸島、それも割と島の近くじゃねえか。ここで戦うのは避けたかったなあ…

仕方ない。被害が出ないように引きつけるなりなんなりするか。

「総員戦闘準備!まずは敵船を十二分に諸島から離す為に俺が少数で乗り込んで誘い込む!!その後は接舷して制圧!!アインは俺と入れ替わりで部隊を率いて攻めろ!モネは防衛を頼む!」

『了解!!』

さあてどんな敵なのやら。

—————

敵サイド

薄暗い部屋の中で参謀らしき格好をした者が細長い男に話しかけていた。近くには丸々と太った大男もいる。

「どうする船長？海軍のデカイ軍艦が真つ直ぐこつちに来てるが」

「エハハハハ…!!丁度いいじゃねえか…!!俺が天竜人から受けた恨みを支部よりも返せそうだしなあ…?———おう！オメエら！また海軍をぶつ潰してやろうぜえ!?!?」

『うおおおー!!!!』

『やるぞお!!』

「エハハハハ…!!…トンブ!!まずはお前から行ってこい！道を切り開いてくるんだ…!!」

船長の声に応えたのは丸々とした大男

『ボーガンのトンブ』懸賞金8900万

「よつしやあ！オイラに任せるとだなあ船長！」

「クライム!!お前が指揮を取れ!!俺様は好きなだけ暴れるからな!!!」

次に応えたのはこれといって特徴のない地味な男

「狐賢のクライム」懸賞金9700万

「承知しました。じゃあ早速手を打ちましょう……!」

そう言つてクライムは船をシャボンディ諸島へと向かわせる。

「市民を殺せば海兵は助けなくてはならない。この海で知らない者はいない。よくある手ですが……それだけ有効だと言ふこと。3/1を連れて私が行います。すると相手はそちらを最優先しなくてはならず最低でも半分それか統率者が向かうはず」

クライムは自身の愛刀を抜き得意げに策を披露する。

「それに合わせてトンプと船長は残りの戦闘員を連れて敵船に殴り込んでください。ただ、船長は最初後ろで急襲の警戒を頼みます。能力でトンプが吹っ飛ばした奴らを消して下さい。で、可能なら船を殲滅して乗っ取るように。資源とかを片っ端から奪つて下さい。それと……少なくとも……船を半壊に。そうすれば敵の動きを阻害できますし、より楽に痛ばれます」

「エハハハハ!!いいなあソイツは……!!!」

「絶対に踏み潰してやるから安心するんだなあ!!!」

「後はなるようになるでしょう。ただ私が囹としてどれくらい持つかは分かりません。なので出来るだけ早く戦果を上げるようお願いしますよ?」

「……? なんかも向こうの船進路変えてないか……?」

「アイト大変よ! 敵は明らかにシャボンディ諸島へと舵を切ってるわ!!」

「やっぱりか! 仕方ねえ……! 俺が防衛をしに行く! アインとモネ以外で月歩が出来るやつは月歩で、出来ない奴も泳いで付いてこい!!」

『はっ!!』

そう言つて俺はすぐ様飛び立ち、振り返つて更に指示を出す。

「アインは船を全速力で突っ込ませて敵船へ直ぐに攻め込んで行かせるな!! モネは後詰と船の援護を頼む!!」

「任せて!!」

「了解!」

ドフラミンゴと言ひコイツらと言ひ……市民を危ない目に合わせやがつて! 社会人の時の俺のように残業で死にかけるとはならまだしも!! 許さんぞ!

「そういや俺それで死んだんだつたな。忘れてたなあ……懐かしいなあ……来る日も来る日もオフィスにこもつてカタカタカタカタ……別に懐かしくはないな、うん。」

俺が諸島に到着するといきなり仕掛けてきた奴がいた。特徴とするなら刀を持つてゐる事。後は……ないな。そこら辺の海賊つて感じ。

互いの部下達もすぐに戦闘を始めた。ここまで航海してきたこともあつてか海賊達は結構強い。ただ少し時間が経てば泳いでる奴らも来るから数で押し切れそうだ。

てか刀使いと戦うのは初めてでは？今回は初めてが多いなあ（多分）

「マントを羽織つてゐる所を見る限り、貴方が指揮官で？」

一隻の指揮官は分かりやすいようにマント羽織るんだつてさ。厨二病ではない。決して違う。

「ああそうだ。色々言いたい所だがさつさと捕縛されてくれ。早いうちに捕らえないと被害がデカくなつちまうからな」

「それはそれは殊勝な心がけで……お礼と言つては何ですが、私の刀の錆にしてあげましょう。」

そう言つて居合い斬りを見せる敵、多分副船長のクライムだろう。にしても居合い斬り出来るのか……カッコいいなオイ。

「居合い斬り出来るのか!？」

「出来ませんが……」

「教えてくれ！」

「お断りです」

何も流れるように拒否らんでも……ま、倒してから教えてもらおうか。

—————

軍艦にて

モネの前には巨漢が立っていた。見るからに顔が怖く坂道から一度転がれば止まらなそうなくらいに丸い。

そんな大男は突然宣言した。

「決めたぞお！お前オイラの嫁にしてやるんだなあ！」

「フフフ……死んでも嫌に決まってるわ……！」

それを口火に始まった戦闘はその巨漢からは想像を絶するほどの速さだった。

トンブが突貫しモネはそれを正面から鉄塊で防ぐが、周りにいた海兵が衝撃波で吹っ飛ばされ、流石のモネも抑えきれず自身は雪になって回避する。

一方のトンブは気にせずにはジャンプしてモネに上から襲いかかる。モネはそれを横つ飛びで躲し、避けられたトンブはそのまま地下2回までぶち破って落下。

その隙を逃さずモネは上から雪の弾丸（雪兎）を放つ。この時点で既に鉄の塊でさえ凹ませる威力を誇る技だが、トンブの厚い筋肉はそれら全て塞いでしまう。

「切っても効かない…!? って服を破くな!! (あの人以外に!-)」

次回予告!

3箇所に分かれて行われる激闘!

アイトは居合い斬りを習得できるのか!?

2人は食べられてしまうのか!?

負けないで3人とも!今ここで倒れたら皆んなが悲しむんだぞ!?

次回!アイト号泣!デュエルスタンバイ!

きゆうわ

互いの獲物が空を斬り、火花を散らしてぶつかり合う。

俺が上から横から高速接近して槍や手足で攻撃するも躲され、時には攻撃する前に居合い斬りを食らわされる。

居合い斬りは俺の、いや漢のロマンよろしく、異次元の威力だ。実力的にコイツが船長でも何ら不思議ではないくらいに。

てか最初居合い斬りを槍で受けたらあっさり先端部分が消えたんすけど。

それからは槍で受け流したり、紙絵や鉄塊で対処してる。が、威力が凄まじく鉄塊の時は武装色を纏ってやつとなんとかなるレベル。

かといって槍で防ごうものならまた簡単に斬られるだろうし、武装色で武器も覆えたら良かったものそんな高等技術できるわけがない。

その結果俺は終始押されていた。いやまじでめっちゃ強いんですけど。流星は大物海賊団の副船長だけある。

“狐賢のクライム”っていうから大して強くないと思ってたのに……！狐だけに騙し

やがって！裏切りやがって!!（お門違い）

「…クツソ！お前の、攻撃、早すぎんだよ!!卑怯だろうが!!」

「海賊にとつては『卑怯』という言葉…褒め言葉ですよ…!」

「褒めてねーよ!あと居合い斬り教えろー!」

「でしようね!そもそもあなたは刀を持ってないのにどうやるんです!!」

「んなもん気合いに決まってるだろうが!!」

「まさかここまで面倒臭い相手だとは…!」

クソ…まじで居合い斬りが見えん。斬撃が飛んでこないから良かったが、間合いに入ったら即死だなこれ。

ていうかなんで刺に対応出来てんだ?刺の速度に関しては「将校に匹敵しそうじゃな」って、この前ガープに褒められたから結構自信あったんだけど。

「あなたは随分と機動力が高いようですが…たとえ速くとも攻撃が軽い上に目で追える以上、なんの問題もないんですよ。残念でしたね…!」

「ちつ…また人の心読みやがって…なんで目で追えるんだ!」

「居合い斬りより遅いからに決まってるでしょう——が!!」

「グツ!?!…俺の槍ごと…!?!」

クライムが居合い斬りの構えが見えた俺は避けきれないと思い、槍を投げて牽制した

が、なんとガーブ製・圧縮槍が豆腐のように真つ二つに斬られてしまい俺の体も結構しつかりと切りつけられた。

『中尉!!』

仲間の心配する声が聞こえるが、正直そこまでの大怪我ではない。スつと斬られたからか斬られた時は痛くなかった。

後から激痛が走つてますけど、今ちようどね。

…!! 痛え…!! めつちや涙出てるよ今…! 勝てないし、居合い斬りかっこいいし、痛いし、武器もないというのに!!

「居合い斬りをお!! 教えでぐれー!」（男心暴走中）

痛みに慣れるためにもここは叫んだり考え事をしよう。島民の方々は海賊が来た瞬間に逃げてたり、加勢してくれてる。住民も強いのかな。

「…まったく、アイツといい目の前の男といい…敵となると世の中面倒な男が多い事ですね……!」

「…? まさかお前女なのか!？」

まさかの男の娘か!? なるほどどうりで体が少し丸みを帯びているわけだ。肌も白いし。つて、アイツどこいった？

「誰が女ですって!？」

声が出た方を見ると上から刀を突き刺さんと降ってくるクライム。見聞色するのすつかり忘れてた。声出してきてくれてありがとな。

「危な!？」

ていうか今コイツ目が変わってなかったか?なんか雰囲気は激おこのアイン・モネ並みに冷えたぞ?

「ちつ、ちよこまかと…!いい加減当たってくれませんかねえ?」

「いや、ちよくちよく切り裂かれてるんだが」

あとなんか語尾が段々荒々しく?なってるような…

「…もういい…:…もう時間をかけるのはやめにしましょう」

「は?」

そういうとクライムは刀を振り上げて——遠くへと投げた。俺の頭上を超えていった刀はブーメランのごとく回転して真っ直ぐに飛んでいき…

「…!?やめろ!」

あろうことか子供に突き刺さろうとしていた。気づいた俺はすぐに飛び出して子供を抱きしめて守る。

「……!!!」

いつでええええ!!!だめだ叫ぶな俺!!我慢我慢!速く抜くんだ!!ひっひっふー、ひっひっふー…落ち着けるもんだな。

「大丈夫かボウヤ?」(涙目)

「う、うん…その、おじさんは——」

話しながら俺は振り向きざまに背中に深々と刺さった刀を抜いて空高く投げ捨てた。

「俺は大丈夫だ、そしておじさんではない。髭剃ってないだけで今日20歳になったばっかだ。…じゃなくて怪我がないならすぐにここから離れてくれ。危ないからな」

「は、はい。おじさんありがとう!」

子供は走って行つた。俺は見えなくなるまで見てたがそうはいかなかった。

気づいた時にはもう既に刀が俺の体のど真ん中を貫いていた。

「チエックメイトですね」

「ガハッ……!!!」

奴が刀を抜くと同時に俺は崩れ落ちた。

—————

「まったく…!しっこい男ねえ。しっこい男はモテないってことを知らないのかしら

?」

「関係ないんだな！捕まえればどうとでもなるんだな！だからさっさと捕まるんだな！くらえ！必殺う…ジエツトタツクル!!」

「!ただの頭突きじゃない!同じことばかりするのも女にはモテないわよ!」

「絶対に当たらないなんて事はないんだな!その証拠にお前の足がカクカクしてるんだな!!」

「(くっ…!避け過ぎたわね…だからといって正面から受け止められるような威力ではない…:雪になつても変わらぬ。せめて弱点さえ分かれば!!)…:貴方の目は節穴なのかしら?私は傷一つ負つてないわよ?」

「今に動けなくなるんだな!もっかいいくどお!!オイラの女になるんだなあ!」

その言葉と共にトンブが構える。モネもまた下半身を雪にしていつでも回避できるようにした。

「(なにかしら弱点はあるはず。完璧な存在などないのは彼からもよく知らされた事)誰がなるんですか…:…!」

そう考えてモネは意中の人を思い出す。最初は敵だったくせに口説いてきて、助けられて、連れてからて、思わず彼の、男の匂いを嗅いでしまった日のことを。

(つて!!何を考えてるのよ!私は!!!)

しかし一度意識してしまうと完全に振り払うのは至難の業だ。どうしても頭の中に

チラつく彼の顔。

頭を懸命に振って煩惱を振り払っていると目の前には豚が……もといトンプの顔が。

……最悪である（失礼）

「——貴方じゃないわ!!!」

「ブヒイ?!?!」

モネの怒りの蹴りはトンプの腹に直撃し、トンプは見た目に似合った声をあげてすつ飛んだ。

「(……ある意味今のは助けられたわね。……今のうちに——?!?) ……なるほどね」

モネがトンプを見るとトンプはたまたまこちらに足を向けて倒れていた。一見するとなんて事はない光景だが、モネは一つの方法を思いついた。

（あれは確か初めてアインと会った時に連れて行ってもらった所で見たやつね、確か名前前は——）

「いったいんだなあ!!!お前ほんとに許さないんだなあ!!もう手心は加えないんだなあ!!ギツタギタのポロポロにしてひん剥いてやるんだなあ!!!」

顔を真っ赤にして叫ぶトンプ。それを冷たい目で見下すモネ。さつきまでは少しでも毒を吐くためにその目をしていたが、今の目はそれとは違っていた。

「貴方にされるのはお断りよ？あの人なら…乱暴にされるのもいいけれど……今度酔った勢いで……いいわね」

何やら邪なことを考える2人。共に顔が赤い。もつとも甘酸っぱいものではまるでないが。

「何にせよ、ここまでよ。一気に勝負を決めさせてもらおうわ」

雪を強く舞い散らせて今日初めてレイピアをモネが構える。その姿はまさに雪原の騎士。目だけでなく得物までもが冷たい空気を放つ。間違いなく強者の風格を漂わせていた。

—————

「エハハハハ……諦めろ。この枝からは絶対に逃げられねえ。切っても切ってもいくらでも伸びるからなあ……!!」

「クツ……切っても効かない……!?って服を破くな!!」

2つのダガーで枝を次々と切り捨て何とかして懐に入り込もうとするアイン。しかし敵がそうはさせてくれない。潜り込もうとする度に枝で弾かれ、刺さったり捕まりかけたりとかなり苦戦している。

海賊船の上では苛烈な戦いが繰り広げられていた。敵の船長の名前はファイアル・D・ロンダート。マリージョアの襲撃事件の時に助け出され、余興で与えられた悪魔の実・

エダエダの実を食べ枝人間になった。かつて天竜人の奴隸だった男だ。

彼の今を作ったのは間違ひなく天竜人である。その能力を使って海軍関係者を拷問したのも、クール美女を散々な目に遭わせたのも、全ては復讐から始まったものだった。故に彼はまるで天竜人のように弱者を殺す。能力で刺し殺し、絞め殺し、叩き付けて圧死させるならまだマシな方だ。

フィアルは簡単に殺さない。じわりじわりと痛ぶって長い時は3年の時間をかけて殺すこともある。

そんな彼に囁いたのが現副船長・狐賢のクライムだった。彼は巧みにフィアルを誘導した。実質の指揮権を持つのは頭が切れるからではない。実力順にするとクライム〈フィアル〉トンプンなる。

もちろん知っているのはフィアルとクライムだけだ。しかしそんなフィアルはクライムにより元々あつた天竜人に対する恐怖という感情を、怒りと憎しみに変えられたのだ。

「エハハハハ！まず足は足！」

「…!!」

「次に腕!!」

「この……!」

「そして顔!!」

「いい加減に……!!」

「さあ、タツプリ可愛がつてやる……!!」

アインは得意の短剣で迫り来る枝を切っていたが、やがて捌ききれなくなり捕らえられてしまった。このまま何も動かなければアインはあんなことや、こんなことをされてしまうことは明白。

しかしアインはそんな風になるとは微塵も思っていなかった。なぜなら――

日頃からやっている順番通りに貪ろうとしたファイアルだったが、海兵をやるのは初めてなので少し目をつぶって妄想してしまった。それが命取りになるとは知らずに。

(強気の女海兵を散々に犯す!今までで1番!最っ高に興奮するぜえ……!)

「まずは下からの串刺し――グエ!?!?」

突然の強力な衝撃に思わず顔を顰め膝を着くファイアル。目の前には拘束から逃れたアインがいた。

「まさかあの時のをここで披露することになるとはね」

そう話すアインの体をピンクのオーラが包み込んでいる。その姿は今まで押されてきた時の顔が演技だったと言うかのようなようだった。

「本当は彼に最初に見せたかったけど、そうも言ってられないわ」

これはモネと初めて会いマリolfordを案内したときに遡る。

—————

「貴女がモネね？」

「ええ、貴方は？」

「私はアイン。貴女を連れ帰ったアイトの幼馴染で親友で将来の……じゃなくて、貴女の監視役をする者よ」

「……なるほどね。分かったわ。それで今日はどこに行くのかしら？アイトは——」
「残念でした。アイトは関係ないわ。今回はここマリolfordの見学よ。ある程度は知っておいて貰わないと不便だしね」……（…確定ね）
「了解したわ。それでまずはどこに行くのかしら？」

こうして2人のマリolfordの探検？が始まった。初めはどこか距離があつた2人だったが、1時間も経つ頃には旧来からの親友とも言えるような仲になってい

た。

「後はここ倉庫よ。ここには訓練用の道具が主に入っていて海兵なら好きなかだけ開閉して使用可能よ。……わざとじゃないから」

「ふふふ、分かってるわよ。早速中に入ってもいいのかしら？」

「もちろん！行きましよ」

—————

倉庫の中は涼しく灯りが無ければ少々危険な場所だったが、2人は目がいいのか無しでも問題ないとばかりにどんどん進んで行った。

「ん？アインこの具は何かしら？こんな物を訓練に使うの？」

「ああ、それはダイアルよ」

「ダイアル？」

「そう、ここを押すと具それぞれの能力が発動されるわ。元々ここにはなかったそうなんだけど、ガープさんがロジャーを追って空島に行った時に見つけたんだって」

話を聞きながらモネはダイアルを手取る。大小様々な具は装飾品にもなれそうなものから、ゴミ同様と言つてもいいような物まで多種多様だった。

「へえ、試しにやってみても？」

「どうぞ！でも中だと危ないかもだから外でやりましよ。…つてきやあ!？」

「大丈夫？これは宝箱？なんかそんな形をしてるわね。」

アインが躓いた箱は確かにモネの言う通り宝箱だ。最も中に入っていたのは——
「これって悪魔の実かしら？」

「ええ？なんでこんなところに？またガープさんが適当に置いたのかしら」

全くもうと言いながらアインは元の箱に入れようとすると、その悪魔の実から凄まじい引力のような不思議な力を感じた。

「これ、食べてもいいと思う？」

「お腹すいたの？」

「いやなんか、惹き付けられるような……」

—————

「上手く言ったわね…後は——」

「ぎげんなあ！てめえ！何しやがった!?俺の枝をあつさり逃れるとは……!」

「(能力で一瞬小さくなったのよ…なんて)言うわけないでしょ?覚悟しなさい!」

再び始まる船上での戦いでアインは奥の手を繰り出した。モネもまた倒す算段を編み出した。しかし、アイトは——？

じゅうわ

「さて、どうしましょうか」

血を流してうつ伏せに倒れているアイト。そんな光景を見ながら悩む女性がいた。

その女性はまごうことなく美女であり、服は全てが白で統一されていて特徴的なのはそれぐらいであった。戦場にはまるで似合わない格好をしている彼女は何者だろうか。

—————

同じ頃、アイト達がシャボンディ諸島で戦闘をしているとき、マリンフォードにおいても動きがあった。

ここはマリンフォードの元帥室。普段ならセンゴクが胃薬と茶菓子片手に茶を啜る場所である。

根が真面目な彼にとって、同期の2人に振り回されずに済むここは唯一の安息地であった。

そう、安息地であったのである。

「どういうつもりじゃあ！センゴク！」

「事と次第によっては、お前と言えど容赦せんぞ」

元帥室の防壁である障子や襖を破壊してズカズカとやってくる二人組。ガープとゼファーは側から見ても、いや、見なくとも不機嫌なことは間違いないかった。

「まあ来るとは思っていたがな………鶴ちゃんは居ないのか？」

「フン！鶴ちゃんならとつくに出港の準備をしとるわい！」

「俺らがここに来たのは——言わなくても分かるよな…センゴク？」

扉の前の護衛達を外しておいて正解だったと思いつつながら、センゴクはゆつくりと立ち上がり、出来る限り落ち着いた声色で話した。

「アイト達を奴らの討伐に送ったのは私ではない。私よりも上の存在——世界政府だ」

「……！！じゃろうな！容易に予想がつくわい！アイトはまだまだ全ての面が発展途上！今のうちに刷り込ませる腹か！！」

「センゴク………まさか、我が身可愛さにしたわけじゃなからうな？アイトを操り人形にでも——」

「当たり前だ。私にとつてもアイトは孫のような存在。あんな良い奴が海軍にいるか？死なせるわけにはいかん。だから私は粘った。粘って粘って……！なんとか勝てたんだ！」

そう言つてセンゴクは机の引き出しから何かを引つ張り出した。そこに明記されて

いたのは――

――

時を同じくしてここはマリンプォードの湾岸線。ここには普段から巨大な軍艦が数十隻配備されている。

そんな軍艦の中でも2隻ほどが出港しようとしていた。1つは鶴率いる部隊。もう1つは――

「モモンガ！行く気か!？」

「！オニグモか。…当然だ。今のアイトには厳しい相手だからな。」

「勝手に軍の私物を利用した場合どうなるか、知らないお前じゃあるまい！俺も行くぞ！」

「……………何を言っている?！」

モモンガはアイトとある出来事以来、とても懇意にしていた。そしてそれは他の時期中将達も同じだった。

あの気難しく、真面目で、取り付きにくくて、後輩との交流は愚か、同輩の者ともそこまで話さないあのモモンガが、アイトという若者と仲良くしていると。

それを聞いた時期中将達もアイトの事に興味が湧き、仲良くなったのは当然だったの

だろう。

「俺がお前の罪を少しでも軽くしてやると言つたんだ！俺はお前のような真面目と言うよりかは、不真面目だ！なら少しでも軽くなるだろう！」

「お前……。すまん。手を貸してくれ」

モモンガと2人でここまで真剣に話すのは初めてだなと思いつながら、オニグモは自分の部隊と同期の部隊の中で動ける者共を全員載せた。

そんな2人を見ながら「罪を被るのはあたしだけにしないかね」と、独りごちるものがあった。それは勿論、鶴である。

「あんたら！ダラダラしてる暇はないよ！すぐに船を出しな！先に行くよ！」

「はっ！」

「アイトを助ける」ただそれだけの事に海軍の重鎮だけでなく仲間も動いていた。アイトが知ればとても喜んだことだろう。

最もそもそもの原因を知らなければ……。かもしれないが。

—————

時間を遡つてアイト達が出航するさらに前。ガープにボコされている時間にまで遡る。

「それを私が？」

ここは聖地マリージョア。天竜人や、世界会議に出席する国王でもなければ、入る事は許されない場所。

そして今ここで発言しているのはその誰でもなかった。

「いくらなんでも警戒しすぎでは？確かに彼は恐ろしい速度で成長しています。ですが、彼を確実に引き入れるなら、時間をかけるべきです。少しずつ侵食していく方が確実で——」

「君に意見を求めている訳では無い。忘れたのか？自分の立場を。君がすべきことはなんだね？」

麗しい美女に対して冷淡な言葉をぶつけるこの男、いや、この男達は世界を牛耳る存在。

「っ……申し訳ありませんでした」

「よろしい。君達は我々の言うことを聞いていれば良い。組織に必要なのは、円滑な行動と残忍な行動だ。今回の件に関しては君ほど冷静な判断が出来るのがいなさそうだね——頼んだよ」

退出し廊下を歩く音が響く。カツカツと硬質な音を強く出しながらその美女は若干

の苛立ちを晴らしていた。

(なんで私がこんなことを……いいえ、違うわ。私だから任されたのよ。そう考えましょう。)

彼女は生まれてから常に鍛えて、学んで、政府のために生きてきた。努力を怠らず、磨けるものはなんでも磨いた。容姿もその一つだ。

今まで揺らぐことなく政府の為に働いてきた彼女だが、今回の件に関しては納得がいかなかった。

この程度の任務をCP9の私にやらせるのか。そうは思ったが、すぐに頭を別の方向に向かわせる。

彼女の名は「ステューシー」CP9の現リーダーである。

「にしても、この子結構タイプね。——どさくさに紛れて奪つちやおうかしら…一応彼女にも連絡しておきましょう」

そう独り言を言つて彼女はガープの筆跡を真似て指令書を書き、海軍に忍び込んでい
る部下に渡すように指示をした。

後は船に忍び込んで待つだけである。任務の成功を確信しながら彼女は来る時まで待つことにした。

「……」
ここで物語は最初に戻る。

「(今回の私の任務は「アイト」という将来の火種をどうにかすること。方法は問われない。殺してもよし、絶望を味あわせてもよし、貞操を奪ってもよし…)さて、どうしましょうか」

目の前にはお腹のど真ん中を貫かれたアイト。当然このまま放つて置けば彼はここまでの命。

任務は生死を問わない。むしろ死んでしまえばステューシーとしては楽なことに変わりはない。

しかし、彼を生かすことで得られる利益は大きい。20歳にして六式を習得し、覇気も基礎は完全に身につけている。

今の時点でも海軍本部大佐よりも余裕で強い。ゆくゆくは本部大將になることは間違いない。

それだけの戦力を捨てるのは勿体ない。味方に引き込めればかなり利益が見込める。それも代わりが存在しないようなものだ。

難しいのは上手く味方にできるかどうか。失敗すれば海軍はより力を増す。赤犬のような性格なら良いが、彼はその赤犬の真反対の性格。

市民や仲間が大事な海兵。戦力を海軍内で分散させることが出来るかもしれないが、赤犬の対抗馬としては彼と似たような思考の青雫がいる。

故に政府に牙を剥く可能性が高い彼は引き込めるなら引き込んで、ダメなら途中からでも消す。

そう結論づけたステューシーはすぐさま処置を開始した。

止血を行い、応急処置を的確にしていく。後は服装を変えて一般人を装って起こすだけ。

「海兵さん！海兵さん！大丈夫ですか!?!」

反応がない。ただの屍のようだ。

ステューシーは一瞬そう思ったが、すぐに頭を切りかえてアイトの顔面を平手打ち。

「ぶへい?!?!」

「大丈夫ですか!?!動けますか!?!」

「あつ…ああ、大丈夫。助かり——!?!」

「?..どうかしましたか?」

「——はっ!?!すすいませぬ。美しすぎて魅入ってしまった。治療ありがとうございます!?!」

そういうとアイトはすぐさま走り出した。

その背中をステューシーは呆気に取られて見つめていた。

本来なら直ぐにでも取り込む予定だったが、それが出来なかったのだ。

アイトが素でポロツと言ってしまった言葉。「美しすぎて魅入ってしまった」のせいである。

立場上、心の裏を読むことも多々あるステューシー（CP）なだけに、真っ直ぐ向けられた言葉に面食らったのだ。

（……彼を引き込むのはまたにしましょう。もっとも外堀は少しずつ埋めるけれどね）
その後彼女は忽然と姿を消した。

—————

場面は戻って元帥室になる。

センゴクが彼らに提示した条件。それは——

「紙にはこう明記させた。〔女性のCP9を派遣すること〕アイトの容姿は保護欲が湧くものだ。不思議とな。こんな不明確なものとは言え、アイトは不思議と人を惹き付ける魅“力”がある。有望株の者共は勿論、異性からもだ。CPの中には厄介な奴が多い。その点、女性ならそこまでの異常者、操り人形はいない。彼女らは男と比べて評価が平均的に低い。その事に無自覚とはいえ、不満を覚えているはずだ。SWORDからそう連絡があった。それに何人かがもう向かっているのだろうか？彼らの事だ確実に助ける

だろうし、アイトがこの程度で命を落とすはずがない！」

「——賭けおつたな。センゴク……」

「…となると俺らは留守役つてことか？」

「…お前達に伝えなかつたことに關してはすまなかつた。だが、それ以外に思いつかなかつたんだ。こういった争いにはお前たちは向いていないからな」

遠い水平線を見て、センゴクは強く思う。彼は、アイトならば、彼女らならば、必ず乗り越えられると。

—————

その頃ステューシーによる応急処置により、意識を取り戻したアイトはシャボン玉に乗ってかっていた。

決してふざけているわけではない。いきなり目の前に原作キャラ・ステューシー（超絶美魔女）が現れたら、パニくるのは当然。

そこで気持ちを落ち着かせるために月歩を使ってシャボン玉の上に登り、そのまま現状の確認を行っているというわけだ。

「まさかステューシーが現れるとは……いや、いまはそれどころじゃない！クライムは———（そこか!!）」

アイトの目線の先には海賊たちを指揮するクライムの姿があつた。運が良かったの

か、クライム自身は戦闘をしていなかった。

それと遠くのためはつきりと判別が出来ないが、長髪の女性らしき人物が無双している。お陰で部下の海兵達や民間人は追い込まれつつも均衡を保ちつつあった。

流石はガープの部下達であり、グランドライン前半最後の島のような位置にあるシャボンディ諸島の住民だけはある。

もつとも、住民が強いのはこの近くに無法地帯があるための護身術であるが。

とはいえ、なかなか倒せない事にイラついたのか、クライムが抜きみの刀を持ち前線に向かい始めていた。

「させるかあ!!——あ、れ……」

当然クライムを倒さんと覇気を手足に纏って飛び込もうとしたが、血を流しすぎていた為にアイトは地面に墜落してしまった。

「(クツソ!!があ!……:動けよ!腹に穴が空いたからって!!……このまま見過ごす事を許したら……!!俺は自分を許せなくなる!!そんなことぐらい!俺が!自分が!一番わかってるだろうが!助けるんだろうが!全部!皆を!仲間を!市民を!……:動けよ。動け。動け!動け!!動けよ俺の体!動くんだよ!!)——うっおおおお!!

……ああ!!!」

それでもアイトはすぐに立ち上がった。しかし様子が変わっていた。目の焦点は定

まらず、全身を蒼い覇気で覆われた姿へと変貌していた。

周囲にただならぬ威圧感を放ち、近くの者の全ての意識を奪う。その姿はまるで鬼。角はないが全てを破壊する恐怖の姿を連想させる。

しかしそれはおかしな話であった。ステューシーによる的確な応急処置があつたとしても、そもそも血を流しすぎていては人間は動けなくなる。

そしてアイトの体の中には血が半分しか無かつた。3分の1が抜ければそれでほぼほぼ人間は死ぬはずなのである。

止血した時点、いや、ステューシーがそこに来るまでにもう残る血液は3分の1に迫っていた。

それなのに、アイトは立ち上がった。

「グおおおおー！！！！」

雄叫びと共に駆け出し海賊達に迫り、気づかれることなく首を羽根飛ばした。僅かな音に海賊達が後ろを向くが、関係ない。

手当り次第に次々と海賊達を葬り去る。あつという間にクライムの前に、仲間の前に迫り着いた。

本能からか、記憶からか、それとも偶然の産物なのか、アイトは迷うことなくクライムに襲いかかった。

(モウイヤナンダ!!!)

――
シャボンディ諸島でアイトが蹂躪をしている時、こちらの戦いはクライマックスを迎えていた。

「何にせよ、ここまでよ。一気に勝負を決めさせてもらおう」

「それはこつちのセリフなんだなあ！」

雪を舞わせたモネに向かってトンプがタツクルをしてくる。モネは雪となりそのままその雪をトンプに弾丸のようにぶつけた。

トンプは自分の長所を自慢にできるからか上機嫌になって「きかーん！」とかなんとか言つて突っ込んでくる。

得意気で誇らしげな顔だが、間も無くその顔は驚愕に満ちた物へと変化した。

「いった!? 痛たた!?」

突然の痛みにトンプは我慢出来ずに急停止して横っ飛びで回避する。

「なっなんなんだなあ!? なんて痛いんだなあ!?」

「あら? どうしたのかしら? もう限界なの?」

「っ! なわけないんだなあ!! いくぞおー!!」

そう言つて再びタツクルをかましてくるトンプ。対するモネは雪垣(ゆきがき)を

真つ直ぐに何十に重ねる。

トンブは止まることなく次々と突き破るが、
“黒い壁”にぶつかつた瞬間に勢いが止
められてしまう。

「なつなんなんだなあ!?なんで壊せないんだなあ?!?」

困惑して叫ぶトンブだが、モネがその隙を逃す筈がない。

「万年雪!!」

「おっおわあー!?つつづめだいい!?」

すかさず動きを封じてトドメを刺そうと見せかける。

「たびら雪 蕾閉じ!!」

トンブの足元の雪が開花した蕾のようになり、トンブの背丈の高さになった。その瞬間トンブもろとも握り潰すかのように閉じる。

「ひっ!ひいい!!につ逃げるんだなあ!!!」

足をもぎり取られるような感覚を受けたトンブは堪らずダイアルを使って強行突破する。

しかし、それこそがモネの狙いだった。

空へと逃げたトンブの足の裏はもう既に何も付いてなかった。

「よくもやってくれたんだなあ!!喰らうんだなあ!!メテオヘッドタックルう!!!——へ

「？」

その結果トンプはただ落ちていった。

「ぶひい!?! なっなんでんだなあ?!?!」

その原因にトンプは気付くことはなく、ただ叫ぶことしか出来なかった。

「(分かってたけど、ネーミングセンス皆無ね) ……………あなた、鈍感なの? アイトと良

い勝負しそうね……」

「う、うるさいんだなあ!! まだ腕があるんだなあ!!」

「そっ」

トンプが腕を振り上げると同時にモネは雪となり、複数層のかまくらを形成して閉じ込める。

「これならどう?」

その後トンプは凍死した状態で発見されることとなる。どこか安心しているような雰囲気の顔がまた不気味であった。

—————

海賊船上の戦闘もまた終わりを迎えていた。

「あなた本当に懸賞金1億越えの海賊なの? 実力的には9000万が良いとこだと思うけど」

「フーン！お前には関係の無い事だろうが！っていうか——なんなんだこの体は?!?!?」

そう言って叫ぶ子供。顔を見なければ判断出来ないだろうが、この子供、間違いなく、ファイアルである。

枝から抜け出し攻撃した後、アインはピンクの玉を連射。数発当たった結果、ファイアルはあっさり子供に若返った。

現在彼はアインの部下達により海楼石の鎖で完全に拘束され、地下牢に運び込まれようとしていた。

「お前まじで何しやがった!?!さっさと戻せ!!」

「さあ？敵のあなたにわざわざ教えるわけないでしょう？それに、あなたがよく分からない能力じゃなかったら、こんな事にはならなかったわよ」

ファイアルの悪魔の实の名前は「エダエダの实」自然系なのか、超人系なのかの判別がパツと見できない。

最初から使つてればここまで怪我することはなかったわねつと、アインは後始末をしていく。

ファイアルが捨てて台詞を吐いているようだが、生憎とアインの耳には一切入っていない。

アインの頭の中にはもう既にファイアルの事は少ししか無い。アイトの事以外等、すぐ

に消してしまうのが彼女なのである。

「(なにか嫌な予感がする。さっきの奴は正直いって弱かった。覇気を感じからして、そこまで強くは無いと思ったけど、まさかここまで弱いなんて……危険性により懸賞金は決定される。ならあの実力でなぜ億超に?——後で調べてみましょう) モネはどうなったのか分かる?」

「先程連絡が入ってトンブ含め、乗り込んできた海賊達の撃破、拘束に成功したとのことです! 現在は負傷者の介護並びにアイト中尉の増援を送る準備をしています!」

「流石ね。私達も制圧完了次第そうしましょう。急ぐわよ!」

『はっ!!』

じゅういちわ

「その力は世界の法則を崩す…いや、崩壊させかねんモノだぞ！」

「それほどまでにか。——仕方あるまいな」

「○○！……ごめんね!! 守れなかった…」

「うわぁー!! かつ火事だぁー!!」

「私アイン! あなたは?」

「この舟に乗るんだ!!」

「いい? これは誰にも渡しちやダメよ?」

「生きて!!」

夢の中で色々な描写が次々と入れ替わる。その速度はだんだん早くなっていき、俺はその変化の最後に見た巨大な目を見て飛び上がった。

その夢では海底からその目が睨んでおり、海軍本部を、いや世界政府の聖地「マリージョア」を睨みつけていた。

「なんだったんだ? ……つていうか、ここどこだ?」

当たりを見渡すところはとも部屋らしい。んでもって、拘束されてないところから察するに、海軍が勝って俺を治療してるところだろうか。

ベッドの隣に2つ椅子があつて水が入った桶とタオルもある。記憶が無いから分からないけど、疲労で熱でも出たのかな？だとしたら看病してくれた人達にお礼言わなきゃな。

もしかしたらアインとモネが看病してくれてたのか……？そうだとしたら美少女に看病されるなんて、俺って実は人生勝ち組？

少なくとも現世ではそうだな。……あれ？前世はどうだったっけ？なんか子供の頃と言ひ、前世と言ひ、記憶が曖昧なんだよなあ。

日記を見た時に子供の頃の記憶も入ったけど、5歳までのは当然のように書いてなかったし。第1文がお隣さんの娘・アインと遊んで楽しかった！っていうやつだったっけか。

いずれ子供の頃と前世の頃の記憶が戻るといいなあ。ONE PIECEの記憶は何故か色々有るけどね。

そうしてしばらく惰眠を貪っていると、外から何やら2つの強い気配が近づいてくるのを感じた。

(ん?……誰か来たな。この気配は……誰だ?アイン達よりかなり強いっていか、俺よりも強いなこれ。出来れば可愛子ちゃんでありますように)

「入るぞ……アイト起きて——るな。意識が回復したようでは何よりだ」

「おー!治ったか!死なねえとは思ってたが、何よりだ。」

そんな俺の願いなぞ関係ないとばかりにドアの影から出てきたのはモモンガとオニグモ。

どちらもなんだかんだで仲のいい先輩達だ。こう見えて俺氏先輩方と仲良いのですよ。いざと言う時に必要なのはコネだからな。

しかし2人とも原作と違ってモモンガは堅物というより、口下手なお兄ちゃんだし、オニグモなんかめちやくちや不真面目だぞ。怒ると冷徹で怖いけど、普段は優しい悪友だな。

「ああ、すみません先輩方。心配かけたみたいで」

「別に構わん。それより何か食うか?」

「そうそうこいつと来たら、こんな大変な時に態々体に良い食べ物を買に行つたんだぜ?それも3時間かけてな……フフフ……!今思い出しても笑えるぞ!こんな顔の奴が道に迷つたのか、遊園地で真剣に面白い物してんだからな……!!フハハハ!!」

そう言いながら腹を抱えて壁をバシバシ叩くオニグモ。ほーんとなんで部下を平気

で殺す程の、劣悪な存在になっちゃったのよ。

「黙れオニグモ!!ここは仮にも病室だぞ!静かにせんか!」

「悪かった悪かった!フフフ……でも良いじゃねえか、アイトが喜んでんだからよ」

「それならばいいが……食うか?」

「(モモンガさんよ、可愛いなおい) ありがとうございます。有難く頂きますね」

それから食べながら色々なことを聞いた訳だが、海賊達はこの2人が着いた頃には全員捕らえられていたんだそうだ。

アインとモネ流石っす。

あと驚いたことに鶴さんもいるらしい。態々来るってそんなに今回の任務がヤバイやつだったのだろうか?ただ直ぐに帰ったそうだ。

責任は全てアタシが取るって言って可能な範囲で資源やらを置いて帰ってったそう
な。あの人漢だよな。ていうか、本部中將の中でも最強の1人が来る理由にはならない
気がする。

治安維持はシャボンデイの海軍駐屯所的などころから准將が来てやってくれてるらしい。ドーベルマンとストロベリーって名前だとさ。

ドーベルマンは分らんが、ストロベリーは頭(の形)がおかしい人だったな、確か。

そして謎なのが俺が倒れていた場所らしい。俺が覚えているのはシャボン玉から落ちた所まで。そこから先は今起きてからの記憶しかない。2人によると俺はクレーターのど真ん中に落ちてたそうなの。

で、その周りに海賊や民間人、海兵の仲間達が倒れていたそうなの。その中で生きているのは1人もいなかったとのこと。推測によるとクライムの攻撃でクレーターが出来て、アイトが地面でそれを受け止めた。

しかし、威力が強すぎてクレーターが生まれ、その時に無我夢中で俺がカウンターをしたんじゃないか？との事。いや、記憶無いんですけどば。

てか、クライム死んだのか？まだ居合い斬り教わってないの？極刑に値するね！死ぬならせめて俺に伝授して逝け！

にしても市民と部活を守れなかったのは辛いけど、割り切るしかない。まだまだ俺の力が足りなかった事がよく分かった。あの時よりかなり強くなったと思ってたけど、まだまだ足りない。

医者の許可が貰えたら早速鍛えないとな。

ただ問題が2つほどあったそうなの。

1つは何者かによって船で捕らえた海賊たちが全員皆殺しにされていたことだ。特に強い2人組は嚴重に管理されていたらしいけど、見回りに行った時には息絶えていたそ

うだ。

なんでやろなあ。もしかしてステューシーとかの仕業か？今も多分諜報員だろうし。でも非番だった可能性があるか。

にしても綺麗だったなあ……。キラキラと輝く髪。玉のように白い肌。パツチリとした目。長いまつ毛。そして何より柔らかい体。

走って逃げた時なんか必死に前屈みになるのを我慢したもんな。あれはヤバい。男としての本能が揺れまくってる。

凸るべきか、留まるべきか。ホントに悩ましい存在だ。

じゃなくて、とにかく海賊たちが全員皆殺しにされていたってことだ。

そんで2つ目がその犯人が居ないこと……ってまだステューシーに引っ張られてら。嫌でもホントに凄いのよ。あのオスを磁石の如く惹き付ける魅力。とてもでは無いが逆らえる気がしない。

お持ち帰りしたい、というかされたい。出来ることなら馬乗りで——ゴホンゴホン!!

改めて、2つ目が天竜人が向かってきてることだ。どうも天上金を盗られたことの腹いせをするためらしい。

天竜人ねえ。ものすつごく会いたくない。俺が海兵やつてるのはあくまで仲間と市民を守るため。守れなかつたじゃんとかの発言はいらぬ。次こそ何が何でも守る。

しかし、なんであんなムカつく野郎共を守らにやならん？ 仕舞いにや海軍抜けたるぞ？ お？

またなんか脱線仕掛けたが、天竜人が来るのの何が問題かつて、そもそも来ること自体が問題なわけけど、さつき言った通り海賊たちは全員皆殺しにされてる。

これでどう腹いせをするってんだろうか。

モモニキ曰く、海賊達が全員殺された事は連絡したらしい。なのに、ここに来る意味が無いのに、それでも変わらぬここに向かつてるといふ。

まあ来るもんは仕方が無いので、受け入れる準備はしとかなくては、つてことで今大急ぎで後始末をしてららしい。俺も出来るだけ早く参加しないと。

そういえばアインとモネどうしてんだろう？

—————

「追い詰めたわよ」

私は今海賊達を殺した犯人を追っている。犯人は2人組みだったこともあって、片方はモネが追っている。一体どこの誰が何のためにしたのか、聞き出さなきゃね。

運が私達に味方したと思う。私とモネが独房に入った時にちょうど怪しい2人組み

がいたのだ。問いただすと逃げ出したからこうして追いかけたわけだけど、そこまで実力も無いようであっさり追い詰めれた。

「大人しくした方が身のためだと思っわ。両手を上げて地面に俯せになりなさい」

幸いな事にこの犯人は抵抗する気がそこまでないみたい。私達が捕らえた彼らを殺した理由をしつかり吐いてもらいましょう。

にしても、アイトが戦つてた方は土煙（根煙？）が酷くて何が起こつてたのかは分からなかった。だけど、アイトが仲間や市民を巻き込んでするはずがない。

でも今はそれを気にしてる場合じゃないわね。後でアイトの意識が戻ったら聞くとして、今はこつちに集中しなくちゃ。

彼女に持つてきた手錠を嵌める。能力者用の海楼石入りの物だ。たとえ能力者じゃなくとも、この硬さから壊して逃げることはまず出来ない。

「——わざわざそこまでするなんて……用心深いのね」

「当然です。貴方は捕えなくてはならないので」

「ふうん。悪いけど私は捕まる気が——ないの」

「え？」

その瞬間、私は彼女の足に首を挟まれて地面に押さえつけられていた。彼女は右足で私の首を挟み、左足で彼女から見て後ろの左手を踏みつけた。

「グウツ!？」

「残念呆気ないわね。貴女ぐらいなら手を使わずとも軽く倒せそう、ね」

「……………」

手錠を嵌められたのはワザとだったのね! やられた。——手錠を嵌めて油断した隙を完璧に突かれた。ここは能力を使って…

「残念だけど能力は使わせないわ。折角ここに海楼石がある事だし」

彼女は私の体に手錠を押し付けてきた。わざわざそれを使った事が裏目に出るなんて…! だからって負ける訳にはいかない!!

私は紙絵を使って咄嗟に脱出して、彼女の側頭部に蹴りこんだ。でも、彼女には落ちて着いて対処される。少し離れて対峙すれば分かる。この人は間違いなく私よりも強いと。

「へえ…少しはやるようね。そう簡単に抜けられるとは思わなかったわ。——少しだけ相手をしてあげる」

「ガハツ?!?!」

次の瞬間、私はお腹を蹴り飛ばされて家を数軒破壊していた。尋常じゃない蹴り。鋭い上に速くて重い一振。鉄塊をしてなかったらと思うとゾツとする。

だからって負けない!!

それから私はアイト・モネの2人よりも得意な武装色の覇気を鉄塊に合わせながら戦った。時に上から時には後ろから。フェイントも織り交ぜながら何度も何度も攻撃した。

しかし、相手はそれを全て正面から弾き返してきた。それだけでなく、私の剃を圧倒的に上回る速度で後ろを取られた。私は回し蹴りをして応戦しようとしたが間に合わず、背中から鋭いもので深々と刺された。

血を吐いてバランスを崩しマングローブにぶつかってしまった私を、彼女は上から叩き落とし。その時に能力を当てようと思ったが、それも出来なかった。当たりを落ちた衝撃で上がった埃が舞い視界を狭める。次に私が意識を戻した時に彼女は近くにはいなかった。

「———!!!」

「……何をしてるの?」

私は気になってそこに傷を庇いながら近づくと——

「くっ! 貴女動物系の能力者だったのね! 一体なんの能力者? いえ、関係ないわ——嵐脚・線!」

彼女は小さなキツネと戦っていた。なんか変な構えをしながら戦っている。その姿を見て私は思った。彼女は天然なのだ。もしかしたら勝てる? とも。

「貴女……何してるの？」

「えっ!?—— な!? もう一人!? 分身出来るっていうわけ!?」

「出来ないし私は動物系でもないわよ!!」

「…… あなた程度の実力じや彼には分不相応よ。あなたはよくて中将、悪くて大佐。彼は悪くても大将になれる。わかるでしょう? あなたじや釣り合わないわ」

動揺を隠すためかあからさまな話題変更をする彼女。言ってることにはカチンと来るがそんな先の事誰にも分からない。だから冷静に返す。

「そんな未来なんて誰にも分からないでしょ? 動揺させたいのならもつと、マシな事を言いなさい——二刀流・瞬唯（まゆい）!!」

私のオリジナル剣技。二刀流・瞬唯。剣の要領で急接近し間合いに入った瞬間に移動を止めて、慣性の法則を利用して、二本の剣で横から体の中心の一点を突く技だ。これは見聞色が得意なやつに対して特に有効な技だ。

慣性の法則を利用することで私の意志とは関係なく剣は相手の体を貫く。こうすることで敵に感ずかれる事無く攻撃出来る。

「っ鉄塊!!」

これは防がれてしまったが関係ない。今の私では彼女には勝てない。だけど食いだがることは出来る! 少しでも痛手を負わせて動きを鈍らせる!! それに私はアイトの隣

に立つんだ！」

「何度攻撃しても無駄よ」

「くっ！簡単にはやられないわ！」

「そこままでして彼に釣り合おうだなんて……………セクハラね」

「まだまだっ！……………つてなにが!？」

それから私が意識を取り戻したのは本部に戻った時だった。

—————

「フッフ…わざわざご苦労さまね。まさかこんな所まで追ってくるなんて…そこまでの理由を聞かせて貰えるかしら？」

「悪いけれど、それを言うつもりは無いわ。そんな事よりも早く捕まりなさい？これ以上罪を積まない方が貴女にとっては得策よ？」

「あら？貴女にとつては違うのかしら？」

「私にとつては—————どうなんでしょうね…!」

私はそう言うと同時に能力を使用した。戦闘の妨げにならないように、誰も入れないように巨大なカマクラを形成する。これで守れるし、優位に戦える。

「この島で雪を触る事になるとはね……………まあ、ベタつくよりかはマシね。それで？」

私をどうするのかしら」

「決まってるでしょう？ 殺す気で行くから覚悟しなさい……！」

その言葉を合図に戦闘が始まった。まずは小手調べと私が吹雪からの雪兎の連続攻撃をする。これはアツサリと回避されたから、雪に潜り込んで四方を囲むように私にそっくりな雪像を作つて攻撃させる。

「ぬるいわね……この程度かしら？」

しかし彼女にとつては大した事ないのか、全ての雪像が一瞬で蹴り壊された。見聞色で分かつてはいたけれど相手は強い。だから攻撃させる時間は作らない。攻めて攻めて攻めきる姿勢で行く。

「雪華（ゆきばな）……！」

雪像を壊した直後に私が放つた技は雪華。文字の通り色々な華を凝縮した雪で生み出し、覇気を多少とは言え込めて彼女の周囲に生やす。所謂、楔のような物ね。

「吹雪……！」

その雪華を踏むような事を彼女は絶対にしないだろう。だから周囲に飛ばす。これで多少の時間稼ぎができるはず。それに私が彼女ならそこから抜け出す。包囲した者は多少の気の緩みが生まれるもの。その隙を彼女のような手練（てだれ）が見逃すはずがない。

「フフフ……いいわね。でもまだまだ全然足りないわよ？」

私の予想通り彼女は一瞬で抜けて後ろから仕掛けてきた。見聞色を鍛えてなかったら気付かなかつただろう。アインが武装色が得意なように、私は見聞色を得意としてる。それが役に立——

「避けられないわよ?」

「ウツ?!?!」

余裕を持つてカウンターをしようとしてレイピアを抜こうとした時に、私は目にも止まらぬ早さで吹き飛ばされていた。目に見えない、気付けない速度の一撃は凄まじく、吹雪を突き破つてカマクラに私は激しく衝突してしまった。

私は攻撃が当たった事に驚いた訳では無く、攻撃の速さに驚愕した。今までも武装色が使えぬ人達と訓練をすることで、自然系が無敵ではないことはよく分かっていた。

しかし、ここまでの速さの一撃は食らったことがなかった。その結果、私は普段ならまず当たらない自分の能力に牙を向かれてしまった。

「さて、まだ動けるかしら?」

今の一撃だけで私の体はもうボロボロ。何となくそんな予感はしていた。けれど多少でも痛手を負わせようと思つて挑んだ。その結果がこれだ。情けない。

さっきの戦いで私は柄にもなく焦ってしまった。そして戦いが長引きアイトやアインへの援護が遅れてしまった。タラレバの話は意味が無い。そうは分かっている、考

えてしまう。

私の力ならもつと速くブタを倒してアインを助け、アイトが苦戦する前に一瞬で勝利を決められた可能性もある。それだけ実力があると自負してる。

だから今度は彼女を直ぐに倒す。無理なら無理で直ぐにアインの助けに行こうと思つた。でも、出来ない。さっきのとは違い、相手はとんでもない強さ。勝てないことよりも自分の不甲斐なさが悔しい。

「……………限界のようね。折角だから良いこと教えてあげるわ」

彼女はそう言つて雪を踏みしめながらやつてくる。まるで私の事を踏み潰し、心を折ろうとするかのように。ザクザクと踏まれる度に攻められてる気がする。

「海賊だけでなく、海兵と市民も巻き込んで、あのあたりを破壊し尽くしたのは、アイト中尉らしいわよ?」

「そんなわけ……………!!!」

「信じるかどうかは貴女次第よ?それじゃあね」

「ま、まちなさ——」

そこで私の意識はプツンと途切れた。

じゆうにわ

翌日俺が動けるようになって、先輩方と天竜人の出迎え準備をしていると、俄に騒がしくなった。てつきりアイツらがもう来たのかと思つたら、アインとモネが意識不明の重体で運ばれてきた。幸いにも命に別状はないようだ。

「お、おい！何があつた2人とも!？」

「……………」

「コイツらが気を失う程の奴がこの島に居たか？」

「いや、そんな報告は受けてない。せいぜい6000万ぐらいの奴しかいないはずだ」

この事態に先輩方も若干の動揺を見せてる。そりやそうだ。俺もこの2人、特にモネが前半の海でやられるなんて思いもしなかった。アインも勝てなくとも負けるような事には、まして、深手を負うなんて考えられなかった。

というか――

「――い！ おい！落ち着けアイト!!」

「――ハッ!……すみません、つい出てしまいました」

いかんいかん。2人をやられた怒りで覇気とか殺気が漏れてしまった。不本意とは

いえ威圧してしまい申し訳なく思う。しかし、一体誰がやりやがった？

「気持ちには分かるが犯人探しはまた今度だ」

「ああ、招かれざる客がいらつしやつたからな」

2人に言われ視線を海に向ける。そこには軍艦数隻に護衛されながらやってくる巨大なガレオン船がいた。その船の帆には世界政府のマークが記されている。

「すみません先輩方、対応任せてもいいのですか？ちよつと暴れたいんですけど」

「……分かった。ただし服装を変えて誰もいない所でするんだ」

「戻つたら2人に会いに行け」

先輩方には申し訳ないが、大事な2人がやられて部下と市民を全員守ることも出来ない。その上あのムカつく奴らが来る。下手すれば殺しちまうのは明白だ。

そんなわけで俺は軽く暴れることにした。

—————

薄暗い建物の中で2人の美女がワインと紅茶片手に寛いでいた。

「まずは今回の任務お疲れ様。協力してくれて助かったわ」

「いえ、私としてもいい経験になりました」

「そう、なら言いけれど。——とところで普段通り話してくれないかしら？謙虚な貴

女って違和感しかないのよ」

「分かりました。——それにしても無茶苦茶な任務でしたね」

ブルンドの髪を結んでいたゴムを外し、愛用のメガネをかける女性。胸の膨らみを抑えていたサラシを外し、細すぎる体には重いとしか思えないスタイルになった。

「フフフ…あの貴女もとうとうCP9になるとはね。時が進むのは速いとよく分かるわ」

「私の事より貴女の年齢の方では？——若さを食べる気ですか？」

「しないわよ…フフ…確かに私は内々で魔女だとか言われてるけど、まだ若いのよ？」
「それで、これからどうするんですか？彼をさらけ出させると言っていましたけど」

「言う程難しい話ではないわ。彼には守るべきものを守ると誓うも、守れず力が足りない事を知らせる。そして少しずつ3人の中にヒビを入れる。そして次は方向を正反對にする。無気力にさせて最終的には……ね？まずはここからよ。確実に絶望させるの。そしたら駒の出来上がり」

自らが立てた計画をワインの味と共に吟味しながら、今回の計画の首謀者・ステューシーは妖艶に笑う。

「つまり時間をかけて1人にさせるといふ事ですか。相変わらずえげつない…」

先輩の彼女に尊敬の念を抱きながらも、この人はやはり魔女だと再認識する彼女。その名はカリファ。この度ステューシーが昇進するのに合わせて、新たにCP9に任命さ

れた者だ。

「それじゃあ乾杯でもしましょうか。音戸とつていいわよ?」

「2人だけなのにいりますか?——それじゃあ互いの昇進と任務成功に:」

「乾杯」

いずれ彼女達がどのような運命を辿るのか、それはまだ誰にも分からない。しかし、これだけは分かる。彼女達こそがアイトを追い込む存在になると。

「わちぎの命令を無視するなぞ 不敬だえ!」

「:……申し訳ありません。全ては我ら2人の責任です。これからもっと良い結果を出せるように奮励努力致します故に、この場はご容赦を」

やって来るなりいきなり怒鳴り散らすのは天竜人。一応偉い人だ。2人は打ち合わせ通りのセリフを言つて、怒つてるヤツにはとりあえず頭を下げる。

「ふん!するわけないえ!わちぎに届けられるはずだった天上金を盗んだんだえ!だからわちぎがこやつらを態々自ら殺しにきたんだえ!それをできなくさせるのは謀反の心ありなんだえ!」

「ツ?!滅相ありません!我らそのような考えは少しもありません!」

「いーや!あるえ!あるなら当事者が出てくるはずだえ!それをお前たちがかばうのは

そいつ含めて謀反の心ありなんだえ！」

「それは有り得ません！アイトは真面目で優しく可愛くて健気で強くて物凄く良い奴なんです！奴に限って有り得ません！」

「関係ないえ！なんであれわちきの気分を害したんだえ！」

2人の息のあつた言葉を聞く気がない天竜人。その怒りは周りに散々当たり散らしでも晴れることはなく収まる気配がなかった。

「(おい！このままじゃまずいぞ！)(わかつてる！こうなったら俺らを売るぞ！)(それしかねえな) お願いがございます。我ら2人はどんな処罰も受け入れます。しかし、アイトだけはお助け願います」

「ん？今どんな処罰も受け入れるって言ったえ？ならいいえ！お前らには追って沙汰を下すえ！それまで楽しみに待ってるんだえ！」

(おい、なんでこうあつさり許されたんだ？)

(分からん。処分を下すっていうのをやってみたいとかじゃないのか？お前その辺詳しいだろう)

(噂には敏感だが…流石におれあ知らねえよ)

2人が土下座をして頼み込んだことが功を奏したのか、天竜人の機嫌は何故か良くなった。普通ここまで言葉が揃つてると何かしら反応するものなのだが…。

とりあえずアイトが無事ならそれでいい。この2人、いや、次期中将の者達は揃ってアイトが可愛いのである。

結果として彼ら2人は本部に送られた。面倒な処分が下らないことを祈っていたが、鶴さんがいる以上何の心配もないなと思ひ直した。その日のうちに無罪放免となり、酒を浴びるように飲むのはまた別の話である。

—————

「観光、ですか？」

「そうだえ！お前ちようどいいからわちきの護衛役にくわえてやるえ！」

ものすごくありがた迷惑。とかいうか心の底から嫌である。先輩方のおかげで昨日は色んなこととしてストレス発散させて貰ったし、処分も先輩方のおかげで軽くなった。

だから、まあ、折角守ってもらったわけだし、余計な面倒事を起こさないように我慢するか。あーあ折角ストレス無くなったのになあ：胃袋に穴あきぞ。

「まずは観覧車に乗るえ！」

奴隷に跨つて進む天竜人。俺は今すぐにでも解放してやりたいと思いつつも、何とか我慢しながら行いく。どうせ市民に暴力の限りを尽くすだろう。

だからその時に気付かれないように彼らを助ける。鎖さえ付けさせなければ何とかなる。そんなことを考えていると予想通り問題が多発した。

「わちきの前を歩くなぞ無礼だえ！」

「お前顔がム力つくえ！」

「この店がいらないうえ！」

「この橋つまらないえ！」

「お前気に入つたえ！妻にしてやるえ！」

「わちきに話しかけるなえ！人間がえ！」

俺は問題が起こる度に裏で解決していたが、護衛達が面倒な事に告げ口をしやがった。大人しく罰を受けるといふ旨を伝えたら足を散弾銃で撃たれたぜ☆足が使えなくなつちまつたナ！

……………殺していいか？

いやいやダメダメ反抗はしない。もしすれば周りにも被害が出るし、面倒な事になるし、先輩方にも申し訳ない。兎に角大人しく罰を受ける。俺が受ければ他に誰かが被害を被るわけじゃないのだから。

観覧車の次はヒューマンショップ、原作でも出てきたあの店だ。何となく行く気はしてたから、驚くことは無い。しかし、こいつは俺に爆弾を投下しやがった。

「特別に金を用意させるから好きなのを一つ買うえ！」

自分の金ではないからだろうが、この俺に奴隷を買わせるとは……！俺は腸が煮えくり返るような気分を何とか鎮火させる。プラスに考える。プラスに考えるんだ。

俺が1人買う事で奴隷が1人減るんだ。買ったらサツサと奴隷という、理不尽に扱われる立場から解放してやればいい。特に天竜人が狙いそうな人魚や魚人、美女だとか高額賞金首：はいいや。犯罪者は守る必要はないな、うん。

早速始まったオークション。司会者がドンドン売り込んでいく。そしてオークションが中盤に差し掛かった時、今までの奴隷より圧倒的に存在感を放つ者が現れた。

「さあさあ盛り上がりつつ参りました!!! 続いては『買いの一品』 エントリー No. 17 は絶世の美女♡ご覧下さい!! この素晴らしいプロポーション! グランドラインは前半・ビバビバ島にて『踊り子』として1番人気だった褐色肌のくバカラです!!」

なかなか見られない程の美人が出た事もあって、会場のボルテージがひとつ挙がった。中にはいきなり1億と声を上げるものがある。

それが誰かは分からなかったが、確か映画で出てきた彼女が誰かの奴隷となる。最終的にテゾーロが助けるとは思う。だが、俺がいる時点でその確証はない。それならば、俺が買って解放してやる方がいくらかいいと思う。

そんなわけで俺はバカラの購入をする事にした。

—————

色々あったが俺達もまた本部に帰還することが出来た。天竜人のせいで足がしばらく使えなくなっちゃったが、無事帰れて何よりだ。隣に座ってるバカラを見て意味深な視線を浴びせられているがね。

俺は今食堂で飯を食ってる。アインとモネはまだ寝てるからいないがな。後数日もすれば怪我は完治するとのこと。意識もそろそろ戻るらしい。

周辺を見ると大きなケバブとシャンパンを持った女性とタバコを吹かしてる男性がいた。それを見ながら食べてる俺の前にシャンパンを持った女性が座った。

「帰ったのねアイト。ヒナ再会」

「久しぶりだなヒナ嬢。大体一ヶ月ぶりか？」

「そうね。ところで貴方の隣にいる女の子は？ヒナ疑問」

「まあ気になるのは当然だよな。アインとモネも気が付いたら気になるだろうし。驚いた事にガープとゼファーには褒められた。男になったのだの、そういうのが好みなのかと。」

いや、婚前交渉はしてないからな？俺は前世は知らんが今世は童帝だ。舐めるんじゃない。

説明が地味に大変だが、経緯をヒナ嬢に説明していると突然煙たくなってきた。それはヒナ嬢のタバコだって？残念。今のところヒナ嬢はタバコしてないから。

「よお帰ったか。聞いたぞ？天竜人様を銃で撃った、てな」

「そつちこそ聞いたぞ？一人でアジト壊滅させたんだって？」

「けつ……ちんたらしてるのが悪い」

「スモーカー君！いい加減そうやって一人街道行くのやめなさい！ヒナ忠告！」

「そう怒るなってヒナ嬢。こいつも少しはマシになってきてんだから」

「だけどねえ？と納得してないヒナ嬢。そりやまあずーつとこの調子だからな。ヒナ嬢やスモーカーと初めて話したのは、今からもうだいぶ前。

最初からだいぶキツイやつだったな。なんせスモーカーに言われた第一声が「人間が徒党を組む以上完璧な組織は存在しない」「海軍に妙な夢は見るな」だからな。

一方のヒナ嬢は昔から何かと助け合った中だ。海軍に入隊したばかりの俺とアインに色々と教えてくれた。何ならグループと一緒に3人で食事とかもよく連れてつてくれたし。

「ま、スモーカーも俺とヒナ嬢には普通に話せてるんだから良いんじゃないか？流石にずつとこれは嫌だけどな。そろそろ俺をグループさんやゼファー先生へ頼む役から解任して欲しいし」

「悪いがそりや無理だ。折角良い抜け道を手にしたんだ。手放すわけがねえ」

「はア……ごめんねアイト。後で締めておくわ。ヒナ謝罪」

「いいって、今度明日付き合ってくれたらそれでチャラだからさ」

「で？お前の隣のねーちゃんは誰なんだ？」

「そういうや説明したのはヒナ嬢だけだったな。最初っから説明すんの面倒だなーとは思いつつ、俺はーから説明をすることになった。」

「それから数日経って今日は休日。明日は左官への昇任式って事もあつてそれなりに良い服を身に付けなきゃならないらしい。というわけで今日はヒナ嬢と一緒に服を買いに来た。」

「これなんかいいと思う。ヒナ好感」

「そうか？キツチリし過ぎなのは似合わない気がするんだが」

「それは気の所為ね。貴方はもつと自信を持つべきよ。ヒナ推奨」

「俺なんかよりもファッションセンスがある、気がするヒナ嬢に言われたらそうなのだろう。その後も適当に予算内で見繕って貰って帰っていると前方から見慣れた2人がやって来た。」

「アーイートー！」

「……………」

「勿論アインとモネだ。相変わらずの雰囲気ですぐ仲良く歩いてくる。アイン髪とおなじ

色のはワンピースを来ていて、モネは珍しくタンクトップではなくTシャツだ。

どっちにせよ似合ってるんだが、モネの胸が凶器にも程がある。黒○のバスケットの時みたいだな。Tシャツのマークが伸びまくつとる。アインは何やら笑顔？でヒナ嬢に話しかけてモネが俺に寄ってきた。

「アイト、怪我は大丈夫なの？」

「ああ。この通りピンピンしてるぞ」

「良かったわ。ところで少し手を貸して貰えないかしら？」

「別にいいけど、どったの？」

「鍛え直したいのよ。徹底的に」

左官

じゅうさんわ

「それじゃあ… ルールは2対2で使っているのは武器と覇気だけ、それで問題無ければ始めましょう」

「リョーカイ。ヒナ嬢、準備出来てる？」

「勿論。最初っから攻撃し続けるわ。ヒナ専攻」

「まあ俺の足使えないし、攻撃は頼んだよ。アインもいける？」

「ええー！ぶっ倒してあげるわ！」

ヒナ嬢との買い物物の後、アインとモネに会った俺はタツグバトルを持ちかけられた。チーム分けはアイン・モネVS俺氏・ヒナ嬢。

本当ならアインとモネとは全力で戦いたいところだけど、生憎俺氏の足は使い物にならないので。というか足が折れるまで有りそうだし。

あとアイン。女の子がぶっ倒すなんて乱暴な言葉使っちゃいけません。貴方は何処の暴れ馬だ。

「コインが落ちたら始めましょう——はいスタート」

落ちたと同時に駆け出してきたのはアイン。両手足を真っ黒に染めていきなり殴りかかってきた。

いや怪我人を狙うのはダメだろう！ただでさえアインの格闘術はえげつないんだ。知ってるか?!その気になれば軍艦を一撃で破壊できるんだぞ!?

忘れもしない。あのとてつもない恐怖を与えられた出来事を。つい出来心でパンツをチラ見してしまっただけで、沖に浮かぶ軍艦の土手っ腹をぶち抜いたんだから。

今までも訓練中は時々端っこが見える事はあった。だからその度に拝ませて頂いていた。時に紫、時に赤、時に青、そして稀に現れる純白。

その純白を見る事が出来たものは必ず良い事が起こる。それもただ貰えるとかでは無い。レアな悪魔の実だったり、100億ドル相当の物まで手に入る時があるのだ。

その代償として見た者はアインによる鉄拳制裁が待っている。まあそんなものが、夢の前に立ちほだかる事など不可能だがね。ハハっ!☒?

「つて、危ない!!」

俺が咄嗟に避けた事でその場所に生まれたのはそこそこ大きなクレーターだ。容赦なさすぎる。何か気に触ることとしたか?

「ツ！アイト危ない！」

アインの一撃を避けた俺に迫るのは光り輝くレイピア。これまた寸分の狂いなく俺の頭を狙ってる。いやだから、割とマジでコロ助か？じゃなくて殺す——!!

「フウ：アイト緩みすぎ。ヒナ憤怒」

「や、すまん。でも助かった。ありがとな」

「イチヤイチヤしてる暇があるのね!!」

「うおっ?!?!」

「イチヤついてないわ！ヒナ困惑！」

襲いかかる2人と防戦しかできない2人。俺は誤って2人の顔を殴ってしまうことがあったのだが、終わった後に聞くと「悔しかった」「変わりたい」「らしい」。

あの戦いで俺はクライムに負けた。一方で2人は勝った。しかし、謎の刺客に完敗した。何も出来なかった俺も、実力差で倒された彼女らも、「悔しい」し、「変わりたい」。その思いを受け止めて互いに高め合う為に拳を振るう。ただ強くなるうと思うのではなく、もつと守る戦闘方法を身につけよう。俺は強くそう決心した。

そのまま4人で殴り合いの喧嘩してたら、ヤギの散歩をしているセンゴクさんに怒られて帰された。なんでよりにもよってこの人来ちやうのよ。

「あー・そういえばまだ聞かせてなかったな」

「「??」」

「えーカモメの歌 替え歌バージョン ①モネ」

「替え歌?何かしら」

「緑髪のくく水兵さん ゆつるふわくくく水兵さん 白い肌、溢れる色気、ポー

ンツキュツボンツ 波でポヨポヨ揺れているくく♪」

「ちよっ!?何よその変な歌!モネに失礼じゃない!!」

「あらいいわね。今度録音させてちょうだい?」

「気に入ったの!」

「でも白い肌ってのは在り来り過ぎない?ヒナ不満」

「それもそうね(だな)」

「ノリノリ!?それもヒナ嬢まで!」

結構な力作だったんだが、確かに「白い肌」ってのは在り来りだなあ。考え直すところですかね。

「ヒナ嬢も今度作ろつか?」

「お願いするわ。ヒナ期待」

「……………私のは無いの?」

さつきからツツコミしかしてないアインの目がかなり不満そうだ。にしてもこの顔

反則だろ。俺の背が伸びた事もあって下からのその見られ方はやばい。マジでやばい。

「聞きたいなら聞かせてくださいってちゃんど頼まなきやダメよ？アイン」

「人に何かを頼む時はしなくちやダメなことがあるわ。ヒナ忠告」

少し待っててくれますかね2人も。このアインの顔を焼き付けたいんですわ。何が
いいかって？言う必要なんて無いだろう！

小動物のようにこちらを見上げて！目を潤ませて！頬を赤くして！演技でもなくて
！美少女すぎる美少女が！……………悩殺されそう。てか、されたいまでである。

俺氏の記憶はそこからほとんど残ってない。気付いたら次の日だったからな。しか
し何故女性が4人も寝てるんですかねえ？決して手は出さない……………はず。

まあ外に行つて準備運動でもしますか。

※替え歌バージョン②アイン

青髪のくく水兵さん ツンツンしーてる水兵さん 長い足、ハリある身体、肩凝り
なし いーつもチラチラ見えているく♪

「それで？そこでコソコソ何してんの——バカラさん？今まで大人しくしてたのは演
技か？」

「——あらあら、気づかれてたのね。上手く奴隷らしくしてたと思つただけ」

そう言つて奴隷の証である首輪を鍵を使って自分で外した彼女。気品のある笑顔を

向けながら、どこか裏がある事を感じさせる。

「一体なんの為にあそこに居たんだ？それも奴隸として」

「簡単な話でしょ？私の事を買うのは裕福な人ぐらい。奴隸になればその人から多くの運気を得られる。そうすれば大金が手に入る。これほど楽な稼ぎは無いわ」

「なるほどな。それで？これからどうするつもりだ？分かつてると思うが、お前がやってる事は犯罪だ。どうやって運で大金を得るのかは知らないが、窃盗をしていることは間違いない」

「そうねえ？——あらあらもしかして私を捕らえるつもり？今日は大事な昇任式じゃなかったかしら？」

「俺の事よりも自分の身を案じとけ。こう見えて俺は——強いぞ？」

「!!」

その時周囲を俺の覇気が支配した。あのクライムとの戦いから俺もまた意識が変わった。アインやモネのように守られる存在から自らが助ける存在に変わる事を望むように、俺もより海軍としての高みを目指している。

「時間が惜しい。直ぐに決めてやる——刺！」

「(触れた瞬間に吸って——!) つ！早い！」

「六・王・銃!!!」

「ガッ、……ハッ……!!?」

剃で接近して鳩尾に六王銃

正直いってこの前の俺なら躊躇してた。特に相手は女性だ。それも身体能力が映画の中でもそこまで高くなかった印象のある彼女に対してだ。

意識を変える。今までの俺が根底にしてたのは1にも2にも【守る】その一点張り。それで勝てなかったから、攻撃の方法を極端なくらいに変えた。攻めの一つ一つで確実に仕留める。

「予想通り あっさり倒せた、な。でも——「それくらいやった方がいいわ。ヒナ満足」……ヒナ嬢」

俺の後ろから話しかけてきたのはヒナ嬢だ。寝巻き姿の為刺激が強すぎる。が、それは置いておこう。真剣な話に聞こえる。

「海賊相手に手心を加えるのでは制圧できないわ。貴方の信念は【守る】だったわね? だったら貴方には守りの姿勢よりも、自分の犠牲を顧みずに突っ込む方が合理的。今みたいにドンドン攻め込む方が良いわ。限度はあるけれど、専守防衛よりかは私はいいと思うわ。ヒナ納得」

自分で言って満足して納得する。なんとというか俺にはホント素で言ってくれるよな。

ヒナ嬢って。でもその通りだと思う。日本でも専守防衛がどうのこうの言ってたけど、そもそも専守防衛って響きが良いだけであまり良いものとは思えない。

相手から武力攻撃を受けたとき、その時初めて防衛力を行使してその防衛力行使の方法も、自衛のための必要最低限度にとどめる。その上保持する防衛力も自衛のための必要最低限度のものに限る。

これってつまりやられたら少しだけやり返すって事だよな。殺人とかはしませんよ。つてさ。そんなんで平和になるわけがないな。

隣接する国が増長して来るのも当然の話だ。これからは俺も守るために攻め込もう。これなら【先手必勝】を正義に掲げるのもいいな。

「クッ！……ゲホゲホッ!!」

「あ、忘れてた。怪我ないか？」

「……それを本気で言ってるのかしら？」

「以上を持って今年の昇任式を終える。最後に……本当ならセンゴク元帥によるお言葉があったが、急遽変更することになった。ではグループ中将よろしくお願ひします」

俺たちはそれぞれがアイト・アイン・モネの順番に小佐・大尉・大尉に昇進した。これから俺はさつき部下にしたバカラ含めて4人で支部に配属されることになってる。

バカラはさつき話してたところからして大方能力をもう身につけてるって所だろうか？それなら結構やばかったな。下手したら俺負けてたし。ヒナ嬢も相性悪そうだな。

俺の配属先の場所はグランドラインの前半の何処かだそうだな。海賊の被害が多いところにしてやろうか、とガープ&ゼファーから言われたからその発表か？いやそれはなんか公開処刑みたいでやだな。

「スマンのわざわざ時間取ってもらって。直ぐに終わらせるから安心してくれ。皆知ってると思うが今年世界会議が行われる。その為に護衛船を各国に派遣するわけなのだが、今年はジェルマが参加することが急遽決まった」

ジェルマかあー。割と好きな国なんだよな。ジャッジはそこまで好きではないが、レイジュは大好きだ。ルフィの唇を奪った時、まじで惚れたのを今でも覚える。

出来るなら会いたいものだ。まっ、結婚なんて夢のまた夢だろうけど。なんせジャッジが義理とはいえ父親になるんだからなあ。許可してくれたとしても俺が海軍辞めることが条件！って言われたり……。

「誰を派遣するかは後日個別に伝えるが、皆引き締めて任務に当たってくれ。ワシはこれから休暇じゃがな」

アンタ休みかよ。現役なんだから仕事しろよ。労働法だつて？あの怪物には当てはまらないよ。だつて人間じゃないもの。

若干の変更があつたとはいえ式自体は問題なく終わった。にしても左官になるのホントここまであつという間だつたなあ……。

「何感慨に浸つてるんだい？」

お墓に移動して浸つてた俺に話しかけてきたのは、優しい優しいおばあちゃん。海軍の浄化者こと、鶴ばあちゃん。本人は「ばあちゃん」よりも「さん」とか「ちゃん」が好きらしい。どうでもいいか。

「あ、鶴さんでもつす。ちよつとコードと正義考えてまして」

「佐官になつた以上決めなきやならないからねえ。まあそんな難しく考える必要は無いさ。名前が人を作ることは無いんだから、アンタがどう生きていくか、それ次第さね。それとこれがアンタの配属先だ」

その後少し話した所で鶴さんは部下と共に新世界へと向かつていった。俺もいつかは行くんだろうなとか思いつつ、お墓参りを済ませて俺は支部に向かう事にした。

海軍本部少佐　棒雀（ぼうすずめ）のアイト

もう少しカッコいいのが良かったのである。それしか勝たん。まあ仕方ない。これから1年間支部に行つて指揮・管理系統の勉強をしっかりとしよう。

因みに正義は【先手必勝】

そんなこんなでアラバスタ近くの支部にいます。もうかなりここにいますアイトです。流石に大国が近くにあることもあって、犯罪はそこらの島よりも少ない。お陰で楽させて貰ってます。

少ない理由はクロコダイルがいることが一番理由が有りそうだが。そういえばまだバロツクワークスって無いのかな？それとも存在してる？

ヤバいなその辺の知識無くなってきてるわ。でもまだこの辺り雨降るしダンスパウダーとかも確認できてない。なら良いよな。暇だし最近の日課全員参加のバトルロワイヤルでも見ますか。

全員参加のバトルロワイヤルって言っても一度に支部全員でやるわけじゃない。簡単に言えば1日1回だけ行われる志願者30人による模擬戦だ。

時間が有り余ってる事もあって、俺は勿論アイン、モネ、バカラもそれぞれ参加する。因みにバカラは未だに海楼石を付けてる。いつ何時でも。

忠誠心とかまだ無さそうだし、あの能力はチート過ぎる。身体能力さえ上がれば新世界でも通用する可能性があるわけだし。しっかり鍛えて本当の部下にしないとな。

因みにバトルロワイヤルの勝者には報奨金が与えられる。お金があると基本みんな

参加するからね。そんな感じでのんびりしてたら、俺のプライベート電電虫と仕事用電電虫が同時に鳴った。

こういう時は俺は決まってプライベート電電虫を選択する。だって働きたくないもん。で、この電電虫の番号を知ってるやつは、気の置けない奴らだけだ。

「はい、モスモス？どつらさまでせうか」

「アハハ！何それアイトさん」

「日常に刺激をと思つてね。面白かった？」

「うん！今何してるの？」

電話してきたのはこの前挨拶した時に気に入られたと思われる少女。名前をビビと言う。要するに王族とコネがあるということである。

「今はのーんびりしてるところ。世界会議あるだろ？あれに向けての準備はもう終わつたしね」

「おおー！じゃあ今から遊びに行つていい！」

「良いよー。それじゃ船で迎えに行くから待つてて」

「あ！それなら大丈夫！もうペルに運んでもらつてるからー！」

はい？ちよつと待てこのお転婆王女。なんつった？少しフリーズしかけながらも、俺は窓から外を見るとそこには、受話器片手に手を振る空飛ぶ少女がいた。

これ俺が怒られるやつやん。

もーなんで突然来るのよ。コブラ様に説明すんのすんごい大変なんだからな!? つた
く、ペルの奴もなんで乗せてんだよ。

俺は呆れながらも紅茶と菓子類の準備を始めた。

じゆうよん

「おっじやましまーす！」

「お世話になります」

そう言ってやって来たのは落ち着きの「お」の字は勿論、淑女の「しゅ」も何も身に付けていない少女・ビビとその少女の命令に忠実な空飛ぶ戦士・タラコ唇っペル。

2人の最近の趣味は基地の探検。しよっちゆう海軍の支部をこれでもかど探索しまくる。恐ろしい事に既に俺よりもこの施設を熟知してる。

まだ地下とか武器庫とかは……まあ良いとして、この2人が俺に隠し部屋・通路まで教えてくるんだぜ？最初は俺も突っ込んだよ。「何してんの!？」ってな。

けどこの少女とききたら王宮に呼ばれた時に俺に向かって大砲ぶっぱなしてきたんだぞ。理由を聞いたら泣きながら「ペル」「花火」しか言ってくれなくて、何も分からなかったけど。

「ねえねえアイトさん！今日は海賊来るかな!？」

「相変わらず物騒だねえ？なんで海賊を見たいんだい?」

「だって見た事ないもの!」

そうなんだよなあ。最近わかったんだが、このお転婆王女は好奇心が常に知らない事に向かっている。知らない事を全部知ってやる、みたいな思考回路なんだよなあ。

因みにクロコダイルは海賊として見てないらしい。理由は味方だから。うん、その純粹な心を常に持ち続けてくれ。俺も騙しやすい。

そして早くコーザの嫁さんにもなりたい。そんで落ち着きを身につけなさい。最終的には淑やかになって、荒らしに来なくなることを切に願う。もう半ば諦めてるけどな。

「おーい！来たぞー！」

はーい、団体様のご到着……。コーザら計数十名が船に乗って来ましたとき。はあ、なんで連絡船に乗ってるんだよ。てか、何乗せてんだよ俺の部下は。まあ……モネが下にいるはずだし、対応してもらおう。

「頭痛い？」

俺が頭を抱えていると後ろから甘い天使の声と、甘いお菓子の香りがやって来た。ここに来てから青い髪をポニーテールにして、より活発になったお姉さん・アインである。

最近アインとモネはそれぞれ料理をするようになった。アインが主にお菓子を、モネが主にご飯を担当してる。暇な時間を見つけるとよく厨房に籠って作ってるらしい。

ダークマターだけは来ない事を祈る。

そんな話をしてると両腕にブレスレットをしたバカラがやって来た。子供達に手錠を見せない為に、このブレスレットが手錠の代わりに機能を果たしてる。当然海楼石入りだ。

「あらあら、アイトはお疲れなの？」

「そうなんだよー…だから甘えさせてくれー」

「！私が甘やかしてあげるよ」

「いや、それは難しいんじゃない？」

「どこ見て言ってるのよー」

「むー私も無いからなあ……」

「ビビ様……」

ビビがなんかペタペタと無いものを触っているが、そんなことはどうでもいい。一度で良いからバカラ(ベッド)に飛び込んでみたい。モネにも飛び込んでみたい。でも、ここに来てからモネの膝枕を堪能する機会が数度あったもんで……うへへ。

暑いからさー？モネに雪を使って冷やしてもらってたんですよ。気づいたらモネの膝枕で寝落ちしてたんですけども、あれは最高でしたなあ……。アイン？アインは幼馴染だし、そんな風に考えたことないなあ。昔から抱き合ってた寝る事はあったし。

子供の頃の夜なんか最高に可愛かった。俺の服をギュツて握るんだよ。雷とか風に驚いては「ピヤイツ?!?!」って、体をビクツと震わせる。今はもう聞けないからなくく……残念。

「(そうだ。ちよつと聞いてこよつと) アイーン、ちよつと(この2人)頼んで良い?」俺は2人に断りを入れてバカラを連れてある部屋に入った。いや別に飛び込むわけではないぞ? それは今度だ。

「生活には慣れたか?」

「お陰様でね。で、そろそろこれ外してくれないかしら?」

そう言つてブレスレットを指差す彼女。今日まで色々な事を教えてきたが、地頭が優れてるからなのかスポンジの如くそれらを吸収した。もう既に映画の時より実力はあるかもしれない。

「そいつはどうかな? 外したら何するか言つたら考えてやるよ」

「貴方の運気を奪うわ」

「おー怖い怖い。ま、ある程度したら外してやるさ」

話は終わりと言う感じで外に出ようとしたら突然館内に警報が響いた。この警報音は近くに海賊船が複数来た時になるやつだ。うるさければうるさいほど、海賊の数が増える仕組みになっている。

「前言撤回。お前も戦ってくれ」

警報音から察するに4隻の海賊船が接近しているようだ。枷を外したバカラも加えて倒すでしょう。わざわざ海軍を襲う事は無いだろうが、素通りさせるわけにはいかないし。

とは言っても今は護衛の準備をしてるわけで船に傷をつける訳にはいかない。ちよつとでも傷をつけたらお偉いさんに怒られるのは間違いないんだよなあ。そ・こ・で、1人1隻で倒そうじゃないか。

「というわけだからよろしく頼む」

「口に出して言ってくれないと私は分からないわよ?」

基地の屋上に集まった。精鋭4人。

「左から順に俺、アイン、モネ、バカラで行こうか」

「良いけれど、私やアインはともかくバカラはどうやって乗り込むの?」

「それならペルさんに頼んだら良いんじゃないかな?」

「私としてもそうして貰えると助かるわ」

そしてギャラリー。大人1人。子供わんさか。

「かしこまりました。では護衛は皆さんに頼みます」

「任せろー!」

「俺たちで絶対護ってやるからな!」

「スナスナ団の力見せてやるぞ!」

『おおー!!』

どんな風に倒すかな。サルベージとかは面倒だし沈没はしないようにしてみるか。折角だし新しい必殺技(厨二病)をお披露目してみるか。刀はどっこかなく。

「アイトさん! アイトさん!」

「ん? どつたのビビちゃん」

「私派手なの見たい! どっかーん!! ってやつ!」

おおっと、殺し合いを見る気満々なんですか王女様。おかしいなあ…さつきアインのお菓子で部屋に繋ぎ止めたと思ってたんだけど、お菓子へ海賊なのか? まあ…遠くなら悪影響が出る事はないか。

「お菓子食べながら見てるね!」

ホントにちやつかりしてんな。良い事なのか、どうなのか。いや良いや。危険な目に合わせなければ何とかなるだろ。最悪コブラ王に頭下げるくらいで済みますように…。てか、心読まれた? 気のせいだよな。

にしても刀使って派手な技…俺持って無いな。……………刀振るいたかったなあ。牙

突……………したかったなあ

現在俺は基地を避けて行こうとしてる海賊船の前に浮いてる。普段なら降伏勧告等をするが、今回は子供の見世物になつてもらおうわけだし（無許可）、最初っから子供達が飽きない大技で繋ぐことにしよう。

「さーて、まずは俺から行きますか——蛇足!!!」

俺は一際強く蹴り込み、上へと登つて行く。そうして力を込めて全力で側転のように回転し、ぶつとい嵐脚と指から放つ細かい斬撃を放つた。ようはカクの周断（あまねだち）の類似バージョンだ。

「ギヤアアア!」

「ウワアア!」

「ふ、船が両断され——!!」

「気をつけろ!細かいのも降つてきて——!!」

放たれた大小の斬撃は狙い通り海賊船を両断し、海賊達の手足を切り落とす。その一撃でその海賊船はあつという間に全滅した。船も沈みそうである。

「負けてられないわね……!」

俺の技（パフォーマンス）を見て戦意を高めたアインはすぐさま愛剣を抜き、数十に

及ぶ大きな斬撃を放つ。海賊船の斜め前から放たれたその斬撃は流星群のように降り注ぐ。

その技の名は 叢雨（むらさめ） 狭い範囲に限定的に降る豪雨のように標的の船を穿つ。船内に目を向けると船長らしき風貌の者も船ごと切られていた。

「アインもやるわね。私のは技名はないけれど……こんなのいかが？」

モネが空中で生み出したの巨大な雪像。色々と試していた技でまだ完成してないが、今回のようにパフオーマンスをするのには適している。

雪像が海に落ちるとそれだけで海賊船は波に呑み込まれかける。それで沈むなら良かっただろう。痛みがなく、逃げることも出来たのだから。

しかし沈まなかったが為に、モネは雪像の腕を空高く上げさせる。よく見ると雪像の反対側の腕は無く、片方に集中しているようだ。そしてその腕を下げた反動を利用して、思いつき振り抜いた。

「な、な、な……何だこりゃー……?!?!」

「に、逃げろおおー!!」

「ひ、ひいいいい!!」

海賊達は必死に逃亡を図る。しかし逃げられるわけがない。一部が溶けてキラキラと光る腕によって、彼らは正真正銘の海の藻屑となった。

「名付けるとしたら……氷天撃?とかになるかしら」

そんな仲間達の容赦ない一面を見ながら、バカラは敵船に降り立つ。ちようど良い事に敵さんは、モネが作り出した雪像に注意が向いている。

バカラはその隙を逃さずに海賊の体に触れて運氣を奪い、拾ったコインをコイントスで海に落とした。そして再びペルに乗り込み離れて行く。

ある程度離れた次の瞬間。最後の一隻はコインを狙ってきた巨大な魚に船員を乗せたまま飲み込まれた。

「……一体何をしたのです?」

「あらあら、気になりますか?——フフ、私の能力ですよ」

何がどうなったら今のような事を引き起こせるのか。ペルはわからないだろうなあ。だって本人にもどうラツキーか分からないんだからな。

—————

全員無事に海賊達を倒せたところでパフォーマンスは終わり、肝心の子供達は満足してくれたようだ。これからは子供達に見せられないような事になるので、アインとモネに頼んで気を逸らしてもらう。

俺はと言うと小舟を用意させてサルベージさせてる。俺自身は空を飛んでするつもりだ。んで、その前にバカラとお話していた。本人は枷を嵌めにやってきたつもりだろ

う。

「これからは自由にしていぞ」

「え？」

「お前はもう海兵として十分にすべき事をした。海賊達と戦う時にお前はこの場の奴らから運気を奪う事が出来ただろ？ペルや海兵がいるとしても、難しい話じゃないはずだ」

「……………」

「にもかかわらずお前は子供達を守った。その事実が大事なんだ。この事実こそがお前の根が良い奴だって証明になる」

「あらあら…それはどうかしら？私が演じてるだけかも知れないわよ？」

「たしかに俺らを欺く為の行為だったのかもしれない。例えそうだとしても、それでお前が犯罪をするなら俺に目がなかった。それだけのことさ。てなわけで、これからは自由にしていいぞ」

もともとバカラを捕らえる気は無かった。あの場で戦う事になったから捕らえたが、買ったのも自由にさせる為だった。これからコイツはまた犯罪をする可能性はある。

けどそうだとしてもコイツは真面目だ。生活に余裕のある今からなら、進んで犯罪に手を染める事は無いと言える。そう信じられる。

「……それなら残るわ。まだ私はやり残した事があるから」

「へ？やり残した事？」

「あらあら忘れたの？貴方の運気を奪う事よ」

マジか。いやー………マジですか。仲間になると言う事ですよね？それ。それはそれで嬉しいけども、なんか寒気がするんだよなあ。気のせいだよな？

バカラが正式な部下になった？と思うのでバカラにも子供達の相手をしてもらい、俺は空を飛びながら部下達と絶賛サルベージ中です。そして何故か背中に乗ってる方がおります。

「アイトさんかっこよかったですよー！」

そう、ビビ様でございます。

割と危ないので変に動くことができない。動きたくとも動けないと言うなかなか辛い現象である。人質を取られた警官つてのはこんな感じなのだろうか（違う）

「そりやどうも。けどどうやって乗ったの？」

「普通に飛び乗っただけだよ？」

どうやって俺に気付かれることなく張り付いたのかは分からないが、十中八九ペルがなんかしたんだろうなあ。アイツホントに守る気あんのか!?落ちるぞ!?下手すら死ぬ

んだぞここ!?

高いところから落ちるとな?海でも鉄のように痛いんだよ!それに色々浮かんでるやつに当たったらヤバいからな!?!刃物がそこら中におるんやぞ!?!修行中(拷問中)に経験したのとして教育せねばっ!!

「ねえアイトさん……私って魅力的かな?」

俺の心配なぞ知らないとばかりに何を聞いとんだこの脳内お花畑王女様は。…なんか言い難いな。

「(将来的には)魅力的なんじゃないか?」

「ホント!?!じゃあ将来お婿さんに来てね!」

「ええ…コブラ王になんて言うのよ」

「大丈夫だと思うよ?。パパは私に逆らえないから!」

オイコラコブラアア!!甘やかしてんじゃねええええ!!!そのくせ娘散々甘やかして、俺を叱るたあ…いい度胸してんじゃねえかあ!!

いかんいかん。何か変なテンションになっちまってる。落ち着いて考えよう。どうせ結婚とかもいざれ忘れるだろうし。うん。なんも問題無いな。

—————

昨日の彼女は幻想だったのだろうか。俺はそう思わずにはいられないレベルで困惑

している。この前出なかった仕事用の電電虫の連絡を確認したら、なんとジェルマの護衛役を担う事になりました。

ガープが「ワシと一緒に遊びに行くぞ！」と言って聞かないのでござる。新世界に行くんだとしたら楽しみ半分怖さ半分。しかしなんの為に俺をここの支部長にしたのやら。

で、そうなると問題が発生する。それが護衛の準備として用意した諸々ではない。これらの必要が無くなったわけではない。俺の代わりに護衛船を率いる人に渡すのだし。

問題は2つ。1つは今すぐにでもガープに合流しなきゃならないという事。世界会議は迫ってきてる。ここからそこに行くには昼夜兼行で空を飛び続けて何とか間に合うかどうか。

まさか海賊がそんなに居ない代わりだとか考えてないだろうなあ……。いや多分そうだろうな。手の込んだことしやがって。

そして2つ目が目の前で泣いてるビビである。一緒に行く約束してたしなあ……。こればかりは俺が悪い気がする。先に仕事用の電電虫取ってればこうはならなかったんだろうし。

「とりあえず泣き止んでくれないか？」

「うー……！ヒック……ヒック……！」

「別にずっと離れ離れになるわけじゃないし、向こうに行っても会えるから、な？」

「……ヒック……」

「会議が終われば戻ってくるわけだし、出来る限りアラバスタの近くに配属して貰えるように頼むから」

「……………また会えるの？」

「そりゃもちろん」

「…私が困ってたら助けてくれる？」

「当たり前だろ？お前の為なら飛んで助けに行くから」

「じゃあ……我慢する」

「よく出来ました」

頑張って泣き止んだビビを俺は撫でる。ちよつと会わない間に彼女は大きくなるだろう。それにバロックワークスと戦う時に、俺もサポートすることになるはず。

マリージョアで会うだろうが、その後どんな風に育つか。親みたいに楽しみに待つてるとしますか。

泣き止んだビビとアインら3人を残して俺は月歩で飛ぶ。本当なら彼女らも一緒に行く予定なのだが、時間が無いので俺一人で行く。

彼女らとも暫しのお別れだ。それ自体は寂しいが「レイジュに会える」事を活力にし

ながら俺はトライアスロンを開始した。

向こうに着いたら気晴らしにゼファー先生に逢いに行くかね。

じゅうごわ

目の前には何処までも澄み渡る青い空。石畳に寝転がり体中から汗が流れていくのが分かる。海独特の香りと涼しい海風も感じ、疲れが吹き飛ぶ気分だ。

無事に辿り着いた高揚感と達成感に酔い知れて、大の字に転がる事の幸福感。至福のひとつときとはこれだろう。

俺が良い気持ちで横になっていると突然俺の視界を黒い影が覆った。

気付けば煎餅とお茶、そして加齢臭が漂っている気もする。

「ぶわっはっはっは……よーきたのお！」

上から煎餅を撒き散らしながら話しかけてくるガープ。体が動かない以上、涎よりはましだと考えることにした。

ここまで来るのに何度も死にかけて。時に海賊に襲われ、怪鳥と戦い、雷に撃たれ、雨に晒され、風に煽られ、何も無い無人島に不時着したり、全身がつったり、餓死しかけたり、キリがない。

お陰で武装色と見聞色の覇気が鍛えられたとは思うがな。人間とは、死の淵に近付いてこそ本領発揮する。どっかの誰かが言ってたような……。

何はともあれ体が動かない。筋肉痛だけじゃなく、目が乾いてるのか良く見えない。その上雷とかのせいで服・体に外傷もある。

その代わりに木の枝に覇気を纏えるようになったし、ちつさい島なら全部把握できるようにもなった。

どちらも凶暴な動物と戦った時に身に付けたんだがね。武器をなくして枝を使い、夜寝るために見なくても分かるように……って感じで。

「さて、もう回復したじゃろ？直ぐに出港するぞ」

おい、貴方も目が見えないのか？目の前に倒れてる若者が見えませんかねえ？瀕死の俺を新世界へ連れてくんですかあゝゝそうですかあ……。

「安心せい。ジェルマなら今頃ノースブルーにおる。すぐ着くじやろ」

へえー今はノースブルーにいるんだ。ついこの前国を4つも滅ぼしたのに世界政府に加盟してるって、なんでなんだろうなあ。政府が依頼でもしたのか？

「奴らが滅ぼした国はどれも世界政府非加盟国。上の連中は利益が増えれば気にせんから。——浅ましい奴らじゃ」

なるほど。つまり邪魔者を消した上に収めてくれるお金が増えたのね？領土は増えてないだろうけど、物資とか資金とかを奪ってそうだし。

この頃にはもうサンジは逃げたのか？確か子供の頃に脱走してた筈。となると知り

合うのはまだ先になりそーだな。主要キャラには出来るだけ唾つけたかったなあ……。まあいいや。

目下の問題は体が動かないこと。目で訴えてたらガープが運んでくれました。本気で直ぐに船出すのかよ。せめてゼファーと酒を交わさせてくれよオ〜。飲酒でしか忘れられないんだよ〜……!! (ダメ男)

「——というわけなんですよー!! ヒッグ…エッグ……」

「かけてくるなり泣き上戸とはな。相変わらずの根性無しめ」

船に乗せられて進むこと数時間。やっと体が動かせるようになった俺がまず最初にした事は愚痴る事。もう暫く動きたくない。……働きたくないでござるよ (震え声)

「それで? 報告とかは無いか? 無いなら切るぞ。俺は忙しいんだ」

「嘘つけえー……。あんたは最近魚人島に遊びに行つてたじゃんかよー!! 俺が苦勞してゐるつてのによお? ……お楽しみでしたねええ〜!!?」

「…なんで知つてんだ。別に良いだろう、俺だつて男だ。人魚への憧れとかは当然ある」

「これだから…隠居人はよー? 楽でよー? 俺は毎日毎日…訓練…訓練…訓練…訓練…泣きたくもなるんだよお……………zzz」

「……言うだけ言つて寝やがって、俺が前線に復帰する事を伝えそびれちまつたな」

実はそんなに酒が弱くない俺は、樽1つ分の酒を飲んで就寝。せめて風呂には入れ。

ゼファーは強くそう思っていたようだ。

1週間後の船上にて俺はガープと2対1で鍛錬していた。俺の相方のモサ男。速攻で能力使つて隣でツルに絡まってダウン中。無理に新技を使うからだ。

とはいえビンズがここまで強くなつてるとは思わなかった。なんせ――

「おい起きろビンズ!!早くこれを解け!」

俺が全力で抜けようとしても抜けられないのだから。やられるならせめて、これを解いてからにしろ!そもそもなんで俺に絡まるんだよ!

「ぶわっはっはっは……そりゃそりゃ隙だらけじゃぞ!」

「!」

俺がツルとイチヤイチャしてると襲いかかってくる拳骨(メテオ)。こんな食らつたらアウトだ。一撃で昇天する未来が見える。……もしや見聞色が進化したのか!?

「ぐへえっ……!!」

したところで意味無いけどな。そもそも違うだろうし。それ以外に思いつかなかつただけだ。取り敢えずツルが壊れて抜けられた。

ここからは俺のターン!

負けました☆

あの後、真正面から突っ込んで数発殴りあつて呆気なくKOされました。俺も頑張つた。入口の扉ごと部屋がぶつ飛ばされても立ち向かつた。

結果として身体は全快、覇気は全開↓部屋は全壊、扉は前開。後で修復するのが大変でした。

おのれガープ……！暇だからつて眠気覚ましみたいに俺らをボコリやがつて……！あれ？ピンズは何も出来ずに初っ端自滅だったから……！実質俺だけか。——後で絞めろ。

今此処にモネとか居ないから出来ないけど、居たら氷漬けにしてもらうつてのに……。まあ今は仕事だ、仕事。

因みに俺が今回から使つてる武器は、両端に棘の鉄球が突いた変わりどころの槍だ。振つてよし、潰してよしの素晴らしい武器である。

サブ武器は長い刀。得意技は特にないが、モモニキに昔教わつたから一通り出来る。威力はかなり低いけど。後厨二技を少しだけできる。

これがものになれば次は前世で大好きだった、大乱闘のア○クみたいな重くて太い大

剣も使つてみたい。「大噴火！」とか言いたいだよ。——あーでも赤犬と被るな。どうでもいいな、うん。

「左舷より海賊船発見！距離500！海賊旗より船長が懸賞金1億4500万の鯨鯨（さめざめ）海賊団と思われまます！」

俺がそんな風に休憩がてら整備していると、海賊船の出現に船内は俄にざわめき出す。敵船を双眼鏡で見ると両方ともツルだらけだ。鯨の要素皆無じゃねえか。

俺が相手をボーツと見てると、皆さんは凄いものであつという間に戦闘準備が整つた。

かく言う俺も準備は終わつてる。こう見えて俺氏も色々となつとるですよ。まあ、ガープがいるから何もする必要がない気がするけど。

「拙者久しぶりの実戦でござる！」

隣にいるのはそう言つて鼻息荒く愛用の刀を構えるビンズ。此奴も何だかんだで、本部の中尉になつてる。この前能力を得たらしく、まだまだ伸びそうだ。

「ガープ中将！如何しますか!?!」

甲板の中央にて仁王立ちをしているガープ。珍しく立っている。普段なら船室でぐーたらしてゐるのに……。

ん？ちよつと待て、こいつつて立ちながら寝てる事があつたよな？それも結構な頻度であつた気がする……………。まさか——

そう思つて俺はガープの隣に立ち耳を澄ます。鼻ちようちは見えないが、腕を組んで目を閉じている。

「……………zzzz」

「——寝てる!？」

『またかよ!!』

予想通りというか、既定路線というか、本当にこの人はどこでも寝るな。今更本気で驚きはしない。この船に乗ってる人達も呆れて突つ込むだけだし。

「仕方ありません。ここは2人にやってもらいますか……………アイト少佐、ビンズ中尉。ちようど2隻ですし、2人で沈めてきてください」

ガープが寝てる為、代わりに指揮を執るボガード准将。冷静沈着で物静かな彼らしい口調で俺らに命令する。この人は的確な判断能力を持つてるし、この人がいうなら大丈夫だと思ふけど…俺戦いすぎじゃね？

—————

そんなこんなで、はい戦闘開始。

俺はすぐに敵船へ飛び移る。たまには純粋な力と楽しい厨二病を発現させるとしま

すか。

「てめえ…どうやって飛んで来やがった!? 能力者か!」

「能力者だろうが、一人で来るたア……舐めやがって!!」

「野郎どもやつちまえー!!」

外野がうるさいが俺は気にしない。ゆくぜ!俺が死ぬ気で身に付けた厨二技!!死んでも知らねえぞお!?(ウキウキ)

「無名とは言え剣に捧げた我が人生だ!死力を尽くせぬのならその信念……力づくでこじ開けようか…秘剣・燕返し!!」

「ギヤアアア!!」

「うわあああ!?!」

俺が放った斬撃で斬り飛ばされる海賊達。いやースツキリするもんだね。戦闘が楽しいと思えてしまった。……いつの間に俺は戦闘狂になったんだ?

円弧を描く3つの軌跡と、長い刀で生み出す不可避の剣技(本来)。と言っても俺の場合は、我武者羅に速く3回振り回すだけだ。

でも案外間違っていない気がする。分かっているもどこから斬撃が行くか俺でも良く分かんないし。気にせず次行くか……。

「必殺うー…牙突!!」

その瞬間、俺の目の前にいた海賊達は全員吹き飛んだ。俺自身が船の端から移動して中央のメインマストをぶった斬っている。

やり方は覇気を込めて黒刀にして、剃の脚力で突っ込み、死銃の速さで貫く。ついでに回転してさらに威力を上げる。これだけである。

割とえげつない攻撃だとやっつてから理解しました。意外と言うか、想像以上に派手な攻撃になっちまった。これならアラバスタでやっつても良かったかもしれぬ。

そこまで鍛えてないのにこの威力……。めっちゃ鍛えたる。クロスオーバーしたるでえ……!!

「く、クソオ……!!」

「ん？もしかしてお前が船長か？」

俺が技の使い方を考えてると、足元から船長っぽい格好をした奴の声が聞こえた。気付かぬうちに倒してたらしい。うーむ、本当に強すぎるなこの技。燕返しの方が良心的かもしれん。

「ああ！そうだよ！ちきしようが……!!折角船をリニューアルしたつてのに」

取り敢えず俺はソイツを拘束してピンズの方が終わるのを待つことにした。援軍？手助け？アイツが負けるような奴は居なかったぞ？だから大丈夫大丈夫（not社畜）にしてもリニューアルねえ？ツルだらけの船ってピンズにびったりな船だな。助か

るけど、まじで鮫の要素どこいったんだよ。あ、コイツの帽子鮫の被り物だ。
 ……………だからなんだよ。

「モ〜サ〜モ〜サ〜…!」

「?何してんだこいつ」

「頭イカれたんじゃ——!?!」

ビンズがモサモサダンスをしていると突然、船に絡みついているツルが動き出す。操られたツルは次々と海賊を捕らえていき、遂には全員を窒息させた。

「拙者のモサモサダンスは植物を自在に操る!………呆気ないでござる」

こうして短時間で海賊を撃破する事が出来た。めぼしい賞金が付いている奴は捕らえて独房へ。それ以外は近くの支部に送って終わり。

ガープはと言うと、夜になって起きたので一人で見張りをさせることにした。酷い? 外道? 自業自得だろ。翌日仕事せずに寝てたから、船員全員で叱ったけどな。

—————

あれから数日後、俺達は無事にジェルマの動く島? カタツムリ? との合流に成功した。今ガープとかがジャッジとお話してる。

そんなもって俺は——

「くっそ！コイツつええ！」

「本当にただの人間なのか？」

「俺より早いのかよ……！」

「全員やられちゃったわね」

ジェルマの子供達の相手をしてる。皆それぞれなかなか強いもので、倒すのに時間がかかったが、それでも覇気が強くなったお陰で勝てた。

ところでレイジュさんが滅茶苦茶お美しいのですが……。一般常識だったな。それにしては皆足とか、顔とか硬すぎてヤバし。

覇気無しで真つ向から蹴りあつたら数発で折れそう。首とか蹴られたら即死だよなあ。笑えねえ。疲れたし休憩させてもら——

「勝ち逃げするつもりか？」

そう言つて肩を掴むのはイチジ。振り向いて周りを見ると他の兄弟も臨戦態勢だ。一方でレイジュはもうしないそうで、侍女に紅茶入れてもらつてる。

お外で紅茶を堪能ですか、土煙浴びても知りませんよ……。いや、出来ないけどね。そんな酷いこと俺には出来ない……!!

1秒でも早くコイツらをのして、俺も紅茶を飲む。俺はそのためだけに3対1に望んだ。

「「覚えとけよ！」」

三兄弟がそう言つて城に帰つていく。あの後結局全員が気絶するまでひたすら戦いが続けられた。最終的にはこれ以上は危険との事で、ジェルマの兵士達が連れ帰つた。

「お疲れ様、貴方もいる？」

「頂きます……！」

だが、そんなことはどうでも良い。俺はレイジュと紅茶タイムを楽しむんだ。誰にも邪魔させない……!!

暫く軽く談笑していると、彼女は僅かに周囲を見渡し真剣な顔で聞いてきた。

「貴方は彼らの事をどう思った？」

「……そうですね。怖いもの知らずと言いますか、感情が無いのかのように突っ込んできたって感じですかね。ああ、別に侮辱しているわけでは——」

「フフ、分かつてるわよ。それにしても強いわね。どうやってそこまで強くなつたの？」
「何度も死線を超えただけです。まあ、気持ちの持ち方で超えてきたんですけれども」
「そうなの？——じゃあ貴方は『感情』についてどう思う？」

「感情……そうですね、人間を人間にするもの……ですかね。レイジュさんはどう思うの
で？」

「私もそうだと思うわ。人の気持ちに分からないのは、恐ろしい事だから……ねえ、もし良かったら私の部屋で少しお話ししない？もちろん、素の貴方で」

そう言つて席を立つレイジュ。どうやら気に入られたようだ。しかし、素で話そうと言われると困るな。だつて顔のニヤケが止まらない。

「それじゃあ、お邪魔します」

だが“断る”などという選択肢は存在しない。女の子の誘いを断るなど、あつてはならないのだ！というわけで俺はホイホイと着いて言った。

「少し昔話をしようと思つたの」

「昔話？ ヴィンスモークの？」

「そんなところね。——昔一人だけとても弱い人がいたの。私はその人を助けてあげたかつた。だけど助ければ一緒にいじめられる事も分かつていた。父には逆らえない体を持つていたから、サンジを助ける事が出来なかつた。何時もそう言い訳するの。貴方はそんな私の事、どう思う？」

これ絶対サンジの事だよな。まあ、本心で語るのが良さそうだな。

「結論から言えば、何も悪くないと思うよ？ 貴方は助けたいと思つた。出来なかつたのは勇気がなかつただけで、罪悪感を感じるちゃんとした“人間”だつて事だ。つまり貴方は感情を持つてるといふこと。それで助けられなかつた……それって何かしたつて

ことでは？」

「……そうね。罪滅ぼしじゃないけど、彼を少しでも助けてあげたいと思って行動はしたわ。上手く行ったのかは分からないけれど」

「きつと上手くいつてるよ。助けられなくて苦悩した貴方が、それでも何とかしようとして起こした行動だ。俺が言うのは……アレだけど……大丈夫、君は頑張った」

「そうかしら……そうだと思っておくわ♡」

それから俺達は俺個人の視点からだけど、いい感じの仲になれたと思う。そして何より「アーン」ってして貰えた。もう俺死んでも良い。

俺が幸せを噛みしめているこの時、俺は知らなかった。まさかここに俺の人生をいい意味でも悪い意味でも、振り回す存在がいた事を。

船が出港して数日。ジェルマの人は基本的にはカタツムリで移動しているが、レイジュだけは何故か一緒に乗っていた。その容姿やスタイルに皆デレデレである。かく言う俺もデレデレしっぱなしである。

だがしかし。俺がその隣に常にいるのである。俺が退くわけなからう。彼女が今後誰と結ばれるか、どんな人生を辿るかは分からない。だけど、今ここで一緒にいられる。その事を俺が意地でも体感してやる。

ああ……いい匂い……。

俺がレイジユとイチヤ着いてるとたった数日で目的地である、レッドポードに到着した。俺はガープの後ろをボガードさんと一緒に歩いている。

流石は英雄。すごい人だからである。さて、俺の任務はここまで。後は帰る時だけだ。のんびり待つてるとしま——

「あ！アイト見ーっけ！」

「ビビ様！そのようにはしゃいでは……！」

——何時になったら俺にのんびり出来る日は訪れるのだろうか。

じゆうろくわ

俺は仕事終わって休憩——！と思つてたらビビ様達アラバスタの方々と遭遇しました。その後2カ国の王族達は談笑していき、護衛の人達はそれに付き従つていきましたとき。

俺？俺は可愛い少女とその他複数と遊んでたよ。だつてビビとレイジュが怖いものだから、直ぐにその場から逃げました。そして何故かビビから恐怖を感じたんだもの（小心）

そんなわけで俺は“2人”で近くの無人島にて“謎の人達”と遊んだんですよ。終わつて戻つたら、長引かなかつたのかそれとも普通なのか、初めてだから分かんないが、会議は終わつたらしく皆さん降り始めていた。怪我がバレなかつたのは幸いだ。

その間ダラけたかつた俺氏だが、俺は俺で“遊び”という名の戦闘をしていた。護衛対象が全員上がつていくのを見送つて（逃げながら見て）、路地の店に入ろうとした時。怪しげな会話をする2人組に会つたのだ。

だから本当は2人が怖くて逃げたのではない。さっきのは嘘だ。すまんな。………いや、信じてよ。

そういうえば、港に着く直前にアイン達の支部で騒動が起こったらしい。なんでも真夜中に黒ずくめの変人達が来たとか。子供達は遊びに来てなかったたので、冷静に対処できた。この事だが……CPだよなあ。割とあっさり倒したそうだが、自殺した為情報が得られなかったとか。

謎だなあ……後で上の人に聞いてこよつと。

脱線した気もするが、あの2人とは「会ってしまった」の方が正しい表現かもしれない。

「——俺達は入んなくて良いのか？」

「うん、今回の会議は各国の私達に対する印象を確認するためだから、少数でいいの。もし戦闘が起きるなら参加するけど、そうなたら私達は逃がす為の攪乱がメインだよ」

人気の無い場所で帽子を目深く被り、背中合わせに会話をしている2人。この時点で十分怪しい。だが、何より決定的なのはその声と原作で付けていたゴーグル。武器や活動は見当たらないが、見つけ次第現行犯逮捕が許可されている組織。

革命軍戦闘員・サボ

「じゃあ何時でも逃げられるようにしなきゃな」

革命軍戦闘員・コアラ

「そうだね。特にサボ君はね」

「具体的にはどう逃げるんだい？サボ君」

「この飯を食い終わってから考える！」

「お金は自分で……!?!」

平然を装ってサボの後ろ、コアラの正面から話しかけると、いち早く海兵の格好をした俺に気付いたコアラが、椅子を投げつけて逃げ出す。

「逃げるよサボ君！」

「ちよつ！まだ…モグ……！食い終わって……モグ……！」

「いいよいいよ。落ち着いて食べなサボ君。待つてやるから」

「ホン「捕まりたいの!?!」——ぐべえ!?!」

別に海兵の格好をしてるだけで、君達が革命軍だとか俺は聞いてないんだが？てつきり一般人として接してくるかと思っただけどなあ……。平和に話したかった……。

俺がそう思いながら2人を追いかけると、2人とも板？船？に乗って高速で水上を移動していた。よく見ると下に誰かがいるのが分かる。多分ハックだろうな。

通報して包囲してもいいが彼らは大事な原作のキャラ達。下手に捕まえてしまうと、後々面倒なことになると思う。そうなるとここは仲間には伝えず、見失ったって事にしよう。別に俺とか海軍の立場が悪くなるわけじゃないし、むしろ天竜人を殺してくれる

と助かるんだけど。

決してサボりたいわけではない（重要）

そして逃した代わりに殺つちやつてください。これぞギブ&テイク。

「…お前、俺の管轄でなにしてんだ？」

見逃そう、そうしようって考えてた時に話しかけてきたのは、何時ぞやのヘビースモーカー。魔の悪いことに双眼鏡なんかかけてやつて来た。…それで海を見るんじゃねえぞ？

「あ？何言つてやがる……。双眼鏡は遠くを見る為のものだろうが」

そうだね。そうだと俺も思うよ。そこで陸地の奥をよく見ようか？海なんて見た所で何も無いし。ポンドラ？とか見てみようぜ…っていうか、「俺の管轄」って何？

「よく分かんねえが…お前らが護衛役を担ったように、俺はこの島のこの区画を任されてんだよ。面倒なことにな」

ホントに面倒なことになったな。まあ、気付かれるようなこと「なんだありや？

…こんな所でサーフボードをする奴がいるか？そもそもこの時期に来るつつう事は——怪しいな。お前さてはアレを追っかけてきたな？んでもって、俺に海を見るん

じゃないって事は…追い立てるだけ追い立てて、自分だけ楽しようってことか——
狡いことしてんじゃねえよ。俺も混ぜろ」

とりま手を貸してくれるのか？一緒にサボってくれるのか？サボる事に手を貸してくれるって事だよな？それならいいや。海で遊ぶとしましよや。

というわけでスモーカーの愛車（名前は忘れた）で水上走ってます。

「確かレッドポードの周りを不規則だが、囲うように支部と小島があるんだったな。そもそもすぐ近くに本部があつて軍艦も巡回してる。………となると逃げてつたヤツらは小島に行くのが普通だ。まさかずつと変な板で逃げるはずがねえ。警備の隙をいつて脱出するにはちようどいいしな」

そう言いながらどんどん速度を上げていくスモーカー。これの最速は知らないが、多分時速200km近く出てると思う。目を開けるの辛いもん。そんなこんなで2人が乗ってた板を発見。

サボ達はスモーカーの予想通り人気のない無人島に上陸したつぽい。あそこは外から見えにくい地形をして、簡単に言えば富士山の頂上みたいな感じ。だから1度中に入ると外からはなかなか見えない。

因みに入るのは楽だったりする。島の一部がアーチ状になってるから、操舵不良にならなくてもなきや普通に入れる。というわけでスモーカーと共に休憩場所に着きました。

「……森林と岩場のジャングルか。左が森のジャングルで、右が岩場のジャングル……何があつたらこんな所になるんだ？」

「さあ？左は川が流れてるけど、右は流れてない。そこでここは夏島だから左は森林に成長して、右は風化しまくったんじゃないか？」

「だからと言って巨大な岩だらけになるか？」

「それは知らん。で？どつちがどつちに——!？」

俺がジャンケンで行先を決めようとしたところ、革命軍の人達が襲いかかって来ました。見た所俺と同等なのが2人で、スモーカーと張り合える奴らも2人つてところかな？

流れるような連携プレイで俺とスモーカーは見事に分断されてしまった。ていうか俺の相手サボとコアラなんですけど。スモーカーの相手はハックみたいな魚人だし。うわあーこれ長引きそー。俺の有給（サボリ）があ…………

「行くよサボ君！」

「おう！」

戦う気はないし、逃げてくれればお互いWin-Winで収まるつてのに、挑んで来る2人組。サボが俺とタイマンを貼りつつ、時折コアラが“正拳”を放って間断なく攻め込まれる。俺に戦闘の意思があれば別だが、早く逃げて欲しいから、何処かでモロに食らうつもりだ。

勿論、痛いのは好きじゃないから、鉄塊をこっさりしといてそこまでダメージを負う事無く終わらせるのが最善だ。早く全力で来てくれないかなあ……。早くしないとスモーカー来ちゃうかもよ？

「くっそ！真面目に戦え！」

「まんまと時間稼ぎされてるわね……。ッ！」

なんか向こうさん苛立つてるんですが？アレ？俺なんか悪いことしたかな？今後の為に出来れば仲良しこよしとまではいかなくとも、そこそこの仲になりたいんだが。

どうすりや仲良くなれるんだろうか？一方的にやられるのは意味無いし、圧倒しても（そもそも互角）意味無いし、サボもコアラムルフイと違って、ライバルとか求めてなさそうだしなあ……。とりあえず逃がすか？

「一気に決めるぞ……！——竜の鉤爪ッ!!」

「覚悟してよね！——三千枚瓦……！」

俺が手を抜いてると思っただけ等は前後から同時に構えてサボから放ってきた。両方とも下手すれば下手するヤツだ。とはいえ、俺にとっては願ってもないチャンス。確実に気絶をするフリを仕様じゃないか。

まずはサボが俺の顔を独特なやり方で驚掴みして、俺の顔を砕こうとしてくる。

まあ？鉄塊と覇気を合わせれば？なんてこと……。イデデデデッ!!?!?

「……………!!」

「流石にこれは効いたか!!——決めろコアラ!!」

予想以上の激痛に俺がジタバタすると、サボは得意げに俺の事をコアラに投げつけた。眉毛の横にある凹む所、所謂頭グリグリで大活躍しなざるツボにもろに食らっちゃまったせいで、俺は避けることも急所を外させることも出来ず、されるがままに痛烈な一撃を貰ってしまった。

「——正拳ツ!!」

「……………!!」

待機中の水分から体内の水分へと伝わる衝撃を前に、俺の意識は俺の願いとは多少……かなり異なりながら刈り取られた。舐め切つてすみませんでした。

「……………!!」

眼下で行われている戦いをステューシーは冷ややかに見ていた。たまたま近くの軍艦に乗って「もしも」に備えていたが、それが功を奏したようだ。彼らが単独行動をしていて本当に助かると思いつつ、憤りを募らせていた。

その理由は最近はやたらと上からの扱いが荒い事だ。この前やつとのことで、デザイヤ島の元締めに成った時に呼び戻されたかと思えば、早くアイトを落とせと言う。

私は言ったはずだ。時間をかけなければ難しいと。確実に落とすにはどうしたって

時間がかかると。だと言うのに、彼が昇格する度に上は騒ぐ。私の他にも色々と手を回しているそうだが、目立ったことは特に起こっていない。

それはそうだ。私でも時間がかかると結論づける存在を、どうやって小細工程度のことしか出来ない彼らで落とせる？勘違いも甚だしい。拳句の果てに私を責める。

海賊やら天竜人を利用して彼に色々するのは構わないが、その全ての尻拭いを何故私がいなくてはならない？シャボンディ諸島で彼の実力をすっかり把握したと言っておきながら、彼の部下の女の子達にすら歯が立たないなんて。

私を手ぬるい事をしたからだとか、さっさと殺すべきだとか、上はいつも目に見えて大きな効果をもたらす物を可愛がる。例えばそれが非効率的で、無謀な事だとしても。

こんなに面倒になるのならさっさと息の根を止める方が何かといいだろう。折角彼らは人気のない島で戦っているんだ。鬱憤晴らしの為に全員皆殺しにしてやろう♡
運が良くて死ななければ、機械の仲間入りをさせてあげよう♡

闇の正義の名の下に……！

あとストレス発散の為に……!!

さあ、惨殺の始まりだ。

—————

特に手柄を立てるつもりは無かった。俺は俺なりの理由で今の地位に立ってるだけ

で、実力はアイトと同様に将校に匹敵する。自分で言うのは、アレだが、俺とアイトは実践訓練で何度も将校を倒してきた。その事もあって、アイトは早く地位を上げたいそうだが。

俺と違ってアイトはまだ海軍というこの組織に期待してる節がある。別に期待するのは自由だ。アイトの事を気に入ってるやつはかなり多いから、俺がとやかくいうつもりはねえ。ただ、いざと言うときは普段の借りを返す。

そこまでやる気はないが、今は奴らをを倒すとするか。

「っし!!」

思考しながら森林に入った俺の死角から、さつき襲いかかって来た奴がまた仕掛けて来た。さつきはとりあえず避けたが、見たところ覇気は使えないようだ。なら、捕らえるのに時間はいらねえ。

「ホワイト・アウト ツ!!」

腕を煙に変化させて広範囲に展開し、対象を一挙に捕縛する。俺の技の中で1番の初見殺しだ。煙に変えたままものを掴み、何十人でもまとめて捕らえるこの技で始末出来なかった事は無い。

煙に相手側の物理攻撃はほとんど意味を成さない上に、自力での脱出は極めて困難。いずれローグタウンで全ての海賊を捕えて検挙率を100%にしてみてもんだな。

「うぐつ!?なんだこれは……!!」

さて、まずは1人。相棒の十手で気絶させ、後1人を捕まえにいくか。この近くには川があるが、全身浸からない限り力が抜けることはねえ。そこだけ気をつけて敵をさが
s 「三千枚瓦正拳ツ!!」

ボフンツという音とともに俺の体を吹き飛ばす衝撃波……。今のは魚人空手か……。構造は知らねえが、捕らえるのに時間がかかりそうだな。部下を連れて来るべきだったか
……?

いや、アイツらを連れて来てもイタズラに危険を呼ぶだけだ。ましてや相手はかなり強いはず。逃走すると思うが隊長として部下の命を最優先に置いて、連れてくる選択肢はやはりない。

「……自然系、か。厄介な者に追われたものだ。見逃してくれると有難いが?」

「……ふんつ!お前が俺らの敵である以上、そうはいかねえな……!!」

その言葉を開始の合図として、森林での戦闘が始まった。

(そーういや……コイツら何もんだ?革命軍とかか?)

怪しいと思っただけで、どこのどいつかは聞いてなかったな……。捕まえて吐き出させればいいのか。俺はそう考えながら自分の腕を打ち出した。

じゅうななわ

岩場での戦いが一区切りつき、どこか気の抜けた雰囲気でもコアラに話しかけようとするサボ。逃げ切るまでが任務とはいえ、会議の時間からしても自分らが暴れてるなら向こうは逃げやすいはず。

敵も倒したし、緊張の糸が緩んだのはごく自然な事だった。ところが、このままハックと合流しようとしていた矢先にサボの体を正体不明の何かが貫いた。

「……………!?サボ君!」

なんの前触れもなく膝から崩れ落ちた相棒に、コアラは驚きを隠せずに駆け寄った。サボの意識を刈り取った者の視線に入ったとも気付かずに。

「…………グッ……………一体何処から…………!!!」

腰を折ってサボに駆け寄ったこともあって、コアラは肩を撃ち抜かれただけで済んだ。しかし、その威力は華奢なコアラにとっては大きなモノで、動きを止めるには十分だった。

「……………!!!ウツ!!!」

小さな悲鳴を上げて蹴り飛ばされたコアラ。並の人ならば今ので背骨が折れてる一

撃ではあつたが、意識を保つ事が出来た。

ぶつかり砕かれた岩から身を捻つて乗り出すと、その目に映つたのは、大事な相棒が命を刈り取られる現場だつた。

「待つて!!」

苦楽を共にした相棒が殺られる事に我慢は当然出来ず、悲痛な叫び声を上げながら駆け出した。いざと言う時は片方を見捨てても、生き延びるように言われている。それでも、とてもそんな事は出来なかつた。

持てる力の全てを使ってコアラは駆けに駆けた。間に合わない、助からない、等という「不可能」という言葉を信じず、我武者羅に転んでも突き進む。しかし、

——コアラが届く事はなかつた——

「——させねえよ」

「……あら、もう意識が戻つたのかしら？ちよつと甘く見てたわ」

「そいつあー悲しいな。これでも強くなつたと思つてたんだが——何にせよ、大事な奴を黙つて殺させる分けないだろ」

ステューシーの牙を止めたのは、先程コアラとサボによつて気絶させられたアイト

だった。普段の雰囲気とは異なり、随分と好戦的な目をしている。

彼もまたかなりギリギリだったのか、さつきまでの戦いで使っていた変わった棒状のは持つていない。その光景を見たコアラは相棒が助かった安堵と、さつきまで敵だったアイトに助けられた事による困惑の最中だった。

(い、今……私にとって大事な奴を殺させないって言った……?!?)

息切れて酸素が足りない脳に、降りかかる強力な衝撃。つい先程まで殺しあつていた(コアラ side)にも関わらず、彼にとつては倒すべき敵を守った。利用する為なのかどうかは分からない。ただ、助けられた事実は残る。

そして同時にある事にも気付く。それはアイトの本当の実力だ。さつきまでと異なり、どこか強く見える。今の彼をサボと一緒に勝てるかどうかといわれると、分からない。そして何やら手先が青色に変化している気もする。

「ふふふっ紳士ね。——ところで私がどこの人間か分かるかしら?」

「ああ、雰囲気からしてCPだろ? だからといって、仲間じゃあない。お前の上司は世界政府で、俺の上司は元帥だ」

「……そんな事が通じるとでも?」

「別組織だつて事だよ。だから俺が敵対しても問題にならない……はずだ」

ステューシーとアイトが舌戦? を繰り返す中、コアラは若干回復した体力と思考力

で今すべきことを考える。

(なんで助けてくれたのかは分からないけど、味方してくれる前提で動いて痛い思いをしないようにしなきゃ)

今コアラ達、革命軍が優先すべきことは撤退する事。日の傾き方から会議が終了に近づいてることを確認し、ここで注意を引きつつ逃げる。理想的にはこれが最良だが、実力差から見て出来るとは思えない為これは却下だ。

そこでコアラは突発的に騒ぎを起こし撤退する事に決めた。長々と注意を引くのは難しいが、今ここで注意を引くだけ引いて直ぐに撤退すれば多少なりとも分散させられる。

思い立ったら吉日とばかりにコアラは行動を開始しようとした、が——出来なかった。

「ああ、貴女は死になさい」

不利な状況を打開すべく、コアラは走り抜けながらサボを回収しようとした。注意を引く時に人質のようになるばかりか、ノビてもらっては困る。そう思い行動したが、ステューシーの鋭い指が迫る。

「——え」

その指から放たれる明確な殺意は、コアラの体を硬直させ自由を奪う。人間は恐怖を感じた時、どうしたって体が強ばるものだ。それも実際に体験した後だと、その恐怖は数段上がる。

凶悪で、残忍な殺意を放つステューシーの指。突然向けられた殺人の凶器に「逃亡」という目標が呆気なく散る。ハックも気がかりなのにここで殺られるのか、とコアラは本気で死を覚悟した。

「させねえっての」

その死を覚悟したコアラを救ったのはアイトだった。舌戦での僅かな隙を突かれたアイトだったが、上手く二人の間に入ることに成功する。庇うようにコアラを抱きしめ、屈みながらステューシーの指を手の甲で受け流した。

受け流された指から飛んだ“弾丸”は、後方にあつた巨石を地平線の彼方まで貫いていく。その光景に自分の危機感の間違ってなかったと思うアイトと後ろで響く破壊音により身を強ばらせるコアラ。

「……コイツに死なれちゃあ困るんだよ。見逃してくれないか？」

「——アハハハ……さつきまで戦つてた貴方が言うの？何？情でも湧いたのかしら？」

「……さあね。ただ、（キャラとして）好きな奴を殺させると思うか？」

「……へえ……予想外だわ」

その言葉と共に襲いかかるステューシー。倒すのに時間がかかっている事もあり、その言葉からは苛立ちが伝わってくる。

対するアイトはコアラを抱えたままだ。コアラが先程から身動きを一切しない事もあつて何とかなっているが、本人はめちやくちや焦っていた。

何せ――

――女子をずっと抱きしめているからだ――

アイン達のように勝手知ったる仲ならともかく。原作愛読者として好きなキャラを抱き抱える、それも交流のなかったキャラなど、緊張しないわけが無い。だが、ステューシーから放たれている殺気のお陰で体が無意識で反応する。その為、アイトは何とかなっていた。

一方、先程から身動きせずに抱きしめられているコアラは、恐怖・困惑に晒される事で、思考停止状態に限りなく陥っていた。

(う、そ……嘘でしょ!?!、ここ、こここ、コイツが私の事が、す、すすすす、す、す、好きつて!?!?)

前言撤回。コアラの頭はピンク色で、かつ、超高速で思考していた。過去が壮絶なコアラはその分恋愛に疎い。その容姿から革命軍内でも人気だが、直接告白される事も

告白する事も1度たりとなかった。

コアラは知らないが、イワンコフら恐ろしい上司が存在するからである。決して顔面が怖いのではない。断じて違う。

「コアラちゃんに手を出す気か？お？殺んのか？ああ『う』と、裏で脅s……教育を施されているからである。愛されてるだけなのだ。いわば革命軍版アイトである。

そうしてしばし抱えられてたわけだが、ある場所に向かって優しく投げられる。日頃の訓練のお陰で咄嗟に着地する事に成功すると、少し遅れてサボも飛んできた。

つまり、アイトが逃がすために2人を（コアラ↓優しく・サボ↓足でホイツ）としたのだ。しかし、その瞬間にアイトもまたステューシーに蹴り飛ばされて同じとこにやって来た。

「グベツ……！」

「だ、大丈夫？」

何処その泥棒のような格好で降ってきたアイト。間抜けな声を出したものの、直ぐに立ち上がりステューシーを見つめる。

アイトの目に映るのは焦り、恐怖、喜び、痛みe t c……。だが、何よりもステューシーから目を離さないようにして、隣にいるコアラを庇うように前に出る。

（サボ？頑丈だろうし、多分寝たフリだろ………死んでないよね？）

いつまで経つても起きないサボの事を心配しながら。後のことだが、サボは気絶してそのまま熟睡していたそう。戦闘中に寝るとは不謹慎なやつである。

「――へあ？」

「……………お、お礼は言わないからねっ！行くよサボ君！」

…戦闘中にトキメクとは不謹慎なやつである。何を思ったか、コアラはアイトの頬にキスをした。それがなんでかは分からない。命の恩人だからか、告白の返事なのか……。

頬を赤く染めながら、突然の告白に戸惑いながら、不安そうに振り向きながら、目が合う度に逸らしながら、段差に躓きながら、サボを引きずりながら、コアラは川に飛び込んでハツクの元に進んで行った。

—————

コアラ達が去って行くのを冷ややかに見つめるステューシー。今回は特に彼らに対して興味はない。今彼女が成すべき目的はただ一つ。

アイトの抹殺

ただそれだけ。

目の前の男を見ながら、ステューシーは己の中にふつつつと込み上げる感情に身を浸らせていく。

ここままで任務関連で感情を動かされるような事は一切なかった。いつもただ淡々と

殺してきた。

そう、普段なら有り得なかった。

なんせ今まで数え切れないほどの人を殺してきた。

その度に実力を上げてきた。

任務の為に「完璧」に生きてきた。

攻撃を外すことなんてなかった。

いつも変わらず淡々とこなしてきた。

それなのに

なぜ

今回

1度だけでなく何度外した……？

馬鹿な

有り得ない

あるはずが無い

いつだ？

いつから狂った!?

……アイトだ。アイツの後から、いや……アイツと接触する時だ!!

そこまで高速で思考しながら、アイトに牙を向ける。鉄塊と覇気を重ねが消してもなお十分なダメージを与える一突き。

それを時折現れる青い何かが阻止する。その不可解な存在のせいでよりステューシーにはイライラが募る。

「——だから、殺すのよ。彼女らは別にいいわ。ここに来たのは………貴方を殺す為だから……!!」

妖艶な見た目とスタイルは人を惑わす悪魔か? いや違う。白い姿は天使か? 正義の使者か? それとも身の潔白を表すものか? ——どちらも違う。

彼女は何百・何千・何万と消してきた殺戮の存在。裏社会においても謎に包まれている「ステューシー」

この世界において、彼女こそが殺戮の天使である。

「ここで貴方を殺せば、もう一つだけに専念出来る。——だから、死んでちょうだい

♡」

綺麗な薔薇には刺がある。その諺を体現するどころか、概念ごと吹っ飛ばしてそんな実力の彼女。その冷徹な痛撃が、アイトに迫る。

「……くっ！」

「ホラホラ！ 頑張つて粘りなさい？」

軽く吹き飛ばされ、着地しようとしたタイミングを狙つて嵐脚を放つたステューシー。これはアイトががちり防ぐ。その腕をよく見ると青く、鱗のような模様になっている。

長く鋭いステューシーの手足を流しながら、アイトはここから離れようと必死に回避する。時に反撃を織り交ぜながら問合ひを取る。もつとも、とることなど一切出来ないが。

「凌げるかしら？——嵐脚・凱鳥（ガイチョウ）」

「……嵐脚・爆雷（はくらい）！」

当たれば鉄をいとも容易く切り裂く巨大な斬撃。それを迎え撃つ形でアイトはオリジナルの嵐脚を放つた。

原作にて「カク」が使う物と同音異義語の技。これはただ全力で蹴り放つただけの技だが、仕込んで置いた「ダイアル」の力が加わり威力は数段高くなっていた。

それでも、CPの頂点に所属するステューシーの一撃を何とか防げる程度。

戦いが進むにつれてますます追い詰められるアイト。猛獣の牙のような平手を顔にモロでくらい、5つの切り傷が生まれる。

怯んだその隙を逃すこと無く、ステューシーの膝蹴りがアイトの腹を蹴りつける。そのままかち上げをくらい、ふらついた所を地面に叩き付けられる。

荒ぶるステューシーの一撃は乱雑だが、その分威力が増している。手加減の必要が無いことも影響してか、アイトはもう既に瀕死に近い。

「……こんなところ、かしらね」

実力差をまざまざと見せつけ、何処か達成感よりも呆気なさに包まれるステューシー。心を虚無感のような不思議なものにも覆われるが、特に気にせず命を奪おうとした。

「——さようなら」

その時

巨大な水柱が乱立し、島全体に降り注いだ。

—————

川に飛び込み、ここまで来るのに使った潜水艇に乗り込むコアラ&サボ。アイトを犠牲にして逃げてきたかのように思える状態を、思い出してはグルグルと思考する。

逃げて良かったのか、共闘した方が良かったのでは、別にアイトに一目惚れしたとかでは無い。

しかし、初めて自分に対して言われた「恋愛」ジャンルの言葉。戻るべきかと反芻する。だけど、彼は海兵。

きつと私を混乱させるためのものだと何とか納得させようとする。

何せ今はそのような事をしてる場合ではなく、急がなくてはならない。もう既に島の周囲を軍艦に囲まれてるかもしれない。

下手したらもう上陸してはぐれたハックらを捕らえているかもしれない。だから回収して、さっさと脱出する。

雑念を振り払って全速力で進む革命軍の潜水艇。さてハックは何処だと、辺りを見渡した瞬間、船は海流に巻き込まれ高速回転しながら、

逆さまに人の上に叩きつけられた。

—————

アイトがコアラ達を逃がそうとした時、ハックとスモーカーは決め手を欠いた戦いをしていた。

スモーカーが能力を使えば、魚人空手で霧散され、ハックが魚人空手を放てば、能力で無効化される。

スモーカーは相棒の十手が有効打となるが、当たったところで能力者では無いハックには、大したダメージにはならない。

タラレバの話だが、ハックが覇気・武装色を身につけていれば、スモーカーの実力がハックを上回っていれば、変わっていたことだろう。

しかし、実際はなんの盛り上がりもない静かで地味な戦い。一体いつまでこの戦いが続くのかと思ったその時、空に棒状で無数の水柱が島中に影を作っていた。

「なんだありや……」

「まさか、コアラが？」

思わず戦闘を止めてしまった両者の頭上に現れた巨大な水柱。先端は尖っており、う

ねうねと揺れている。

世界のどこかの王冠上になる水柱があると聞いたものがいたら、そこを思い出したかもしれない。

しかし、その人も気になることだろう。それがまるで、先端から降つてきそうに見える事に。

そして

その予想は

最悪の形で当たる

「……………!!!」

タイミングを合わせたかのように、当時に降り注ぐ巨大な水柱。ハックが巨人だからと影響を受けない訳では無いし、スモーカーはもつと影響を受けていた。

何せ、スモーカーの頭上には、ハックの見覚えのある「船」がクリティカル・ヒットをかましたからである。

水柱だけでも厄介だと言うのに、予期しない痛烈な一撃。仏頂面には海軍内で定評のある、白獵のスモーカーでも、その場に蹲った。

「いたたたっ……!!」

「な、何が起こったんだ?」

「!!コアラ、サボ!無事だったか!」

潜水艇から転がるように出てきたコアラとサボを、ハックが喜びと共に迎える。

「ハック……!良かった!——てっサボ君起きたの!?!」

「何!?!まさか戦闘中に寝てたのか!?!」

「おう。気持ちよく寝てたのに、頭を打たれて起きたんだよ」

「……………くっ!」

「話してる時間はないぞ!」

コアラがハックと再会できたことに喜び、サボが今まで寝てたことにハックが驚き、スモーカーが再起動しようとしたのを感じて逃走を図る。

気づけば、革命軍の舞台の中で唯一残っていたのが、自分達だと言うことに驚きながら、コアラ達は無事に脱出に成功する。

「また、会えると……良いな」

あどけない恋心を乗せながら。

——
多くの精銳が王族の護衛に付いている中、薄暗い部屋の中でモモニキとオニグモは、同僚や恩師等、親しい者を集めて密談をしていた。

そこにいる面子は、いずれもアイトと深い交流があるもの達である。そうそうたる面々で、少佐から「大将」までもの人が揃っている。

「あららら……なーんでこんな辛気臭いところでやるのよ」

アイマスクをかけながら気だるそうに口を動かす長身の男。

「そう言つてやるなクザン。アイトの為だからな——そうじやなきや俺も来ない」
鍵を使うことで巨大な武器を外しているゴリアテ。

「……それにしても、これだけ集まっても問題なかったの？ヒナ心配」

実は結構アイトを弟として見ているイケメン（女性）

「大丈夫ですよ、ヒナさん。何のために大将青雉様に来てもらつてると思つてるんですか」

この場をとりしきる、唯一にして絶対に譲らないと断言しているアイトの「幼馴染」

その他にも合計で12名もの本部海兵が集結していた。彼らの共通点は1つ。アイトを気に入つてるところ。ただそれだけ。

「俺は戦線に出る訳だが、これでもかと派手にやるつもりだ。そうすればアイトへの注

目が減るだろうしな……オニグモ、お前もやれ」

「……………はいっ?!?!いやいやいや…それはキツイですけど、ゼファアの旦那」
「なんだその気持ち悪い話し方は」

派手に暴れる。つまり、海賊を片っ端から捕らえる……だけでは無い。目的は世界のトップの話題、関心をアイトでは無くすこと。

優先順位こそ変えてしまえば、それさえ出来れば、今よりも守りやすくなる。その為に復帰するゴリアテ。

その心構えにこの場の寝てる人を覗いて、全員が気を新たに引き締め直す。

当のゼファアはグラサン越しても分かるほどに、困惑した表情をオニグモにしていた。だが、アイトの事を好きないように、モモンガもまた周りから好かれている。

「——なら俺がして、俺がやろう……オニグモは俺に甘いな」

モモンガが代わりにやろうとしたら、当然のようにオニグモがやると言う。オニグモ曰く、普段の弄りは友情の意趣返しである。

なんなら、オニグモは過保護を通り越して、モモンガの保護者に完全になつていたりする。気になった同僚が海軍の管理部に行くと、しっかりとそう書かれていたそうなの。

「モモンガがそんな事したら…海軍全体に響くわよ? ヒナ警告」

ヒナが忠告しこの話は終わりとなった。後は会員ナンバー0のアインが今後の方針

を「気が済むまで」述べて終わりになる。

「じゃあお2人にはその方向でお願いします。他の皆さんには、仲間を増やす事、アイトを守る事、アイトを鍛える事、危険な場所に送り込む事、2つ名をもつとしよぼくする事、私に甘える事、巨乳よりも貧乳派にする事 e t c ……………」

「グゴーーーーー……………」

「……………帰るか……………」

こうして第3回「アイトをマモルゾー会軍」がいつも通り終了した。

……………

「ゲホツゴホツ……………」一体なんだったのかしら」

空から無数の水柱が降ってきた時、ステューシーは咄嗟に回避行動に出た。彼女はこの現象を自然によるものと考えた。

それもそのはずとてもでは無いが、目の前で起こっていることをそうとしか説明がつかなかった。

しかし、その判断が間違っていた事にすぐ気がついた。

アイトがいなくなっていたのである。

「間に合ってよかった」

空を人知れず飛ぶ女性。両手を羽のようにして、滑空しながら静かに治療しながら飛んでいた。

じゆうはち

目を覚ましたその場所は小高い山だった。

微かに香る医薬品の匂いと、海水の独特な香り。

柔らかく心地よい物を頭の下に感じながらアイトは寝返りを打つ。

「——あんっ!」

今まで嗅いでいた香りとは異なる、変わった独特な匂い。ずっと嗅いでいたくなるようなそんな香り。

願わくばこのままここで起きたくないなあ、と思いながらアイトは目を開けた。

「……暗い?」

パチリと開けたそこに映ったのは暗闇。不思議なシワの模様が微かに見えている。

目を重力に従って下ろしていくと、そこに移るのはピンクというよりは、白が強めのナニカ。

ボーツとしているアイトは、取り敢えず匂いを堪能しながら抱きしめる。

が、他ならぬ「膝枕」をしているものによって止められた。

「今はまだ——だ・め・よ?」

あ、ありのまま起こったことを話すぜ!!

サボとコアラに会う↓

スモーカーとストーカー↓

V S 2人組↓

コアラにキスされる↓

ステューシーにボコられる↓

モネの膝枕(今ここ)

謎すぎるだろうが。

俺が混乱しながら立ち上がろうとすると、立ちくらみでモネにもたれ掛かる。

「ムリしちゃダメよ? かなり危なかったんだから……今はもう殆ど治ってる見たいだけ
ど」

若干混乱気味の俺に優しく教えてくれるモネ先生。多分治療をしてくれたんだろう
が、その手当が良かったってことだよ。

うん。

イヤホント。

に、睨まないでくれると……

マツマジで隠し事とかないからね!?

「顔に付いた引つかき傷は残ったままだけど、それ以外の怪我は完治——明らかに人外よ?」

そりやまあそうだけでも。でも、俺もなんでか分からないんだよなあ……

というか、なんで此処にモネ先生がいらつしやるんで? あ、あと助けてくれてありがとう。

「私って見聞色の覇気が得意でしょう? そのせいかな、生命の危機は不思議と感知できるのよね」

そんな凄いいこと出来るんですかい……。とはいえ、助かった。モネ先生いなかったら俺確実に殺されてたしなあ。——って! ステューシーと会ったのか!?

ステューシーは俺のすぐ近くにいたはずだ。だから、モネがバッティングしてる可能性がある。

下手したらモネまで狙われる羽目に……。ん? そういえばなんで俺って狙われてるんだ?

天竜人に対して悪いことしたかなあ？心の中だけでしかしてないし、見えないところで悪態ついてるだけなのだが……

聞かれたのかな？いや、だとしたらもつと殺しに来てるはずだ。うーん、だとしたらステューシーの独断専行……とか？

——ダメだ。俺に頭脳労働は向かん。取り敢えず死ななければなんでも宜しっ！

「？貴方以外もいたのは気配で分かったけれど、水柱の回避でそれどころじゃなかったわ」

なるほど、つまり会ってないと。少なくとも戦ったりはしてないと。ならまあいいかな。

てか、水柱？の呼吸のあれか？なわけないか。魚人のハックとかがなんかしたのかな？

多分そうだよなあ？今度お礼言わなきゃな。

俺は空に見えないはずのハックを幻視して、心の中で無事と御礼を言う。次会った時は是非天竜人をやっっちゃってください（他力）

そんな事をしてしていると時間になった。世界会議の終了時刻である。

「そういや、スモーカーとか俺の武器どこ行つた？」

「同時刻、グランドライン後半の海」

——そこは、多くの船乗り……この世界においては「海賊達」が目指す世界の後半。多くの海賊たちがその航路に至るため、リヴァース・マウンテンで半数が沈み、そこを乗り越えて航路に入つてからも生き残れる保証もない。

なにせ、生き残つて半周するまでの間に、また半数が脱落しているのだから。

その上、中間地点である海底一万メートルの島、「魚人島」に辿り着ける者は3割程度しかない。

つまり、残りの7割は魚人島に辿り着くことすら出来ない。

そうした熾烈なサバイバルレースを乗り越え、ようやく辿り着くことが出来る海。

それこそが、「偉大なる航路グランドライン」の後半の海……「新世界」であつた。
「新世界」

過酷な環境と、選りすぐられた海賊がいるここ新世界は、政府や海軍の影響が薄い海でもあつた。

もつとも、世界政府加盟国やG-1支部は存在するので無法地帯という訳でもない。国

も海軍もそれ相応の実力を備えている。

しかし、海軍にとつて、海賊同士にとつても、この海いるもの達は一人一人が曲者ばかり。

そいつらを捕らえるのに、一体いくら的人员と費用がかかるのか。そうした事を考へ、実行するよりも、前半の海のものたちを刈り取る方が何かと都合が良い。

それ故に、新世界に根付く凶悪な海賊達が幅を利かせる“ここ”では、海軍はただの一勢力の1つとさえ思われている。

だからこそ海賊にとつては天国と思われるかもしれないが、実情は“四皇”というひと握りの怪物によつて地獄とされている。

四皇以外にも強大な力をもつ海賊はいる。しかし、そういうもの達は得てして四皇に挑み、そして衰退していく。

結果、本物の“楽園”……偉大なる航路グランドラインの“前半”の海に逃げ帰っていく。

冒険を求め、あるいは名声や力、富を求めてやってくる多くの新顔の海賊達。

意気揚々とやって来たのは彼らは皆、絶望の表情を携え、或いは決死の形相で逃げ惑う。

何故なら、それらのものは全て、新世界の大物海賊達が独占しており、何かを手に入

れるには切り崩して奪い取るしかないからだ。

年を追うごとに減っていく実力者と、増えていく新顔。

彼らがこの無限とも思えるループから、消えること無く生き残るには、四皇の傘下に入れてもらい、庇護下にしてもらう他ない。

たとえば、『ビッグ・ママ』。彼女は新世界でお菓子の国を統治し、続々と勢力を広げている。

たとえば、『白ひげ』。圧倒的な実力を保持し、世界最強とさえ、海賊王に最も近いとまで、謳われる船長。

彼の強さと考えに感銘した者達は、彼と盃を交わし、強い結束で結びつく。

彼らを始めとする新世界の覇権争いは激しく、新参者の参入を許さない。

そんな所に、1匹のコウモリがやって来た。

そのコウモリは文書を携帯しており、主に世界政府が活用している代物だ。

今回の使用者は異なるが、その内容もまた、奇妙奇天烈なものであった。

「——オヤジ、政府はなんと?」

「……まあ、あつて見りゃあ分かるだろう」

—————

「アーイートーさん!!」

そう叫びながら飛び込んでくるビビちゃん。……なんかものすんごく可愛いんですけど。

ギューって抱きついてくるビビちゃんに、雰囲気がどんどんホンワカしていく。

抱きしめてて思ったが、俺はロリコンじゃないよ？決して違うぞ？ポインちゃんねーが大好きなのだ。

——でもね。

俺もうロリコンでいいよ!!だって可愛いんだもん!!

アインのようなスレンダーも、モネのようなポヨヨンも、バカラのような男の夢も、ヒナ嬢のようなでできる上司も好きだよ？大好きさ!

対象にビビちゃんのような子も含めて良いだろう!?みーんな纏めて大好きなのだ!!!
誰か一人を選ぶなんて、そんな酷いこと出来るわけが無い。

俺の守備範囲に一切の下限なし!!

「何を考えてるのかしら……」

「まあ……良いんじゃないかしら」

俺がビビちゃんを抱っこしていると、冷ややかな視線を送ってくるクール・ボンツ
キュッボン×2

当然、レイジュとモネである。

モネはアイトがロリコンに目覚めた事に呆れ、レイジユはビビに起こったことを加味して、ビビを優しく撫でる。

「…なんか夫婦見たいね」

「何がそう見えるの（かね）？」

俺とレイジユでビビちゃんを可愛がっていると、怒りを交せて放ってきたコブラ王とモネ先生。

……………普通に恐怖である。

そのまま一緒に船に向かうことになったのだが、ビビちゃんが俺からまるで降りてくれない。

お陰でコアラ王とチクワのオッサンに、背中越しに殺気を放たれているんだが。

周りの衛兵達は微笑ましそうに見てるってのに、トップ2人がそれでどうするんですかい。

ビビちゃんと居てあげて欲しいと他ならぬレイジユに言われたので、名残惜しいが別れて歩いていると、モネが俺の踵を見て軽く驚いた。

「…このダイアルってアイトが使ってたわよね？」

「おうさ。モネが倒してくれた奴のを使わせて貰ってるんよ。かなり希少なやつだし、使うのはちょっと怖いけどな」

そう、俺がステューシーとの戦いで使っていたあのダイアル。モネが能力でもぎり取ったアレ。

壊れてなかったのか、問題なく扱えたので拝借させて貰った。ちゃんとお話はしに行きましたよ？

「お前の使わせてもらうな」

「……………」(凍死)

つてな感じで。大丈夫きつと聞いてたはず。

そんな感じで歩いてたら、なんか俺の事を終始振り回す煎餅が現れたんですが…。

ニコニコしながら馬鹿でかいリュックを……何個あるんだ？少なくとも5個はあるぞ？

「待つとつたぞアイト、モネ」

「ガープ中将、その大きな荷物は？」

「まあ待て待て、話は全員揃ってからじゃ——それとアラバスタ王国の方々、護衛として帰路は別の将校が同行させて貰うんじゃないか？」

そう言ってガープがらしからぬ言葉遣いをして接する。ちなみにジェルマの方々は青雫さんが同行してるとか。

……聞いてないんですけど。

俺とレイジユのランデヴーは!?折角仲良くなれたんやぞ!?

はい恨むー!恨むからなー!人の恋路の邪魔をするなら、馬?とかに蹴られてしまえ!!

そんな事を思ってたらビビちゃんとお別れの時間になりました。

じゃあねー!と、寂しそうに離れていくビビちゃんと、入れ替わりにやって来たのは、
我らが天使・アイン。

「ほかの女の子の匂い……?」

来るや否やいきなり身体検査をしてくるアイン。なんか原因不明の寒気とか、色々恐怖を感じるのだが、久しぶりに会ったからか、ちよつと抱きしめたくなってきた。

……何を言ってるんだ俺は。

「ガープくん、一体何をするのかしら?ヒナ質問」

かつカツカツと、規則正しいテンポでやって来たのはマイベストシスター・ヒナ嬢。

ヒナ嬢も話をされてないのか、ガープに対して訝しげな目を向けている。

今ここにいるのは俺とアイン・モネ・ヒナ嬢の4人。リュツクの数からしてあともう

1人来るはずだ。

「アラアラアラ……皆さんお揃いなのかしら？」

そんな事を考えてると、予想通りの人物がやって来た。

何があつたらその身体になれるんだNo. 1 バカラ氏。

なんか俺の仲良しの女性陣が勢揃いって感じかな？ ガープの事だから余計な考えとしか思えないんだが、女子会でも開かせるのかねえ？

だとしたら俺いらないじゃん。

「まだあと一人じゃな。——おお！来たか！待つとつたぞ！てつきり勝手に帰つてもたかと思つたわ」

「……………約束を破る理由がないが、的を得ている」

1人遅れてやって来たのは、王下七武海の1人 暴君 バースロミュークマ。遠くから見ても分かるほどの巨漢である。

と言つても今日の前に突然現れたんですけど。瞬間移動の能力だったか、敵になつたら滅茶苦茶厄介だなあ。

確か頂上戦争の後に改造されて、人格が無くなるとかどうとか。つて事は今は普通の人間ってわけだな。

それで一体何をやるんだ？

「よし、アイトから順に左から荷物を背負うんじゃ」

そう言われて取り敢えずアイト・アイン・モネ・バカラ・ヒナ嬢の順に並んで荷物を背負う……が………何コレ、結構重いんだが？

俺達が重さに戸惑っているとガーブかクマに何やら耳打ちをしている。いや、ホントに何する気だ？

次の瞬間俺たちの体は全部別々の方向に飛ばされていた。

「「「「——ええええ——?!?!?!」」」」

俺達が驚きのあまり目がとび出そうな程叫んでいると、微かにガーブの声が聞こえてきた。

「皆、死なんよようにの——!」

だから何しとんじゃ——!!!

ぐんぐん俺自身の意志とは関係なく、速度を上げていく俺の体。気付けば俺の体は“新世界”に向かっていた。

—————

数日後

「グベツ!!つてて…何処だここの」

俺が着いたのはThe・ジャングルの島。恐らく無人島だと思うが、いきなり赤い壁を超えて墜落したのが新世界のジャングル――

――これ死ぬのでは？

耳をすませば辺りから聞こえてくる猛獣達の唸り声。

意識を集中すると分かる明らかに今の俺より断然強い気配。

そして何より、来て数秒で汗が滝になるほど高温多湿な気候。

「グルワアアアツツ!!!」

そんな風に考えてると飛びかかってくる猛獣。

生き残るには考えてる暇は無さそうだ。

――

「アイタツ！」

突然襲った衝撃に思わず声が出る。が、思った以上に痛くない。

下を見れば私がつってる場所が、草葉で出来たフカフカのクッション代わりになった

ということが分かる。

起き上がって周囲を見渡すと少し離れたところに集団がいる。話しかけようと思い、近付こうとすると――

「何奴ツ!?!」

私に対して戦士のような女性達が弓を向けてきた。

まあ、突然降ってきたら驚くよね。戦う意思は基本的にはないけど、そうも言ったられないのかな？

場所を把握する為にも私は双剣を引き抜いた。

――――――――――

「……着いた見たいね」

クマのような人に飛ばされたと思ってやっきたのは――遺跡かしら？何か重厚な建物が建ち並んでるわね。

生活の跡は見当たらないけれど、確かに人が住んでいた場所だと言うことは分かるわね。

なんか体が動かしにくいし、地面が斜めってるし黄金の欠片？が落ちている。

なににせよ、そこら中に罠が仕掛けられてるかもしれないし、いきなり仕掛けられるかもしれない。

どこに行けば良いかも分からないけれど、取り敢えず気を付けて進むとしましょう。

「これは……医術書？それにこれは……ダイアル？」

少し進んだ所にあつた建物の中には、巨大な書庫が鎮座している。

ここにあるのが役に立つのかどうかは分からないわね。何にせよ、為になるかもしれないのなら、なんでも吸収してみましよう。

私は進む前に建物の中を物色することにした。

盗賊見たいね。

—————

「……アラアラ、野蛮な場所ね」

私が落ちた島はどうやら無法地帯のようだ。

まず目に付いたのは転々と転がっている死体の山だ。

それだけでなく、

左を見れば炎。

右を見れば崖。

前を見れば激流。

後ろを見れば棘の海。

至る所に死体が転がってる以上、どう考えても平和な島じゃないわね。

「まずは衣食住を何とかしないとね」

バッグの中身を確認してから動くとしましよう。

—————

「いきなり飛ばすだなんて、ヒナ立腹」

私が飛ばされたのは——何もかもが大きな島かしら？

植物だらけでこれがこの種の普通なのかもしれないけど。

あと、飛んでる最中にバッグの中を少し見たけれど、サバイバルをさせる為の道具
だったわね。

それはつまり、迎えが来るまで生き残らないと行けないって事。

でもきつとガープ君の事だし、ロクな島に飛ばされてないはず。

「ある程度覚悟して置かないと、ヒナ集中」

自分の能力の訓練も含めて、しっかり鍛えよう。

そう思っ私歩き出した。

じゅうきゅうわ

グラントライン後半の海 “新世界”

グラントライン前半の海では1つで良かった指針が、3本となっている事からも分かるように、危険度は計り知れない。

そんな後半の海でヒナ嬢は「小人」達と生活していた。

「タオルあるれすよ、どうぞれす」

「あら、ありがとう。ヒナ感謝」

「えへへ…あ、飲み物もどうぞれす」

普段のスーツを来てキリツとした感じとは異なり、バックの中に武器や食糧と一緒に入っていた、ジャージを着ているヒナ嬢。

常日頃彼女の事をよく見ている男（野郎共）がもし見たら、ギャップで撃ち抜かれ命の危機に陥る事は間違いない。

そんな彼女と仲良くしている彼等の名は「トンタッタ族」。

常人では到底目で追うことの出来ない速度で動き回り、背中にある大きなシツポには頑丈な骨がある特殊な種族である。

彼らの住む島の周りを泳いでいる「闘魚」という、巨大で強大な金魚の仲間を容易く仕留める彼等。

そんな彼らのところに飛ばされたヒナ嬢は、男性陣の期待とは裏腹に身ぐるみを剥がれる事無く、安心安全に生活していた。

「おまえはいい人れすか？悪い人れすか？」

「？私は海兵よ？…だから世間一般的にはいい人だと思っわ」

「じゃあ武器をくらさい!!」

「……？良いけど、武器以外にも良かったらいるかしら？役立つかどうかは分からないけど、遠慮なく持つて行っていいわよ。その代わり顔を見せて頂戴？ヒナ提案」

「ほんどれすか!?!いいれすよ!——あ!姿見られたれす!!」

ヒナ嬢の言葉に反射的に姿を見せてしまった小人族。その事に気づいて咄嗟に麻醉花を食らわせた。

「……ごめんなさい。攻撃するつもりはないし、武器はあるのを全部持って行ってきてほしいのよ。」

「武器はありがとうなのれす！でも姿を見られた以上、生きて帰すわけにはいかないれす！」

「あなた達のことを言うつもりはないわ」

「え!? ホントれすか!?!」

「いや！騙されちゃだめれすよ！」

「命をかけて誓うわ」

「——ならいいれすよ」

(……簡単に信じるのね。ヒナ不安)

そんなこんなですっかりここに住み着いている。ここにやってきて早数ヶ月、バカンスで来たわけではない為、ヒナ嬢は毎日鍛錬していた。

「じゃあいくれす！」

その言葉と共に数十名の小人達が姿を消す。実際には高速で飛び回っているだけだが、ヒナ嬢自身も当初はそう見えていた。

そこでヒナ嬢は自分の実力を高めるのにちょうど良いと思い、ヒナ嬢は能力を使わずに彼らと組手のような事をし続けていた。

ヒナ嬢は元々の戦闘方法が能力を中心としている為に、かなりの鍛錬になっている。素手で地面にヒビを入れ、シツポで人間を地面に真っ直ぐに埋めるパワーは、受け止めるだけでかなりキツイ。

気づけばヒナ嬢の実力は島に来た時の何倍にも上がっていた。能力の覚醒こそしなかったが、格段に強くなっている。

ある程度してから能力を使いながらの鍛錬も始めたが、自身の能力は汎用性が高いよう高くはない。

直接的な攻撃は出来ないし、格上の相手には逃げられる。加えて1度外せばなかなか危険だ。

だからこそ捕えづらいトンタツタ族との鍛錬は、能力向上に大いに役だった。

動きづらい木々の中を駆け回り、時に有用に時に邪魔になる植物たちを利用しながらの鍛錬。

これを通してヒナ嬢は能力の繊細な扱いが可能となった。目指すは覚醒と高い目標を掲げ、今日も変わらず鍛錬。

「……アインはアイトに会えないことがストレスになってないかしら。ヒナ心配」

先輩として、時に姉として接しているアインの事を気にかけてながら、日々は過ぎていく。

「やや！これはお嬢さん。お荷物でもお持ちしましょうか!!」

突然オモチャに話しかけられたが。

—————

一方、件のアインはというと——

「死刑!」

「死刑!」

「サンダーソニア様あー!!」

「マリーゴールド様あー!!」

周囲を囲うわこの国の女達と、鋭い剣山、そして巨大な蛇の能力者2人組。

「やれ!!サンダーソニア!!マリーゴールド!!女ヶ島侵入の大罪を!!極刑の「武々」にて知らしめよ!!」

見下ろし声高に言うはこの国を統べる絶世の美女。

「……何でこうなったの？」

時は数刻前に遡る。

「私の名前はアイン。本部の海兵よ」

「海兵?!? 一体どうやってこの島へ来た!?!」

弓を構え敵意マシマシの彼女達は、今にも攻撃を仕掛けて来るように見える。アインもそれに対抗するように双剣を構える。

海兵に対してこの反応する事から、アインは彼女達が海賊ではないかと考えた。

（増援を呼ばれないように消——）

「——何を騒いでおる!」

アインがまさに飛びかかろうとした瞬間に、彼女達の後方から気品と威厳が溢れる声が響いた。

その声が聞こえるや否やサツと道を開ける彼女達。そしてその彼女達の後ろからやってきたのは、アインが是が非でも滅すべしと思っている存在。

「……全く——」

女の帝国「アマゾン・リリー」

この国では「男子禁制」を数百年続けている。

外界へ出た者が時折体の子を宿し帰り来るも、不思議な事に生まれて来る子はみな女。

深いジャングルに囲まれた高い山には、大きな穴が開いており、まるで要塞のように村は作られ国が成り立つ。

働き手は勿論、力仕事もすべて女。生まれながらに戦士として育てられた彼女達は、実に逞しく豪快であるが、どこか気品をも漂わせる。

強欲で愚かな男など、立ち入る隙もない。

もしも男がこの国に近づけば、ただ消されるのみ。

そんな国を治めるのは、海賊女帝「ボア・ハンコック」

世界中の誰よりも気高く、世界中の誰よりも美しい彼女がそこに現れた。

「そなたは——」

「…ハンコック!!!!!!ここで会ったが100年目よ!!!」

アインの格好を見て、何故海兵がここに居るのかと、聞こうと歩み寄って来るハン

コック。

どちらかと言えばまだ温和に話そうとしていたハンコックに対して、当のアインは全力で攻撃を仕掛けた。

「——わらわに見惚れるやましい心が、そなたの体を硬くする……！　〃メロメロ〃甘風（メロウ）!!!」

ハンコックの十八番、〃メロメロ〃甘風（メロウ）。その技はハンコックを見て、見惚れる者を石にする。

原作でも数多の海賊、海兵を男女問わず固め、砕いてきた事だろう。

しかし——

「——そんなもの効くもんですか!!」

「……な!？」

アインはいとも容易くハンコックの常識を打ち崩した。

「男はいつも……巨乳、巨乳、巨乳!!——巫山戯んじやないわよお!!!」

アインの魂の叫びはハンコックを軽く引かせ、可哀想な目をさせる。そんな目に気付

いたのか、アインは自身の最大の技を放つ。

「なんで周りに、飛び切りの巨乳が集まるのよ！ビビちゃんがなつたら！絶交よ！！——

——大同小異！！！」

「！芳香脚（パフューム・フェムル）！！」

互いが覇気を込めてぶつかり合う。その衝撃波で周りの木々が大きくしなり、動物達は全ていなくなっていた。

たとえ惚れていなくても、触れれば石化させられるハンコックの技だったが、足がぶつかってもアインが石化する様子はまるでない。

その理由は、アインが怒りとか色々でパワーアップしているから。ハンコックを見たその時から、目は血走っており涙を浮かべている。

「巨乳なんて！滅んでしまえ！！！」

「さつきから何を言っておる！」

普段なら、優しい優しい女性であるアインなら、決して使わないような言葉を叫び、又

は呪詛のように眩き、明確な殺意を持ってぶつける。

巨乳に対して積もっていた怒りが、アイトに会えない事が、アインを殺人鬼へと変貌させた。

「……わらわの前に立つ事を許可した覚えは、無い」

そうして戦うこと数時間。アインは敗れ、気が付いた頃には、決闘が始まろうとしていたのであった。

「わらわは……何をしようと許される……!!なぜなら……そうよ、わらわが美しいから

!!!」

『きや~~~~!!』

『蛇姫様あ~~~~!!』

この国を統治している彼女が一言発するだけでこの大騒ぎ。アウエイ感半端ないと思いつながら、アインは実心的 確（はずれな） ことを言う。

「ふふ……そなたもそうであろう?」

「(新手の悪い宗教みたい……)——アンタ(巨乳)は大っ嫌いよっ!!」

「?!?!」(ガーン!!)

蛇に捕まりながらも立ち上がり叫んだ一言。それはこの国に住むものたちに対しての、冒険にも等しい行為である。

「!?あの女、蛇姫様になんて事をツ!!」

「死刑よ!絶対に許さないわ!」

騒ぐ彼らを見ながら、ハンコックは気になった事を聞く。

アインは正直言つて結構強かった。今はさっきのような雰囲気はしませんが、かなりの手練である事に間違いはない。

聞かずにあの場で殺しても良かったが、何の目的で来たのか確かめる必要があるし、今は強そうに見えないので、妹達の相手にちよūd良いと考えていた。

「海兵がこんな所になんの用じゃ?この国の地を踏まない、3km以内ほど入らない約束をしておろうに」

「それに関して、海軍のお偉いさんに言つてくれないかしら?…私は被害者よ。だつて突然わけも分からず飛ばされたんだから」

「——そう言われて「ハイ、そうですか」とはなるまい。目的はなんじゃ?」

アインは臉の裏に「ぶわっはっはっはッ!」と笑つてるガープを若干憎みながら、何

か指令が有ったか思い出し——直ぐにないと判断する。
「……だんまりか。ならば此方にも考えがある……」

『死刑!』

『死刑!』

「サンダーソニア様あー!!」

「マリーゴールド様あー!!」

周囲を囲うわこの国の女達と、鋭い剣山、そして巨大な蛇の能力者2人組。

「やれ!!サンダーソニア!!マリーゴールド!!女ヶ島侵入の大罪を!!極刑の「武々」にて知らしめよ!!」

見下ろし声高に言うはこの国を統べる絶世の美女。

武器を持ってやって来るのは2人の女性。どちらもこの国において、蛇姫の次に強い猛者だ。

周りにいるもの達は間違いなくこの2人が勝つと信じて疑わなかった。

「〃蛇髪憑き(へびがみつき)〃 〃炎の蛇神(サラマンダ)〃!!」

「〃八岐大蛇(ヤマタノオロチ)〃!!」

「全ての胸に貴賤なし……——大同小異（だいどうしょうい）!!」

手数で圧倒し逃げ場を奪い、確実に仕留めようとした2人であったが、2人の中々に成長している胸を前にしたアイン（殺人鬼）には、齒が立たなかった。

大きくても、小さくても、纏めて見れば皆同じ。どんなやつも纏めて空へと吹き飛ばす、逆さ竜巻とも言える技。それが「大同小異」

昇○拳、スカ○アツパー……そんな風にも見えるアイン渾身の技が、襲い来る2人を纏めて天高く打ち上げた。

『サンダーソニア様?!』

『マリーゴールド様?!』

「私は誓う……この世から全ての巨乳を超えてみせると……！なつて見せると……!!」

観客が空を舞う2人を心配するなか、アインは巨乳に打ち勝った事をしみじみと喜んでいた。

「……このままじゃ2人が剣山に……!!」

とは言え、海兵としての本分が、悲鳴まがいの声を聞いて動かないわけが無かった。

最も、ガッツポーズをやめて助けた、アインの心中は穏やかではない。

「……助かったわ」

「……ありがとう」

「良いのよ……困った時はお互い様なんだから（巨乳は私が最後まで全部仕留めるから……!!）」

人型に戻った彼女達を舞台上に置いて、アインは蛇姫を諸悪の根源（と考えている）でも言うかのように、睨みつける。

「……そなたは、敵に情けをかけるか」

「……何言ってるの巨乳ごときが。勝負はついたんだから、そこまででしょ？——それとも次は貴方が御相手でしょうねえ？」

次こそは、今度こそは倒す。心の底から込み上げるような怒りを滲ませながら、1歩とハンコックに近づく。

（剣は無いけど、負ける気はない！さあ尋常にしよう——）

「……もう戦う気は無い。城へ来い……お互い胸中をさらけ出して、話そうではないか」
『蛇姫様!!』

ハンコックはアインの事を当然警戒しているし、何の目的で来たのかも分からない。加えて妹2人では止められないと考えて、手元に置いておく事にした。

「——誰が小さい胸部装甲さらけ出せですって!？」

『えー?!?!』

こうしてハンコックとアインという、ナニが真逆な人間同士の間には絆が生まれたのである。

因みに一緒にお風呂は絶対に嫌、とアインが力づくで断った。

「——アイトって言ってね、大好きなんだけど、巨乳好きなのよ……!!」

「お主に靡いてくれぬと……ならばわらわが直々に性根を叩き伸ばしてやろう」

そしてここにハンコックルートが出来てしまった。

—————

私が無法地帯に来てから、早くも数ヶ月…半年近く経った。

今日まで色々あったのだけど、なんだかんだで政府側の陣営に加わって毎日戦争に参加しているわ。

今までも結構過酷な環境で暮らしてきたことはあったけれど、今回は終わりの見えない戦争なのよね…。

反乱軍は幹部出会つても脅威になるほどの実力者はいない。しかし、数がいかんせん多いのよ。

私の能力は「ラキラキの実」。モネのように広範囲に強力な技は残念なことに出せない。

運気をかなり使えば不可能ではないけど、そうするとその後が困る。

さつきも言ったように数がとんでもなく多いのだ。それにどこから手に入れてるのか、武器もかなり持っている。

そんな環境に身を置いていた甲斐があつて、私の身体能力は飛躍的に上がった。上がらざるを得なかつた、とも言えるけどね。

加えて新たに能力の使い方も見つけられたわ。

「——食らいやがれエー！このラキ銃（ガン）を！」

1人の男が撃つた弾丸が着弾した場所が、なんの前触れもなく陥没する。穴は大きく、向かつてきた数十人の反乱軍の兵士が落ちた。

必ず落とし穴を作る訳では無いが、今のように能力を銃本体に付与する事が出来るようになったのだ。

銃が幸運になつている今、運気を使い切るまでは文字通りの無双が出来ることだろう。

そして、私の能力はつい最近「覚醒」したように思える。

来てからの私は死の危険と常に隣合わせのこの場所で、生き抜くために彼らの元に戻るために必死だった。

何度も死線を通ってきたし、何度も追い込まれた。

まだ大して覇気と六式を会得していない以上、苦戦するとは思っていたけど、何度も死の淵に立たされるとは思わなかった。

そのおかげで目で見える範囲、およそ直径数百メートルの範囲に入った者から、掌を向けるだけで運気を吸い取り、与える事も出来るようになったのだ。

更には運氣によってどのような幸運が起き、どのような不運が起るかも何となく分かるようになった。

勿論何が起るかは分からない。しかし、どの程度、どのくらいの規模で、起るのかは感覚で分かるようになったのだ。

元々運気をどれくらい使うかを、ある程度コントロール出来たので、そこまでエグい

能力では無いかもしれないけど。

でも「覚醒」とはまたなんか違う気もするのよね……。
だって周りに覚醒した人いないし。

あ、あと、上品な喋り方から高飛車な昔の性格に戻った気がするわ。

口調というか、喋り方というか、気付いたらそうなってたのよね。

これもアイト達に会えない事が原因かしら……？

「——何にせよ、もう少しで帰らないと、ね」

言いながら切り掛かってきた敵を蹴り飛ばす。それにしても、数の多さつてのは厄介ね。

孤立しないように、注意しながら戦わないと。

そう思いながら、私は能力を使うのだった。

—————

背中に雪で作った羽根を付けてから数ヶ月が経った。

やって来た当初は遺跡にあった色んな本を見たけれど、あまり役に立たなかったわ。だから私はダイヤルを貫うために「神様」と面会していた。

話し合いは終始和やかに進み、私が持っていたものといくつか交換する事で、使えそうなダイヤルを手に入れた。

その時だった。

「敵襲〜!!!」

「何者だ!!!」

「シヤンディアじゃないぞ!!!」

「どう言う事だ…!!何者だ!!!」

「神（ゴッド）・エネルギーと名乗っている者が…!!!」

「神様ツ！一大事です!!」

攻め込んできたのは「ゴッド・エネルギー」という、謎の太鼓を背中から生やしている男とその配下。

その強さは凄まじく、神兵達や神様である、ガンフォールも太刀打ちできなかった。原作通り蹂躪、そして惨劇が神の社が起こされようとしていたが、偶然その場にいた者により、返り討ちにあつた。

眼鏡帽子達磨を蜂の巣にし、ジエツトな拳を捻り潰し、なんかダサイ飛行厨を地面に落とし、ハゲグラ泣き虫を蹴り飛ばした。

「ヤハハハハハッ！やるじゃあないか、その女！その実力を見込んでどうだ？私の下にこい！」

「悪いけれど……私、心に決めた人がいるの」

その言葉が始まりの号砲だった。

激突する雪と雷。

どちらも強大な力を持つ自然系であり、周囲はたちまち荒れ果てた。荘厳な社があつた場所は、そこら中が凍り、あちこちに穴が空いている。

エネルギーの雷は単純に脅威だ。当たればイチコロと言つて良いほどの、凶悪な能力。

対するモネの雪は雷ほどに脅威ではない。雷がたかが静電気でできる者だとしても、雪よりも恐ろしい事に違いない。

技の見た目からも、威力からも、「雪」と「雷」という響きからしても、雷の方が強く

聞こえる。

しかし、結論から言うと戦いはエネルギーのボロ負けだった。

なんせ雪であるモネに攻撃が当たらないのである。

周囲を銀世界に変え、覇気を込めてエネルギーに攻撃する。勿論、エネルギーは避けられるし、雷の持つ「熱」で倒せるはずだ。

しかし、いくら雷を落としても、武器で打撃を加えようとしても、雪に攻撃は当たらない。

雷が効くか、効かないかは、電気が伝わるとどうなるか、だ。

まず、雪や水、氷に電気を当てるとどうなるか、色々有るだろうが普通に考えれば電気を通すはずだ。

故にポ○モンの世界なら、水は効果抜群だろうが、電気と氷は抜群でもいまひとつでもない。

加えて、通したところで何か問題になるだろうか。

原作ではルフイに電気が通らない為に効かなかったが、生身の人間には効いても、ロギアには一切効かないのだ。

ロギアの能力者に攻撃を当てるには、相性や覇気が大事になる以上、熱が弱点であるモネには対して、電撃は若干のダメージにしかならないのだ。

だが、エネルギーにも「熱」ならば勝機はある。

だから雷を落とすのではなく、熱でモネを倒そうとする。

最初からそうして戦っていれば、モネは負けていたかもしれない。

しかし、エネルギーは最初思いつきり舐めプをしたのである。好きにしろとばかりにそこに座った。

効かない事に絶望すると踏んだエネルギーであったが、先手をモロにくらって「これはマズイ」と認識を改めた。

レイピアで深々と刺され、横に切り開かれた。それほどの大ダメージを食らってしまい、その時点で勝敗は決まっていたのかもしれない。

尚、心臓を刺さなかったのはムカついたから、痛めつけて苦しめようとしたからである。

「神の裁き（エル・ツール）!!」

超威力のレーザーのような一撃がモネを襲うが、予め周囲を銀世界にしていたモネは、一瞬でエネルギーの後ろに移動しカウンターを仕掛ける。

「たびら雪 〃肌刀〃!!」

「!」

背後からの一振をその場でエネルギーは頭を下げた回避すると、自身の下半身が雪で覆われている事に気付いた。

しかし、気づくのが遅すぎた為、モネに殺意タツプリのガルチューを食らう。

「……凶に乗るな!!」

エネルギーは噛み付いたモネを引き剥がし、棒を振り回して太鼓を叩く。

すると現れたのは雷の化身のような、種々の生き物たち。

「3000万V 〃雷鳥（ヒノ）〃!!」

「〃雷獣（キテン）〃!!」

「6000万V 〃雷龍（ジャムプウル）〃!!」

背中に刺さっている太鼓を叩き生み出される動物達は、モネの足下をしつこく攻撃しモネを空へと逃がす。

「神の裁き（エル・ツール）!!」
「!」

モネが地上の雪から雪へと自在に移動出来ないように、空中へと逃げた所を狙って放ったエネルギー。

その直撃は何とか躲したモネだったが、それなりにダメージを負ってしまう。

その後も激しい戦闘が続くが決着は着かず、痺れを切らしたエネルギーは自身の奥の手とも言える技を繰り出す。

「2億V 雷神（アマル）!!!」

自分自身を雷神（アマル）として巨大化させ、文字通りの全力の一撃を繰り出す。

「神の裁き（エル・ツール）!!!」

前に放っていた技とは異なりその一撃は凄まじく、神の社を半分消し飛ばした。これまでも誰かに当たっていたら助かりようがない。

知り合ったもの達が無事である事を祈りながら、モネはエネルギーに怒りを込めて攻撃する。

エネルギーもそれに対応して凄まじい雷の猛攻を加える。

エネルギーの雷による攻撃が次々と放たれる。高速かつ、強力な雷。それは「剃」よりも早い、モノとて雪の中を一瞬で入れ替わる。

故に――

どんなに大範囲に熱を走らせても、

「マントラ」で避けようとしても、

時間が経つ事に追い詰められていく。

最初の舐めプが最大の間となり、エネルギーに牙を向き続けているのだ。

それゆえに……

「雪兎（ゆきうさぎ）!!」

覇気を纏った雪の弾丸が無数にエネルギーを襲う。大きくなっただけに、簡単な当てゲームとなっている。

「……グツ!!おのれ貴様!!」神に逆らって生きてけると思うか!!」

「貴方程度で神なら、世の中の大部分が神の国になっっちゃうわ……それじゃあ神様のありがたみまで、無くなっちゃうじゃない」

地味に効く厄介な攻撃に苦しむエネルギーに、腕を雪の羽にしたモネが決着を着けようと迫る。

「神の裁き（エル・ツール）!!」

それをうち落とそうと次々と狙い撃ちをするエネルギー。

決して無視できるダメージではないが、気にせずにモネがエネルギーに迫る。

たとえどんなに雷が強く、速くても、エネルギーがどんなに「マントラ」に長けていても、「覇気」の前に倒されるのみだった。

「——たびら雪〃肌刀一閃〃——」

「!!!」

「——雪月死期（ユキゲシキ）!!!」

片方の腕にだけ作られた巨大な三日月型の刃で、エネルギーの体を真つ二つに両断する。ゆらりと振り返り落ちていくエネルギーを見るその姿は、さながら「死」を告げる死神のようであった。

能力の相性に苦戦したモネだったが、エネルギーが舐めプをしてくれたお陰で倒すことはできた。

それでも体のそこら中に火傷のような後がある。

流石のモネといえども、ダメージは結構あったのである。

能力の過信が以下にマズイ事を敵に教えられたモネは、その日以来能力頼りの戦闘は絶対にダメだと考えた。

知らず知らずのうちに原作を一人で変えてしまったモネは、そんな事は露知らずガンフオールらと鍛える。

そして得るものを得たあとは、雪で羽を作り青海へ降りていった。

目指すは近くにあった高い煙突のようなものが複数見える、グランドラインの島へと。

「待たずに自力で帰るとしましょっか」

傷ついた体を治すためにも彼女は飛び立った。

—————

「懐かしいなあ」

そう言つてギーコギーコと椅子を揺らす一刻の王女様。

思い出すのは想い人と遭遇だった。

砂砂団に入ってから少ししたある日、ビビはいつも通り街に出ていた。

「やあお嬢ちゃん」

「お出かけだね…送ろうか？」

するとそこに現れたいかにも悪そうな大柄の男達。

「かかれ 砂砂団!!!」

さらにそこに現れたビビの友達。

大勢の子供達が大男に飛びかかり、 砂砂団のリーダー・コーザがビビに逃げるよ
う叫ぶ。

その事に戸惑っているビビに、身代金目当てでやってきた男たちは子供達を吹き飛ば
して近づこうとした。

「死んでも守れ!!! 砂砂団!!!」

そうはさせないと、立ち塞がる彼らだったがいくら数が多くても、大の大人を倒せる
わけがなかった。

「いねえな、どこに隠れやがった…」

「捜せ捜せ！逃がすんじやねエぞお!?」

必死に逃げて隠れたビビの周囲を探し回る大人達。息を殺して隠れていたビビだったが――

「――何だ、ここにいたのかい……!」

一味のリーダーに見つけられてしまう。原作ならコーザが直ぐに助けに来たが、その前に、代わりにやってきた男がいた。

「――見つけましたよ、ビビ王女」

「え!?!」

「あん?」

「お迎えに上がりました。この度海軍本部より近くの支部に派遣された、アイト少佐です……あ、ここは支部だから、大佐か?」

海軍の大佐などの一定程度の階級に達している海兵が、身に付けることを許可されるマントを翻し、ビビの前に跪くアイト。

ついこの前、アラバスタ近郊の無人島に作られた支部に配属された者である。

今日は国王へ挨拶に来たのだが、ビビを追っていった為になかったので、とりあえずビビに探しに来たのだ。

「あくん？何だてめえは」

「何だチミわってか!?…そうです。わたすが変なおじさんです」

「聞いてねえよ!——あーそうかい。んで、なんの用だ——よ!!」

「そりやビビ王女を助けに来たのさ」

刃物を取り出し切りかかる男と、腕で受けた海軍キャップを被ったアイト。

その瞬間に飛ぶだろう血と、響くだろう悲鳴に、思わず目を閉じたビビだったが、飛んだものも、響いた悲鳴も予想とは違っていた。

「な、なんなんだてめえは!」

「何だチミわってか!?…そうです。わたすが変なおじさんです」

「だから聞いてねえよ!」

男が斬りかかって飛んだのは、折れた男の刃物。響いたのも斬りかかった男の悲鳴だった。

その事実を目を白黒させる男を見ながら、ビビの頭にポンツと手を置くアイト。その優しそうな顔と人肌の温もりに震えていたビビの体が落ち着く。

(この人……信用していい人、なのかな)

ビビがそんなことを考えている間、2人の会話はまだまだ続いていた。

「……大体!その娘がホントにビビ王女かどうか分かるのか!」

「な、なに?!——確かに…それは判断できないな」

確かに現世において、アイトはビビの顔を見たことは無い。なんなら原作の幼少期の顔は忘れてさえいた。

「だろう!?!俺アこの国に住んで長いが、ビビ王女とそいつは似ても似つかねえぞお?」

「そ、それは!本当なのか!?!じゃあ本当のビビ王女はどちらに?!」

チンピラのリーダーはそう言いながら、アイトに近づいていき背後に隠れているビビに触れようとしたが——

「確か、あつちにいたぜ」

「おお!そうか!助かった……てなるか!!」

が、この顔信用出来ねえ、と思ったアイトが一蹴りでのした。顎を蹴り挙げられた彼は一瞬で意識を刈り取られてしまったのだった。

その後コーザや国王であるビビの父コブラや、護衛隊長イガラムが残りのチンピラを吹っ飛ばして現れたり、チャカやペルもまたその場にやって来た。

丘に倒れていた「砂砂団」を王宮に運び込み、治療が終わって話していた時のこと。

「…死ぬなんて言わないでよ。リーダー…!!」

初めて明確な悪意を感じたビビは泣きじやくっていた。ただ理由は普通と異なり、友

達を失うことが恐かったのであった。

「……この国は好きか？」

「……うん！生まれた国だ!!!」

そんな頼もしい子供達を見て、父であり、国王でもある彼は部下のイガラムを諭す。彼の言うようにビビは上に立つものとして優しすぎる。しかし、国王はそれで良いと言う。

冷静な判断は大事だが、優しい心はそれよりも重要なものだと、暗に示して歩を進めたのだった。

「……あのおくく、俺の事忘れてません？」

思いつきり予定をすつ飛ばしていたが。

この日の翌日、改めて挨拶にやって来たアイトに、ビビがお礼と称して一日中遊び相手にさせたのは別の話。

「次はいつ会えるのかなあ〜…」

アラバスタは今のところ平和である。

しかし、クロコダイルの真面目さ、態度を信じて、上層部が海軍支部を無くしてから、
歯車は狂い始めるのだった。

にじゅうわ

一方思いを寄せられていた当人は、絶賛「死線大大セール」の真つ最中だった。

ガープの破天荒で世界各地に吹っ飛ばされたアイト達。

アイト以外が一年ほどで帰還し始めている中、アイトだけは未だに止まっていた。

アイトの最初の6ヶ月間

飛ばされた日はまだステューシーとの戦いの疲れがかなり残っていて、4日間くらい何もしてなかった（動けなかった）。

しかし持つてきた（持たされた）バックに食料は無く、水と服ぐらいしか無かったの
で、木の実を食べて凌いだ。

因みにアイトのバックには大量の着替えと、最低限のお金しか入ってなかったりする。武器も食糧も入っていないのである。

「……………俺に死んで欲しいのかな？」

そしてそのときに槍を忘れた事にまた気が付いた。

それは置いといて、木の実の味に飽きたことと、その木の実を食べようとした時に猛獣に襲われた為に、ソイツらを食べる事にした。

時には牙がでかい獣、時には足が多すぎる虫、時には見えない怪鳥、時には空を覆うデカさの猛獣……結果は散々たるものだった。

挑んだ回数 1000以上

勝った回数 300以下

死にかけた回数 数しれず

そして何度も死にかけた結果、アイトは遂に自身の記憶の奥底に眠っていた、前世の記憶と悪魔の実の力を手にした。

最初こそ戸惑い、混乱して錯乱状態に陥った。その時に頭に岩が降ってきて見事に気絶。お陰で落ち着きを取り戻した。

気付かぬうちに使っていた今までは異なり、効率よく体の一部に発現させることなども出来て、かなり分が良くなった。

その姿はまさに「蒼」の化身。全長は月に届くとさえ思えるほど長く、ヒゲや牙など

は無いが、背には魚の背鰭（せびれ）のような物が複数あった。

日本古来の龍のような短い手足では無く、大きく太い手腕だけがそこに付いていた。太く頑丈な手には、ダイヤでさえ豆腐のように切れる鉤爪が付いている。

空中を浮遊する事は出来るが、高速で飛ぶことは出来ない。しかし、この世界において決定的に強い「力」を持っていた。

1つ念じれば波を起こし、2つ念じれば大波を起こし、3つ念じれば渦潮を起こし、4つ念じれば全てを海の藻屑にする能力。

「その力は世界の法則を崩す…いや、崩壊させかねんモノだぞ！」

「たとえそれでも…俺はッ！」

「それほどまでにか。——仕方あるまいな。せめて、もしもの時に止めてくれる者を作れるようにしてやるか」

そうして神から授かった圧倒的な力。

その名は――

島へ飛ばされてから、半年

「ブリリアント・パンクツ!!」

「ぐべえっ!」

白ひげ海賊団3番隊長・ダイヤモンド・ジョズ。

「世界最強の男」として名高い「白ひげ」こと、エドワード・ニューゲート率いる白ひげ海賊団で3番隊長を務める男。

怪力自慢で大きな体でありながら、凄まじい速度で戦闘を行える。自身の肉体をダイヤモンドに変化させる能力で敵を吹っ飛ばす。

その男の会心の一撃をモロにくらったアイトは、モビーディック号の柵を粉碎して海へと落とされた。

『ア、アイトオオー!!』

「……船を壊すんじゃねえよアホンダラ」

だいぶ遠くまで飛ばされたアイトの事を心配する「息子」達を尻目に、世界最強と恐れられる男・白ひげはため息混じりに独りごちる。

彼らがアイトを拾ったのはおよそ半年前の事。ガープから受け取った謎の紙「頼んだ」を読んで態々拾ってくれたのである。

現在はアイトを拾った島からまた別の島に移動中で、近くには何も無い無人島が見える。

会った当初はとんでもない巨体で喧嘩を吹っかけてきたアイトだったが、マルコのワパンで大人しくさせられた。

以後、ジヨズやビスタなどの白ひげ海賊団の傘下も含んだ全ての船員とノリが合うのか、すっかり意気投合している。

気付けば幹部達と訓練を行うのが日課となっており、実力もメキメキつけてきている。だが、彼はあくまで「預かっている」存在。

ましてや敵対勢力の期待の若手という事もあり、白ひげとしては気に入りつつも「息子」とはしていなかった。

「ギャオー——!!」

「おお! 出たぞアイトの能力!」

「あいつかわらさずデケエなく!」

「ゼハハハ……! 面白いやつだぜ! // 海に落ちても普通に動ける// んだからよオ!」

ジヨズに海に落とされたアイトは、能力者でありながら海の中でも平気で動ける。それどころか変身してれば陸よりも早く動ける。

そうしてまた突っ込んで来るアイトをジヨズが迎え撃つ。

何度も吹っ飛ばされては挑み、沈められては船を揺らし、海水を自在に操るその能力の名は——

—動物系幻獣種リュウリュウの実 リヴァイアサン—

17世紀イギリスの代表的政治哲学者ホッブズの主著に記された「大海の覇者」と称

される怪物。

リバイアサンとは、『旧約聖書』に出てくる怪物の名前で、神を除き、この地上において「最強」のモノを象徴した言葉である。

ホツブズ曰く、最強なるものとは、人々が生命を守るために契約を結んだ事により生まれた、政治共同体Ⅱコモンウェルス（国家）である。

このリバイアサンは海の怪物だが、それと同時に「平和の怪物」であつたとされている。

「ピューリタン革命」という悲惨な政治状況を目の前にして、ホツブズがいかにして人間の生命や自由を保障できる、平和で統一的政治社会を確立するかを考えて、誕生した『リバイアサン』。

それを体現するかのような巨体は、圧倒的な存在感を放っていた。

海でカナヅチになるどころか、魚人並みに自在に泳げて、視界に入れば海を操れる能力。それは間違いなく強力だ。

しかし陸上で変身した状態だと早く動けないし、カイドウやビッグマムらほどの頑丈さもないし、レーザービームなんぞも出来やしない。

海棲石に触れれば他の能力者と同様に力が抜ける。自在に操れる海での攻撃も猛者

ならば、容易く切ったり吹き飛ばす事ができる。

だが、「大海の覇者」と呼ばれるだけの圧倒的で、純粋なパワーと回復力にスタミナが備わっている。

この力を極めた時にどんな力が身につくのかは、今はまだ分からない。しかし「覚醒」した暁には、凄まじい実力を手にすることは、間違いない。

「なあーオヤジい。いい加減アイトの事を息子と呼んであげろよー!」
「アイトみたいな良い奴、中々いないぜえ?」

そうだそうだ、と戦ってるアイトらを眺めてる外野たちが騒ぐ。当初は少なかったが、今では傘下の者達まだ同調している。

その事に立場を考えると、彼らの親父はため息混じりに諭そうとする。

「……………アイトは本部の海兵だろうが。もし俺の息子だとバレたらどうなる?」

「……………アイトの身が危なくなる?」

「そう言う事だ。息子が危険だつてのに助けに行けねえ親父がどこにいる?」

話は終わりだと白ヒゲは手元に置いてある酒を注ごうとして、あるはずの入れ物が無いことに気づく。

「どぞどぞ…俺が注がせて頂きますぜ——親父」

「ああ…悪いな…?!」

氣を利かせて酒を注いだのはアイトである。しれっと杯を当てて盃を酌み交わそうとしていた。

「今日をもつて！俺、アイトは…エドワード・ニューゲートを親父として、1人の息子として敬愛し、命を預ける事をここに宣言する!!」

「てめえっ……!」

酒を飲んで油断している隙を逃さず、グビグビと良い音を出しながら飲み干していくアイト。

その光景を見て白ヒゲを除く、全白ヒゲ海賊団構成員が歓喜した。あつという間にポルテージがMAXになったのか、至る所で宴が始まっている。

「…親父、アイトなら大丈夫だよい」

「……マルコか——フウー…」

白ヒゲの心中を押しやって話しかけてきたのはマルコ。実質的な白ヒゲ海賊団のナンバー2だ。

そのマルコもまた、アイトが家族になる事を後押ししていたし、何ならさっきの作戦もマルコ考案のものである。

「親父だつて船長じゃなかったら、真っ先に息子にしてたはずよい」

「……フン」

凶星とも言える反応を見せないように、マルコの言葉を聞きながら白ヒゲは飲み干した杯を置いて立った。

そして他の息子達と酒を酌み交わしている、宴の中心人物のアイトの首根っこを掴んで、無人島に思いっきり投げた。

「のわあー!!?」

「…………お前は俺の息子なんだよな?」

白ヒゲもまた愛用の薙刀を持って降り武器を構える。能力も使っており、やる気満々である。

「あ、あのお…………お、親父さん?」

「折角息子になったんだ、遠慮するな。親父が直々にしごいてやる」

「え、いや、その、流石にそれはちよつと、お、俺の身が持たないかと…………パ、パワハラと言いますか…………」

「安心しろ、能力を覚醒させる手伝いをするだけだ。1週間もすれば瀕死の時に発現させてやる…………死ぬかもしれないがな」

「イヤイヤイヤイヤツツ!!最後最後!!最後なんて!?!——それに能力の覚醒って相当な手練れじゃなきや出k「そおおらあ!!」…………!!」

その日飲めや歌えやの宴の喧騒の裏に、一人の青年の魂の叫び声と、無人島が無くなる轟音が響いていた。

アイトが来てからちようど1年

「——俺が2番隊？」

「ああ！お前なら皆大歓迎さ！」

「ずーっと欠番だからなあ……」

「ただ、そうなるとアイトは海兵を辞めなきやなんねえが……」

アイトが飛ばされて、そして白ひげ海賊団にやって来てから、ちようど1年経ったあの日にアイトは仲間たちから誘われた。

確かに今のアイトの実力なら、隊長になるのが当然のような気もする。
が——

「——俺海兵だっけ!?!」

『忘れてたんかい!!!』

自分の顔を指さして本気で驚いていたアイト。
仲間には海兵と言われるまで、この凡そ1年間で、アイト自身すっかり忘れていたのである。

—————
その日の夜、親父である白ひげから身の振り方を決めるように言われ、1人静かな船の見張り台にアイトの姿があつた。

前世は強大な権力により、最愛の唯一の「家族」を失つた。目の前で家族は勿論、近隣の人々もまとめてその権力により殺された。

絶望しながら亡くなつた彼は、神に出会い当初はやり直す事を望んだ。だが、神であっても時は操れないそうでそれは叶わなかつた。

そこで変わりに特典として圧倒的な力を希望した。その一つが「水関係で、たとえ海に落ちても溺れることも弱ることもなく動ける悪魔の実」だった。

神にこの力は転生先の法則を始めとして、多くを狂わせると言われたがそれでもその特典を望んだ。その主人公の顔の凄絶さに気圧され（悲惨すぎ）て、神もそれを創造することにした。

前世は孤児院の出で、頑張った甲斐あつてある企業に勤めていた。大人になってからも孤児院に仕送り出来るほどそれなりに順風満帆な生活だった。

時々問題は起こつたが、そういった事も生きている事の証のように感じられて、苦に感じなかった。

しかし冤罪により仲良しの孤児院の友達が逮捕されてしまったのだ。本人曰く、寝てただけで体の良い犯罪者にされたとのこと。

そいつの事をよく知っていた彼は、署名を集めて知人や地域の人たちと共に抗議した。しかし聞き入れられず有罪となり、訴えた主人公からも世間から批判された。

1年後に友達が有罪とならない決定的な証拠が見つかり、告訴するも体面や保身の為に権力でねじ伏せられた。

それどころか危険視した政府により、地域の人含めて主人公も他の友人も外国のスパイとでつち上げられ、有罪となり獄中に入れられることになった。

その上刑務所にて火災が発生し、主人公ら抗議した者や他の受刑者諸共焼死してしまふ。

神に教えられて分かつた事だが、この火災もわざと政府が起こしたらしい。知った瞬間に殺意が溢れたのも当然だった。

そして彼は特典を受け取り、転生する事となった。

アインと会うまでの記憶をアイトは持っていないが、現世では生まれた村が3歳の時に海賊に襲われ、悪魔の実を持って船で逃げるように言われて逃げる。

両親に渡されたそれを食べた事で能力者になったのだ。

その後嵐にあつて船が壊れ、海に投げ出されるが、その悪魔の実は特典の実、つまりリヴァイアサンだった為に、海を自由に泳げた。

とはいえ体力は直ぐ無くなり、波に身を任せていると浜辺に流れ着いた。そこでアインの家族に拾われ、以後アインの家族と仲の良い家族の元で生活していた。

そうして生活していく中で、ゼファアの訓練を受けている時に、記憶がある程度戻り、今頃になって全てを思い出したのである。

「……………そんな事もあつたな〜とは言え、思い出してもなんか冷静だなあ…俺」

こうして全てを思い出したアイトだが、驚く程落ち着いている。

今まで色んなことを経験してきたからか、予想以上に自身がこの事実を受け入れられているのである。

そして思い出すと同時に「権力」に対する嫌悪感がフツフツと沸いてくる。もう既に

別世界とは言え、やはり「権力」に対して悪い感情は拭えない。そうなる和海軍を辞めるのが、手っ取り早いと思うが――

「――だからって皆と離れるのは嫌だしなあ」

折角仲良くなつた皆と敵対するのには躊躇つてしまう。それに「権力」を振りかざしてるのは、基本世界政府であつて海軍ではない。

なら、海軍に残るべきか……イヤでも海賊になつた方が……などと悩みながら、サツチとの会話を思い出しながら、アイトは白ひげの下に向かった。

――

「ほらアイト、お前も食えよ」

「お、おお……サンキュな」

白ひげの船に乗つて数日、アイトは本人の意思とは関係なく白ひげの船に乗つていた。

周りには優しくも強い海賊達。他の四皇とは異なりかなり話が通る彼らだが、それは海兵であるアイトに対してもらしい。

別段暴れることなく大人しくしているアイトは海賊達にも受け入れられており、船長であるニューゲートも優しくもてなしてくれている。

だが、当然とも言えることなのだが、彼らと白ひげの関係と、自身と白ひげとの関係に物足りなさを感じていた。

当たり前といえれば当たり前だ。彼らは苦楽を共にしたいわば“家族”であり、アイトがそこにいるのは場違いと感じるのも当たり前だった。

しかし、どうしても心にモヤモヤが「しこり」のように溜まっている。

そうして心の中にあるモヤモヤが溜まる生活をしながら、乗ってから1ヶ月が経ったある日、4番隊隊長でもある「サッチ」が話しかけてきた。

「——なあ、アイト。顔暗くねえか？」

「……ん？なんでまた藪からステイックに」

「随分と古いボケだな……お前幾つだよ」

前世で自分が気に入っていたボケを知っている事に軽く驚き、船の柵を背もたれにして座るアイトと、その隣に腰掛けるサッチ。

2人は特段に仲が良い訳ではないが、お人好しのサッチはこうして良く話しかけに來ていた。

普段ならサッチから話しかけるのが半ば慣習のようになっていた2人だが、今回はア

イトから話しかけられた。

「……なあ、何でお前ら白ひげの事をオヤジって呼ぶんだ？」
「ん？」

別に原作を忘れたから聞いたのではない。ただ単に気になったのだ。自分の中にある正体不明の気持ちに。

「……ん——俺達はゴロツキだからなあ…親と呼べる奴アいねえし、帰る場所もねえんだ。——だからかは分かんねえが、親父は俺達の事を息子として扱ってくれる。形や血縁なんか関係なしに、帰る場所が有る事が何より嬉しいんだ。それに親父は強い。慕ってるウチに気付いたら呼びたくなるのさ。子供ってのは親を頼るし、親は子供に頼りにされるだろう？そういう居心地が良いやつを求めちまうんだよ。暖かい家庭ってやつをさ」

そう言つて気恥しそうに頭を掻くサツチは、心底幸せそうに嬉しそうにはにかんでいる。

そうしてアイトは気づく。自分は最初からずっと「頼れる人」がいるようではないと。

師匠と言つていい上司のゼファーやせんべい、鶴ばあちゃん、センゴクのおかきもい

る。

しかし、彼らから感じるのも与えられるのも、アイトが求めているものとは異なる。言われるまでもなく、師弟関係から生まれるものと、家族関係から生まれるものは大きく異なる。

似ているものでも、似ているのは見た目だけで本質はまるで違うのだ。

もつともそこまで深く考えることも無く、アイトはサツチに聞いた。

「俺が息子になって温もりを感じるにはどうすればいい？」

突然言われたサツチは困惑したが、直後にアイトが自身の身の上を話してくれたので、納得し理解を示す。

「なりたいたいなら……そうだな。親父に納得させるしかない、かな？ それこそ海賊みたいに」「ん？俺は海兵だぞ？」

「……郷に入っては郷に従えってやつさ。ここは海賊船で、お前の交渉相手は『海賊』白ひげだ。なら、海賊らしく奪ってみたらどうだ」

その日からアイトの「目指せ白ひげの息子」イベントがスタートした。

正面から頼み込んでもまるで許可してくれない白ひげに對して、周りの皆に自分を認めてもらう為に、酒を酌み交わし時には実力を示した。

これが後の隊長達との訓練である。

さらに実力行使と言って白ひげに勝負も挑んだ。まるで齒が立たなかつたがその事も嬉しかった。

なにせ初めて自分の親父になる（暫定）の男に相手をされて、その男にコテンパンに負けたからだ。

ある時、マルコがアイトに提案した。

「いつその事イレズミを入れてみるか？」

マルコの言うイレズミとは白ひげの旗を背負うという事だ。海兵であるアイトは答えられない、もしくはそれは流石に、と遠慮すると思いつながらも聞いてみたのだ。

が、アイトはマルコたちの予想とは違う答えを返した。

「それは親父になつてもらつてからだ」

なんとこの男もう彫ることは決めていたのである。

普段のアイトなら間違いなくこんな事は言わない。しかし、親を求めている事と、海

賊に染まっているが故の回答だった。

—————

そうして生活して話の冒頭で、ついに酒を酌み交わし息子になったのである。

決して勝手だとか、無理矢理とかでもない。断じてない。

そんな事を回想しながらもはや海軍の船よりも慣れ親しんだ船を歩いていき、目的の船長室に到着する。

普段なら数名は報告や連絡等で居るはずの他の者は、誰一人としていなかった。

「……来やがったかバカ息子」

「……マズかったかよヒゲ爺」

顔を合わせるや否や軽い罵声を浴びせ、酒を浴びるように飲んでいる白ひげが迎える。

それに対してムスツとしながら緑の酒瓶を投げ渡すアイト。

それを受け取りながらさらに酒を飲み話す白ひげと、返答しながら決意を固めようと悩むアイト。

2人の和やかな本当の親子の会話のような雰囲気に含まれた部屋の外では、ほかの白髭海賊団が思ひ思いに過ごしている。

が、静かな空間は穏やかではなくお通夜状態だ。

それもそのはず。今までのすつかり家族としてやって来たアイトが帰ってしまうのだ。

数日前にアイトにかかった電話で、アイト以外の修行組が全員帰っている事を知り、アイトとの時間が残り少しと分かってからずっとこうである。

元々アイトは拾って預かっていただけのため、いつか別れる事は分かっていたが、いざ近づくと悲しいものである。

そんな風に全体的に士気が下降中の船内だったが、その空気は予想もしない方法で霧散する。

発端は白髭とアイトの会話だった。

「おめエをウチから出すつもりは——」

「俺、決めたよ……明日にでも——」

「微塵も——ああ”?”」

「船を降り——ああ””?……ツ!?”」

互いの言葉が被りながら耳に届いた時、互いの獲物がぶつかり合つた。そばに置かれていた薙刀を振り回す白髭と、それを反射的に受け止めるアイト。

さつきまでの穏やかな空気は、2人の突然の激突によつて驚いたかのように、部屋の壁ごと吹き飛んだ。

『うわああああ?!?!?』

いきなり発生した衝撃波に耐えられず吹き飛ばされる船員たち。彼らもそこらの雑兵などではない為、この程度は何でもないように着地するが、その目から動揺がありありと主張している。

「:ちよーな、何すんだよ親父!!」

そしてなんの前振りもなく仕掛けられたアイトも、攻撃される理由が分からず目を白黒させている。

「この船から降りたきやあ……!この俺を倒していくんだな……!」

「は、はあ?!…ホントに何言ってるんだよ、親父……!」

ビスタから譲って貰った武器を構え、迫り来る白ひげを受け止めるアイト。理由が分からないとはいえ、ヤル気なら相手になる、そう考えてアイトから仕掛けた。

2人の戦いは凄まじく、クルー達は近くの島や別の船に避難するなどして、嵐が過ぎ去るのを待った。

そして戦いが始まって1週間ほど経ったある日、アイトが先に力付きその場に崩れた。

当然船員達は白髭に詰め寄った。物凄い勢いで突っかったが、それをしつかりと受け止めて優しく諭す。

「実力も心もまだまだ未熟なアイツを、ノコノコと返せるか。背中に刻んだモンを背負い切れねえようじゃ…話にならねエだろう」

白ひげは見抜いていたのだ。アイトの気持ちが不安定に、ユラユラと身の振り方を決めかねている事をだ。

「……いいやがって。心底重みを感じてるよ！俺は親父の息子で！皆の家族だ！ぜってえ認めさせてやる……！」

見透かされてる事に若干嫌な気分のアイトが、うつ伏せから立ち上がり背中に刻んだ「マーク」を背負えると構える。

そうして再びアイトが攻撃を仕掛けた。動物系特有の高い回復力と持久力は、もうすでにアイトの怪我を癒しており全力で襲い掛かった。

だが、力の差は歴然だ。

「……鼻つたれ小僧が……そんな程度でどうやって生きてくってんだ——海兵なら海兵らしく海賊の俺を捕らえて見せろ!!海賊なら海賊らしくしろ!——おめエはどっちなんだ……アイト」

「ぐ、う………俺ア……俺ア……俺ア!!………海——兵だ。けど!アンタらに手を出すよ。うなことはしねえ!俺は息子で!家族なんだ!だからぜつ……!!」

自分は海兵だと、だけど家族だから皆を捕えないと。白ひげが求めていない答えを出したアイトは、他ならぬ白ひげに海に落とされる。

「なめえてんじゃねえよ。——俺ア白ひげだア!!捕らえたかったら、捕らえて見ろ!!」「!!……もう俺は敵だつてのかよ。息子じゃねえのかよ!!」

そう言つて船を飛び出して行くアイトを、隊長達も必死に止めようとする。

が、それは白ひげの言葉で止められる。

「アイトオ!!……てめえは家族だ。降りる降りないじゃあねえ……海兵なら海兵らしく会いに来て!!」

「!!」

決心出来てなかったアイトの心に気が付いた白ひげは、アイトに「旅に出る」という感覚で戻るように追いやった。

本人が絞り出しながら「海兵」と言った以上、アイトを海賊にするつもりはなかった。今は良くてもいずれ後悔する。可愛い息子にそんな思いはさせたくない。

それにユラユラとした気持ちのままでは、この海で生きていくことは出来ない。背中に刻んだモンを落とさせないように、またここへ戻ってこれるように白ひげが考えた、彼なりの激励である。

「——背中の誇り、落とすんじゃねえぞ」

「……………ツツツ!!」

「俺ア白ひげだあ! “ごこ”でいつまでも……待ってるぞ」

「……………直ぐに来てやるよ。首洗って待つとけ」

そう言つて潜ろうとしたアイトの耳に一言声が聞こえた。

それはずっと欲しかった「親」という、かけがえのない存在からの、本音の言葉。
「——いつでも来い」

その日、アイトは白ひげの船から旅立ち帰還を始めた。

そうして泳ぐこと数日。

「何だお前!!アチシらの縄張りに何入ってるでやんすか!!」

「あ、姉貴!やめとけよ!絶対強いつてこの人!」

浜辺で軽食を取っていた2人の姉弟と知り合い——

「——面白い技を見せてくれたお礼だ。この俺もコイツで相手をしよう」

(……………俺は剣士じゃねえ!!!)

「気が向いたら来ると良い。……それとこれは餓別だ。使ってみろ」
「(……何これ——つ) て!!なんか見た事ある刀?!?!」

彼に「休み」という言葉は無い。

主に巻き込まれるからである。

にじゅういちわ

朝の冷たい風を浴びて、キラキラと輝く水しぶきを眺めながら、アイトは昨日の新聞を読んでいた。

手に入れた船の上で久々に飲むコーヒーを堪能しながら、記事の見出しを見やる。

無駄に様になっているその姿をアインらが見たら、間違いなくうつとりしている事だろう。そして何かしらの手段を使い、眺めるはずだ。

しかし――

「アイト！何かツコつけてるでザマス？暇ならペーたんの凄さを聞いて欲しいでザマス！」

「やめろ姉貴！あと、ペーたん言うな！」

「や・め・ろ〜〜?!」

「……………騒がしい奴らだ」

「む！おい棺桶！アイトの変わりに、仕方ないから聞かせてやるでザマス！」

「やめろって言ってるだろ姉貴っ!!」

「いいか？まずペーたんは能力者なんザマス！それもただの能力者じゃないザマスよ！ひとたび変身したらどんな奴もペしゅんこなんザマシヨ……ザマス!!」

「ヘーヘーアイスバグが市長に……………」

「——そこまで強いならこの状況を何とかして貰おうか」

「ふんっ！任せるでザマス！こんなのペーたんならヘツチャラザマス！さあペーたんやるザマス！」

「無理に決まってるんだろ！いい加減無茶ぶりやめろよ姉貴!!」

「む・り・く・く!?こんな程度どうとでも出来るのがアチシのペーたんザマス！あ、因みにアチキはアイトのものでザマス！」

「聞いてねえよ！あと所々語尾とか一人称が変わってるんだよ！ただでさえ変なんだから統一しろよ！」

「し・ろ・く・く!!お姉ちゃんに向かつてなんて口の利き方だ!!わあーんあちき可哀そうく〜アイトー！何とか言ってるよー！」

新聞を読んでいるアイトに抱きつくウルティに対して、ため息を交えながらページワン

はミホークに意味ありげな視線を向ける。

「そもそもお前ら2人が戦わなかったら、こうはならなかっただろうに」と。

「……よもや、知らぬ間にこんな事になっていようとはな……」

その視線に若干の気まずさを感じながら、ミホークは愛刀を構え直す。彼の目の前、いや、彼らの目に映るは災厄。

圧倒的な威圧感を持ち、絶対的な強者感を漂わせ、目を合わせるだけでも恐怖で体が動かなくなる。

この場にいるのは、怪物と戦うなんてまっぴらごめん、と現実逃避をするアイト。

目の前の存在に血の気が騒ぐミホーク。

アイトにかーまーえーと、まわりついているうるティ。

それをやめさせようとしているページワン。

それらを見下ろし、島の周辺の船の残骸を見遣る、怪物。

「ウオロロロロ……ウチの船を潰して……ヒック………ただで済むと……オツプ……思
うなよ……!!」

彼について話すならば……海賊として7度の敗北を喫し——海軍、又は敵船に捕まる
こと23回。拷問に次ぐ拷問を受け罪人として生きてきた。

もう一度言うが、たった1人で海軍及び四皇に挑み、捕まること23回。1000度を超える拷問。60回の死刑宣告。

時に首を吊られるも鎖は千切れ、時に断頭台にかけられるもその刃は砕け、串刺しにするも槍は折れ……結果沈めた巨大監獄船の数は18隻……!!

つまり——誰も彼を……殺せなかった……!!

——そしてそれは彼自身も然り……!!

趣味は“自殺”。男の名は——四皇 百獣のカイドウ

“一対一サシでやるならカイドウだろう”口々に人は言う。陸海空……生きとし生ける全てのもの達の中で……“最強の生物”と呼ばれる海賊……!!

その最強生物は、フラフラしながらやって来た。片手に酒瓶と思わしき瓢箪を持っている。巨大な龍の姿の彼は何を思い、やって来たのか。

事の発端はアイトがうるティとページワンの2人と会った時に遡る。

アイトが休憩のために変身を解除して、船の残骸だらけの浜辺を歩いていると、うるティが正面から頭突きをしてきたのである。それも挨拶代わりなぞではなく、一撃必殺クラスのをである。

「何だお前!!アチシらの縄張りに何入ってるでやんすか!!」

「あ、姉貴!やめとけよ!絶対強いってこの人!」

迫るうるティの顔を正面から殴り返し、引き止めようとしていたペータんもアツパーで軽く気絶させた。

そこまでは良かった。大した戦闘にもならず、比較的平和な出来事だった。

ところが、突如アイトらに巨大な斬撃が迫ってきたのだ。

それに気づいたアイトは咄嗟に防御。1人ならば避けたところだが、後ろにはさつき気絶させた者が2人いるので、内心驚きながら防いだ。

(あつぶねえ……!!)

その威力は高くアイトは僅かに押される。海軍中將をも一人で余裕を持つて倒せるようになったアイトだが、それでもなお押されるほどの威力である。

この海が新世界だからと言つても、これほどの斬撃を正確に気付かれる事なく放たれる者はそうそういない。

その斬撃の大きさは、今アイトが滞在している島の火山の半分はあると思えるほどに大きい。

一体誰だとアイトが、斬撃が来た方向を目を凝らして見ると、そこには前世で見た事のある小さな、豆粒ほどに小さな……しかし特徴的な形をした船がいた。

その船に立ち、アイトに攻撃を仕掛けたのは、大きな剣を背負う男。その実力から最強の剣士とまで言われる者。

七武海 鷹の目のミホークである。

アイトが斬撃を防いだのを確認するや否や、すぐさま次の斬撃を放つミホーク。それが受け止める度に威力が上がっている事にアイトは気付いた。

間断なく余裕そうに近づきながら放ってくるあたり、自身の実力を試そうとしているのだ、と。

原作でもミホークは「暇つぶし」と称してクリークの船をぶった斬るなんて事をしたりにしていたし、今回も暇つぶしのだろう。おそらく、覇気でアイト（強い奴）を察知した為に、攻撃してきたのだろう。

流石は海軍内で「辻斬り」と言われるだけはある。

「おいミホークううう!!俺は海兵だ!直ぐに攻撃をやめろオ!!」

大分近くなりはつきりと目で見えるようになったので、アイトは大声でミホークにそう告げる。海軍服を着ればいい話かもしれないが、無人島に飛ばされて数日後には、ボロ雑巾になってしまい着れなくなっていたのである。

その事を見越してガープが着替えを入れていたわけだが、それはそれ。

「……仮に海兵だとして、罪のない一般人に手を挙げてる者を見過ごすつもりは無い」「辻斬りが最もらしいこと言うなっ!お前さんは本来追われる身だろうが!」

ドーセ暇つぶしなんだろ? そうなんだろ? そうだと言いなよ。いや、言っても意味ねえか。などと愚痴りながら、覇気で察知した強い奴（自分）に攻撃をしてくる。

アイトは斬撃を防ぐ度に何度もミホークを説得したが、聞きいられる事はなく、つい

に彼らは島で対峙した。

この島はまるまる全てが火山で出来ており、元々海底にあつた火山が噴火を繰り返すことでここまで大きくなつたのだ。その為、平地は皆無で、木々もない。

その為、この島に住むような物好きは今までいなかった。が、うるテイとペーたんが数日前に船に乗つて漂着し、アイトが来るまでは2人だけであつた。

時々やつて来る海賊らしき船を片つ端から潰すことで、生活に困る事は無かつたようだ。おかげで周りには船の残骸が満載されている。

しかもこの島の真ん中にどデカく鎮座している巨大な火山は、一年に一度の周期で現在でも噴火しており、とても元気な現役火山なのである。

次の噴火までは時間があるのだが、強くなつたアイトと、化け物のような強さを持つミホークが戦つたら果たしてどうなるか。

「——ぐっ!!」

甲高い金属音を発しながらぶつかり合う2人。ミホークから仕掛けてきただけで、アイトが戦う理由はない。しかし、アイト自身、今の自分の実力なら、何処までミホークに通じるのか興味があつた。

何より、動物系の実には意思が宿る。今まで表立って使ってなかったが為に、戦闘を進んで行わなかった。が、発現し、加えて何度も白ひげの皆と己を鍛えてきて、白ひげ自らに鍛えられた事もあり、自分の力を確かめたくなったのである。

つまるところ、戦闘狂へ足を1歩踏み出したのである。

「……！刀を使えるのか」

「本当は槍術使いなんだけどな」

戦いの最中にアイトはビスタから譲り受けた武器・名は無いが頑丈な刀を構える。その姿は様になっていて、素人目からしても隙がない。その中でアイトは精神を落ち着かせ、空気を張り詰めさせていく。

自身から存在感を溢れさせることで、相手の動きを鈍らせる。かつてモモニキから教わった、ちよつとした技術。この威圧感なら多くの相手を縛り付けるだろう。

「——遅い」

「グウツ!!」

が、それはあくまで格下に通用するのであって、同格どころか格上の相手に通用する

はずが無かった。最上大業物12工 黒刀「夜」を振るうミホークは、アイトの威圧感など気にも止めず、あっさりアイトに切り傷を負わせる。

その後はアイトがいよいよ持つて能力を本格的に使い始め、大量の海水を操りながらミホークを攻め立てる。

しかし、数え切れぬほどの巨大な蛇を作っても、島の火山よりも大きな津波を作っても、全ての力を集約しても、ミホークには傷1つ作れなかった。何をやっても火山ごと切られるのである。

次第に削れていく火山は、もう既にどこか赤くなり始めており、ここで亀裂をよく見れば何かが溢れている事に気付けただろう。何せ先走り汁（マグマ）が流れ出し、地響きを起こし始めているのだから。

2人ともお互いのぶつかり合いで大地が震えてるとか、本気のぶつかり合いで熱くなつてるとか考えてるせいで、まるで気付いていない。

そんな中、最初つから全力で挑み続けたアイトだが、遂にはそのとんでもタフネスを持ちながらも、体力は限界寸前となつてしまいその場に膝をついた。

それでも立ち上がったが全身が重く、手足を動かすことさえ辛く感じる。そんな状況でありながらアイトは笑う。その目は決して死んでおらず、むしろ嬉々として敵わぬ強敵を見やる。

その雰囲気は疲れを見せず、不気味さをミホークに見せた。本当は満身創痍だと言うのに、彼は戦意をより昂らせて自身が最も最適とする技を放つ為に構える。

残った力を全て刀に乗せて、真正正銘の懇親の一撃を放とうと狙いを定める。その構えは以前何となく使った技。前世でカツコイイと思い、実現もしやすいと考えた技。

六式や覇気は当然使い、能力も加えてさらに研ぎ澄ます。

そんなアイトのただならぬ雰囲気、ミホークも愛用の刀「夜」を構える。

「
——牙突!!」

その日一番の激突が契機だった。

その火山史上最大規模の大噴火が起こったのは。

「……あれ？アチシ寝て——!?!?」
「……グギャ!?!——何すんだ、あね——ええええ!?!?!?」

気絶していた2人が目を覚ましたのは、大噴火が起きたのと同時だった。

耳が壊れるような、歩くどころか立つ事も出来ず、何が起こってるかも正確には判別できない状況で、2人の目にはキラキラと輝くマグマが。

サラサラと流れてくるマグマと、無骨な火山弾が迫り、もう既に2人の目の前まで迫ってきている。

2人は死を覚悟した。

「——危ねえ!!」

「:……うわああああッ!!——あ」

走馬灯が過ぎった彼らを助けたのは、ご存知アイト……にしては身長が高く武骨な男。声も少し低くなっており、傷だらけで血だらけ。ただならぬ雰囲気の怖い男を見て、会って日が浅い2人は気絶した。

—————

火山が噴火して少し、アイトがうるティとページワンを抱えて歩いていると、獲物で火山弾を振り払っているミホークと再開した。

さつきまで本気で戦っていた2人だが、再開したからと言って再び殺し合うことはなく、連れ立ってどうするかを話始めた時だった。

「気が向いたら来ると良い。……それとこれは餞別だ。使ってみろ」

「(……何これ——つ)て!!なんか見た事ある刀——!?!?」

それは、突然降ってきた。

「——!!」

先に気付いたのはどちらだったか。2人が振り向いた時、彼らの目には巨大な何かが見えていた。その「何か」は異様な空気を纏っているのか、アイトの脳はそれを見ただけで、正体が分からないにも関わらず、警鐘を鳴らした。

生物的な本能が叫んだ。「アレ」は絶対にヤバいと。触れてはならない、災厄に違いないと。

しかし、背を向けて一目散に逃げるといふ選択肢は選べなかった。まだ遠くにある得体の知れない何かから、一瞬でも目を離してはならない、少しの間も見せてはならない、そのように脳が叫んでいたのだ。

さつきまでそこまで乾いてなかった喉が嫌に乾く。ゴクリと喉を鳴らせば、その音の大きさに自分で驚く。

そしてその時。ついにその「何か」の正体が判明した。

彼について話すならば……海賊として7度の敗北を喫し——海軍、又は敵船に捕まること23回。拷問に次ぐ拷問を受け罪人として生きてきた。

もう一度言うが、たった1人で海軍及び四皇に挑み、捕まること23回。1000度を超える拷問。60回の死刑宣告。

時に首を吊られるも鎖は千切れ、時に断頭台にかけられるもその刃は砕け、串刺しにするも槍は折れ……結果沈めた巨大監獄船の数は18隻……!!

つまり——誰も彼を……殺せなかった……!!

——そしてそれは彼自身も然り……!!

趣味は“自殺”——四皇 百獣のカイドウ

白ひげと“一対一でやるならカイドウだろう”口々に人は言う。陸海空……生きとし生ける全ての者達の中で……“最強の生物”と呼ばれる海賊……!!

「——なんでこんな所に、四皇が来てんだよッ……!」

「今日は予期せぬ敵に遭遇する日か………面白い」

苦虫を嘔み潰したような顔の模範を見せるアイトと、不敵に笑うミホーク。両者ともに実力者であることに変わりないが、異なる反応を見せた。

どうするか、どうやってこの状況を打開するか。その事を考えるアイトだが、何も打開策を見つけれない。その事にさらに頭を悩ます一方で、ミホークは何故ここにカイドウがやって来たのかを冷静に分析する。

「…………この島にある残骸、あれの旗に見覚えはあったか？」

「んん？……あ、ま、まっさか……いや、そんなわけ」

嫌な予感がするそばかりに、首をゆっくり回したアイトの目に映ったのは、「ハロー」とでも言つてそうな「百獣」のマーク。

海賊が掲げる旗…海賊旗は相手への死を表すものだが、この時明確に理解出来たと、アイトは後にヒロインズに伝えるとか。

理由はわかった。だが、そんな事をした覚えはない。いや、しでかした奴ならもう想像できてる。——今、両手で小脇に抱えてる姉弟の姉の方だろう。

「…………」（無視）

当の本人は特に気にせず暴れて、弟の制止も聞かずに百獣に喧嘩を売ったのだろう。きつと原作もそんな風にカイドウの元に行ったのだろう。

咄嗟にポケットに突っ込んでおいた新聞を読み始め、周りが騒がしくなるのを聞かないふりをするアイト。

しかし、現実逃避をしたところで何も解決しない。

そして、カイドウにこの世界に来て本当に会うのは、絶対に避けたかったのは事実。安全なところで傍観者として見てられたから好きなのであって、支離滅裂で常に酔っ払っている天災に誰が好き好んで接触しようか。するわけが無い。

「ウオロロロロ……ウチの船を潰して……ヒック………ただで済むと……オツプ………思
うなよ……!!」

その一言が聞こえたと思った時、辺りを光が包んだ。

「熱息（ボロボレス） ツー！」
「ツ!!」

光の後に遅れてやってくる熱を感じた時には、もう眼前に迫ってきていた極太レーザー。それをアイトは2人を抱えたまま跳躍して躲し、ミHOOKはその光線を軽く切り裂く。

すました顔で切ったミHOOKと、避けたアイト。実力差が改めて示された。

その事を知ってか知らずか、恐らく後者だろうが、カイドウはまたもや同じ光線を

放ってきた。

今度はお前がどうかしろ、と視線を送られたアイトはそれ向き合つて――

「アラホラサツサーー!!」

――脇目も振らずに逃げ出した。

――

アイトが全力撤退を決めて逃げ出した時と同時刻、新世界はとある島にて、アインら
アイトの仲良し組が勢ぞろいしていた。

「…本当にこんな所に入りが?」

「ええ、おもちゃの兵隊に教えてもらったのよ」

「おもちゃ?」

上から順にアイン、ヒナ、モネ、である。本部に戻った彼女らは、アインが連れてきた女帝に驚きながらも、ヒナ嬢の言葉を聞いて直ぐに出立したのである。

センゴク元帥も、場所が場所だったために渋々、本つ当に渋々認めてくれた。両手に握りしめられて、粉々になった胃薬の事を彼女らは忘れない。

「——バカラ？ どう？ 上手くターゲットに接触出来た？ ヒナ確認」

「——ええ、リク王の名前を出したら直ぐに着いてきてくれたわ」

一緒に来た中で唯一踊りに精通しているバカラは、単身今回の件で最重要な人物に遭遇していた。彼女は今その情熱的な女性と会い、自分たちの事を信頼してもらうことに骨を折るっていた。

今の彼女は敵に成りうる幹部の一人。もし、しくじる事になれば即刻命を落としかねない行為をしている。

しかしバカラも、彼女らも何ら恐れることなく行動している。

全てはこの国を助ける為に。

かくして、アイトが非常に情けない姿を晒して、人攫いをしてる最中に、彼女らほとても勇ましい事をし始めたのだった。

にじゅうにわ

風は追い風、空は快晴、気温はやや低め。

長い長い「白ひげ生活」を終えて、一体いつぶりなのか分からない、海軍本部・マリ
ンフォードへやって来た。

「おー……ここがアイトが言ってたところデルネス？おつきいーデルネス……！」

「——まあ変なブームの到来かよ……にしても本当にデカいなあ——船が1隻し
か無いけど」

普段なら湾内や湾外の至る所に数十隻はいる軍艦。俺自身、いつもの光景と全く違う
ことに頭をハテナマークに支配される。

おかしいな。今なんかどつかで大戦争やってるとか聞いてないし……。結構意気
揚々と帰ってきて、アイン達を初めとして感動的な再会が出来ると思ってたのに。

めっちゃ歓迎されて三日三晩歓迎会開かれると思ってたのに。骨みたいなやつとか
さ、頭が長い人とかも居ない。あの頼れる姉貴・ヒナ嬢さえもない。

結構シヨックである。

いや、まあ、別に？

俺全然期待とかしてなかったし？…海兵って真面目な人間だから、パーティーなんか開かないし？何も思っていないけどね？うん。

なんなら手元のうるティを見て、アインとかが殺意の波動とか送ってこないんだし、いいんだけどさ。もうこの時点でスタイル抜群だからなうるティ。

俺の誕生日パーティー？そんなもの開かれた覚えはないよ。
オヤジどもの愚痴大会なら覚えてるけどね。

目頭が暑くなってきた俺は冷やすために1度海に顔を入れる。うるペーらを水に付けないように、手腕だけ能力を使っておく。

細かく能力を使ってるし、俺は別に泣いてない。泣いてるやつが冷静に能力を使えるわけが無い。そうしたらそうだ。

そうなのだ。そういうことにしといてくれ。

考えるのをやめて少しして、俺たちは無事にマリンプォードに足をつける。

「近くで見るとよりおつきいーデルネス！でも、ペーさんの器はもつと大きいデルネス
！」

「勝手にデカくするなよ……」

「むっ！ペーさんをそんな弱気な男に育て覚えないうデルネス！そこになおれデルネス
！」

「いたたたッ！ちよ、何すんだよ姉貴！噛み付くなつて！アイトさん、助けてくれよ！」

もはや見慣れたうるペーの絡み合い。姉弟の仲が良いつてのは、いいことだな。微笑
ましいこと限りなし。なんかペーさんが助けを求めているが、そんな事はどうでもいい。

「そんな事じゃねえよ！——あーもう！姉貴！痛いから口離せて！」

「ほんふらいのほとりほえられなへれば、うふわはひっほいままデルネス！」

「なんで変な語尾だけ喋れんだ!?あと、俺は器ちっさくていいんだよ！姉貴の都合で変
わるもんじゃねえんだつて！」

歩きながらもアクロバティックにじゃれ合う2人。なんと仲睦まじいものでは無い
か。これならいくらでも見てられる。むしろ、話の終着点が気になるまでである。

加えて、うるティに預けていたでんでん虫とか持ち物を俺にしつかり渡してからじゃ
れている。流石は出来る姉だ。

とはいえ、風呂と飯は必要だ。だつてここんとこずーつと大した物を食つてないからな。特に風呂だ。暫く入れてないから結構辛たん。

「2人とも、このまま風呂か飯行くけどどつち先にする?」

「!わあーい!お風呂だアー!アチキ、アイトと入るー!——あ、もちろんペーたんも一緒デルネスよ?」

「男女別だろ?」

「べ・つ、だとお!?なんて器がちっさい弟なんだペーたん!うう、ペーたんのせいで一人寂しく入るんだ……は!もしかしてペーたん照れてる?仕方ないデルネスねえ!しようがないから一緒に入るデルネス!」

「だから入らねえつつつてんだろ?!!!」

「え、風呂嫌いか?ペーたん」

「そうじゃねえよ!なんでアイトさんまでのるんだ!疲れるんだよ!」

うーん、このキレッキレなツツコミ。思わずお礼言いたくなるくらいだな。実に素晴らしい。

にしても、あのヘンテコな船。さつきから敵意を感じ——!!

「うお!?!」

「きやあ?!」

「……いきなり覇気込みでの攻撃か。性格悪そうだなあ船長は」
普通の船とは異なり、巨大な2匹の蛇（モノホン）が船の先頭に着いている不思議な船。船の雰囲気はどこか前世の中国感を滲ませており、強者の雰囲気も感じる。

まあ、九蛇海賊団だろうけど。それ以外有り得んだろうし。

いや、なんで居る？

そんな事少しも聞いてないんだが。

そんなでもってなんで周りに海兵が居ないのか、七武海だからないと思うが……まさか海軍本部を落としたのか？

いやいや、まさか。

というか、本部の建物の後ろの方にめっちゃ気配感じるな……。

……なんで後ろにいんのよ。

「貴様ら！何故ここにいる！」

「ありがとう！あなたのお陰で俺は開放された！」

「なんだお前ら！アチキの邪魔する気か!？」

うーん、三者三様ってまさにこの事。

でもって七武海である以上、海軍に対して攻撃はNGなんだが……まあ、あの女帝だからな。大方、海軍と取引でもしてここに停泊してんだろうが。

目的は不明だな。

「それ以上近づけばタダでは済まさないぞ！」

「なんだと!?!いきなり攻撃してきて何様デルネス！」

「姉貴は落ち着けて！」

目的ねえ……。原作でなんかイベントあったのかなあ。まだ明かされていない新事実とか。俺が覚えてないとか。

そういうや頂上戦争の時に、センゴクさんが「あの女は強い」的な事言ってたな。センゴクさんが言うほどってことは、余程強いんだろうけど。

七武海って基本的にルフィに倒されたりするし、あんま強いイメージないんだよなあ。一部が強いだけって思ってたんだけど。ミホークとか筆頭に。

「そういやあの人から貰った刀……これどう見ても「時雨」なんだよなあ。確かたしぎちゃんが使ってたよな、これ。せつかく貰ったけど、相応しい人に渡せばミホークも怒らんのだろ。」

次会うときはワインかなんか持ってかないと、カイドウ押し付けたし怒られそうだけど。あれは仕方がない。だってカイドウだもの。」

「……………誰じゃ一体……」

「!」

「?」

「?」

「わらわの通り道に……………」

その女性は美しかった。どこまでも気高く、どこまでも優雅で、どこまでも輝く女性だった。その美しさは留まるところを知らず、老若男女、誰彼構わず魅了する。

「小娘と!!」

「ギャン!!」

「小童を置いたのは!!」

「ぐえ!?!」

コツコツと静かに、時に騒がしく、されど上品に歩くその姿はまさに絶世の美女。積荷を寄越せと言うだけで、幾らでも渡してもらえる程の美女。

「す、すまない。俺の責任で……」

「お気をつけなさい……」

女性として生まれた中で、世界で最も綺麗と言われても何ら不思議でない姿をするその女性の名は……

“アマゾン・リリー皇帝”にして “九蛇海賊団船長” であり “王下七武海” が一角！

“女帝” ボア・ハンコック!!

その姿を見たものは、たちまち石になってしまおう……主に下半身だと思う。

「一体なんの騒ぎじゃ」

「す、すみません蛇姫様！不埒な者が居たものですから……」

「ふむ……」

その考える所作ひとつを取っても美しい——

「「——じゃねえよ!!」」

あつぶねえ！なんか知らないうちに見とれてたわ！ヤバいなこの女。まじで危険だわ。こんな最強の生物だろ！ある意味！

「てめえ！今うちのペーたん（姉貴）を蹴り飛ばしたな!？」

「…？なんじゃ貴様らは」

怒り狂って今にも飛びかかりそうな2人を何とか抑える。普段わちやわちやしてる2人も能力者。それも動物系の古代種。力が半端ないが、抑えられない訳では無い。

「落ち着けよ2人も。……で、何でこんな所に七武海である貴方が?」

「ある人に会いに来たのじゃ。貴様らに要はない、さっさと失せろ」

「わあーお、流石は女帝で。その要ってなんですか?」

「だから貴様には関係ない。『アイト』という本部海兵に会いに来たのじゃ」

「………ん?俺に?」

少しの間を開けて、戦闘のBGMが流れ出した。

ハンコックのメロメロ!

しかしアイトに効果はなかった！

アイトとハンコックが殴り合いの喧嘩をしている時と同じくして、新世界はドレスローザでも動きがあった。

「——一体どうやってドフラミンゴを落とす気？ 彼はちよつとやそつとの事で動じるよ
うな男ではないわ」

厳しい目線でそう告げるのは、このドレスローザを支配する七武海・ドンキホーテ・ドフラミンゴの部下の一人、ヴァイオレット。

その正体はかつてこの国を治めていた王族・リク家の王女、ヴィオラ。悪魔の実『ギロギロの実』を食べた、千里眼の持ち主である。

「何も直ぐに落とせるなんて言つてないわ。彼の支配は徹底してるし、根深いところがある。だから、数年がかりで解決するつもりよ」

その強気な瞳に真つ向から言い返したのは、我らがヒロイン・アインである。頭の中では常に愛しのアイトのことばかり考えている彼女だが、今は脳のリソースのうち、30分の1をドレスローザに割いていた。

彼女の目的は、尊敬している姉的存在、ヒナ嬢から聞いたドレスローザの真相を解明し、この国を元の平穏な国に戻す事。

その為にセンゴク元帥に無理を言つてやつてきたのだ。昇任試験やら、配属やらを一旦ストップしてもらつているため、長居はできない。だからこそ、今できることをしようとしている。

「この国を救うための方法は一つ。ドンキホーテ・ドフラミンゴを初めとする海賊団を七武海から追い落とす事。その鍵となるのが、貴方達王族と、オモチャ達。そしてこの国の地下にあるという港。これらを片付けるにはどうしても時間がかかるの」

落ち着いた声音で諭すのは、身も心も冷やしてくれる魔性の女・モネ。その実力は海軍内で高く評価されており、時期将校筆頭だつたりする。冷静な頭脳も評価材料の一つだ。

「だから今出来ることは、証拠を集める事。下手に動くよりも地道に進むしかないわ。今は不可能でも時間が経てば不可能ではない可能性はある。どうか私たちを信じてくれるかしら」

この国では少し珍しいかもしれない、そうでないかもしれない。褐色肌の女性海兵バカラ。踊り子として近づき、ヴァイオレットをここまで連れて来た。場所はとある倉庫。何時でも身を隠せるように逃げ道も多く用意された場所だ。

「この国の真相を聞かされた以上、黙つてることなんて出来ないの。私達を利用する形でも何でもいいから、一緒にこの国を救わせて欲しいの。ヒナ懇願」

ピシツとした姿勢を崩すことなく綺麗なお辞儀をする。その姿を見て他の女性達も頭を下げる。それは彼女を王族としてか、手を組むためか。恐らく両方だろう。

海軍本部 “大佐” 黒檻のヒナ。

ここに来る途中に形だけでも昇進した、真正正銘の強者である。

—————

「……本当に彼の名前を出して良かったの？」

「いいのよ。レベツカちゃんとはいえ、ドフラミンゴの動きが読めない以上、隠せることは隠した方がいいわ——それに、これでアイトもここに来て一緒に動けるし」

「それが本音ね……そんなに好きなの？」

ある程度作戦を複雑に立て、ひとまず数年がかりで進めることが決まった。この事をレベツカに伝える事で、少しでも彼女に活力を出してもらおう。

自暴自棄になる事など有り得ないと思うが、少しでも希望は伝えたいと思うし、伝えるべきだと思ったのだ。

加えてアイトの名前だけを出すことで、万が一にもこちらの陣営がバレないようにした。それだけドフラミンゴが危険な存在だと言うことだ。

奴を警戒して損することは一切ない。

それは置いておくとして、アイン達がアイトという男性に好意を抱いてるのをヴァイオレットは散々聞かされた。が、ここまで美人な彼女たちが惚れるのは、女性としてなかなか信じ難い話だ。

「一度会ってみる？きつと気に入るわ」

「…ええ、機会があれば是非。でも、ライバルが増えるだけかもしれないわよ？」

「？何が問題なの？好きな人の事をよく見てくれるって私は嬉しいわ」

心底不思議そうに首を傾げて、さも当然と言うかのようにアインは話す。胸の大きさがどうのと言ってる癖に、周りには大きな人ばかりな気もする。

何でなのかは知らないけど、もしかしたら意外と頭は良くないのかもしれない。

その頃、バカラは踊り子として本格的な潜入を始めていた。バカラならばバレる事は無いだろう、という事で立派に踊り子として活動している。

ドレスローザに来て数ヶ月経つが、これからも彼女はここで潜入を続けるらしい。期限はドレスローザを解決するまで。

長い間拘束される訳だが、アイトもこつちに来る事になる以上、そこまで不満はない。

バカラの能力「ラキラキの美」は乱用しない限り、他者に気付かれる事は少ない。なにせ不運と幸運は自然と起こるものだからだ。

そうして少しずつ有名になっている頃――

「貴方…何故ここに？」

「決まってるでしょう？ 観光よ」

「フッフッフッフッフッフ…」

――ヒナ嬢がステューシーとド派手な戦闘を行っていた。

それもドフラミンゴを巻き込んで。

—————

「ドリアー!!」

海軍本部マリルフォード。

それは世界中の海賊たちを初めとする、犯罪者を取り締まる海兵達の本拠地にして総本山。

船が1隻しかないという、なんなら建物の裏側に集結している、変な状態の中、ハンコックとアイトは終わりの見えない戦いをしていた。

「イケー！カッコイイーデルネスウ〜！ほら！ペーたんも一緒に応援するデルネス！フレツフレツアイト！フレツフレツアイト！ワア〜！」

「するわけねえだろ！……応援はするけど！」

互いが互いの実力を認識している為に、なかなか決着が訪れずもう戦い始めて数時間が経とうとしていた。

「ハア……ハア……全くしつこい男じゃ！」

マリンフォードの広場を破壊しながら戦って数時間。実力伯仲の二人は決して押される事なくぶつかり合っていた。

本来なら騒ぎを聞きつけて周りに人だかりが出来そうなものだが、あいにく誰もやってこない。本部の裏手にいるのは間違いないが、何故かここまで派手に戦っても来ない。

「想像以上に強えなあ、七武海さんよお！」

「流石はアインが気に入っただけの事はある……！」

互いが互いの実力を認め、決して侮ることなく繰り広げる。アイトは知らないが、原作でのハンコックの新たな懸賞金はバカ高い。

登場時も黒ひげ海賊団や海軍との抗争を乗り切るほど。現時点でも中将以上に強いのは確定であった。

「いい加減決めてやる……!!」

「……! やれるならな!」

しかし、海軍の中将が――

「何を……」

全員同列などという――

「やっている!」

「!?!」

――ことは無かった。

「全く! アイト! 帰って早々何事だ!」

「す、すみません……」

2人の間に割って入り、かつ一撃ずつ加えて下がらせた男、海軍本部中将・モモンガ。
通称モモニキ。

「貴様もだハンコック! 限度という言葉を知らんのか!」

「フンツ……妾は協定通りに襲っただけだ」

(いや、協定通りに襲ったって何だよ。俺九蛇海賊団に売られたのか?)

「……まあいい。ひとまずアイトは………アイト達は風呂でも飯でも済ませてこい。ハンコック、貴様は自由にしろ。戦闘以外でな」

頼れる男モモニキ。百戦錬磨の剣士にして、アイトの世話係。ついこの前中将に昇進して、これが初仕事。

ついでにオニグモはゼファーと一緒に航海中につき、モモニキはこここのところ寂しかったらしい。

—————

はい、どうも皆さんアイトです。

本部に帰ってきて少し経って聞きました。なんでもアイン達がドラミンゴの所に居るらしいね。

普通に心配なんだけど俺個人のお願いで行けるわけではないな……まあ、センゴクさんに頼めば行かしてくれそうだけど。

よし、頼んでこよう。

結果 新世界に配属ならOKとの事。

新世界でしばらく生活してたのなら行けるよな？って軽い感じで言われました。

無理では？あそこそんな甘いところではないんだか……と言うかビッグママ戦線に送るって言われた。

死ぬのではこれ。

なんでドレスローザ行きたいって言ったら、ビッグママ戦線に送られるのだろうか。俺っちまだ大佐になって数日どころか1日なんですけど？

こういう時に頼れるゼファー先生はいねえしよお……あの人肝心な時にいねえんだから、全く頼りにならねえな。

面と向かって言ったらぶん殴られそう。だから言うんだけどねっ！バレなきやいいのさ〜」バレなきやいいのさ〜」ポンポンバカボンバカボンボンっ！

「アイトー！さつきから変な顔して何してるデルネス？」

「なんか、すっげえ馬鹿な顔してるよな」

「ば・か、だとお!?!アイトのどこか馬鹿面だ言ってみろ愛しのペーたん!」
「だからペーたんやめろ!」

なんか後ろが騒がしいな。うるペー達は賑やかでいいなあ。

そして、長い月日が過ぎていった。

将校

にじゅうさんわ

みんなと再開してしばらく経ったある日。

俺、アイトは白ひげのおやつさんのところに顔を出して、飲めや歌えやのどんちゃん騒ぎをして帰還していた。

久々に会ったみんなは変わらず俺を歓迎してくれて、これに関してはものすんごく嬉しかったし楽しかった。

ジンベエにも初めて会って色んな話をした。最初こそ警戒されたが、お互い話してるうちに気が合ってきて、今そのジンベエに送って貰ってるところだ。

ただ、

対ビッグ・ママ戦線の一つに配属されてからと言うものの、ほぼ毎日のように戦闘である。過労死目前だぜえ？

幸いなのは、ビッグ・ママ戦線とは言ってもビッグ・ママ本人との戦いがあるわけではないと言うこと、かな。その代わりとしては十分すぎるくらいに化け物が押し寄せてくるがね（白目）

海賊は普通海軍を滅ぼすことにやる気は出さないものだが、この基地を踏破することで食材の輸送路が良くなるらしい。そのために幹部はもちろん、傘下やビッグ・ママと交渉でもするのか、他の海賊までやってくるがね。ははは、アインとモネがいなかったら死んでたかも。

ここのところこの二人の有難みが増しますます増してるのよ。炊事洗濯とかではなく、サポートの面でマジで助かりすぎる。アインが放った斬撃で船が消えたり、モネの能力で瞬間広範囲制圧とか、君ら有能すぎて僕ちゃん出番がない（最高）

そんなわけでゆるゆるダラダラと生活している俺だが、この度アラバスタに急航することになった。だからこのまま船と合流する予定だ。

いや、まさかこんな時間経つと思つてなくて、ビビちゃんからお怒りの電話をもらったのよね。なんか新聞でも雨が降らないとかで話題になってきてたし、砂ワニが活動を開始したのかな？

まだ年度的にフオローできるはずだし、そのことも踏まえて急がねば。

この前ドレスローザに行つて、その足で白ひげの親父に行つたこともあつて、相も変わらず休み少なく働いている（と見えるはず）

前半に行けばだいぶ敵も弱くなるはずだし早く行きたいもんだ。

「…なんじゃ、ため息なぞついて」

「ジンベエ……いや、楽しい時間はあつという間だと思つてさ。そういや、火拳つて知ってるか？」

実はこの前エースが新聞に載つてたんだよね。七武海入るのを拒んだとかで話題になつてたな。ガープさんなんか結構機嫌悪かったし。

他にも赤髪のシャンクスが音楽の島を落としたとか、前世じゃ聞いたこともない事が

起こってる。やっぱシャンクスも海賊っちゃあ海賊なんだよな。

それは置いておくとして、今回俺はアラバスタに行く前にいくつか仕事があるんだよな。

そりや前半行きたいです！って言うって「いいよ！」なんて言われるわけないのは分かるんだが。

だとしても億超海賊団×5の同盟の討伐って凶悪すぎんか？いくら艦隊を用意されたからって、かなり激しい戦いになるよなあ。

しかも噂じゃそこにエースが加わるとかなんとか。CPから受け取った情報だから、信憑性はちよつと疑わしい。

彼女の事は信頼してるけどさ。

兎にも角にも急がなくなっちゃな。

—————

「よいしよつ…と！サンキューなジンベエ！また一緒に旅しようぜ！今度は俺が乗せてやるよー！」

「ワハハハハ…！では、楽しみに待ってとるとしようか！」

迎えに来ていた軍艦に飛び乗り、運んでくれたジンベエに手を振って別れを告げる。

ホント気の良い奴だよ。将来麦わら帽子の仲間になるのか知らないが、あの性格なら主人公とか滅茶苦茶好きそうだなあって思う。

出来れば俺の味方になってくれると嬉しいが……。まあ、それは置いておこう。

アインと他愛ない会話をしながら指揮官室に向かう。所々で綺麗な生足キツクを食いつつ、チラチラ見えるものを堪能する。

実に平和だ。素晴らしい。

ろ。う。が、部屋から2つか3つの気配を感じるから、恐らくあの二人がやって来ているんだ

「ね、アイト」

「ん？」

「たしぎちゃんから連絡があつてね？また剣を教えて欲しいって」

「おおー！それじゃ本部で少し泊まっていくか」

「ええ……あ、貴方は何もしなくていいわよ？私が相手をしておくから」

「……ん？あの、アイン？なんか怒ってる？」

「べつにー？いい加減本気で政府に売ろうか考えてるだけよ」

「うっそいいいい!!?!?」

なんかアインがめっちゃ怒ってる上に、政府に売られるとかどういふことよ！オレマジデナニシタ!?

少し濃いめの青色の髪を靡かせながら先に部屋へと入っていったアイン。アインが怒る時は大抵俺がやらかしてると時なんだが、今回怒ってる理由は本気で分かん。

あれか？親父に逢いに行く前日、ドレスローザを出発した時に「アインは肉がなあ……」ってレベツカちゃんに愚痴ったあれか!?

あのホントにちよつとした会話を聞いてたって言うのか!?

いやいや！まさかまさか！………だってレベツカちゃんと話してたら思っちゃやうよ。

ちやんと言った後に「それでも、アインは——」ってフォローしたんだが？その効果が無かったって事か!?

まじでなんなのよオ………助けてくれよジンベエ親分………あ、親父はいいや。

ジンベエの事を思い出してたら突如脳内に現れるオッサンぞ。特に親父のインパクトがすごい。

一瞬でも頭の中に浮かべた俺が悪いから、場違い感出す前にどうぞご退席下さいまし。

——なんか頭の中でぶん殴られた気がする。

まあ、いいか。

「あら…随分と遅かったわね。アインならそこでやけコーヒーしてるわよ?」

「……早かったな」

「アイト、アインに何かしたの?」

「モネ、それは俺が聞きたいよ」

「女性を待たせるなんて……セクハラです」

「カリファも元氣そうだな」

部屋に入ると隅でコーヒーをガブ飲みしてるアインと、書類を持って立っていたモネ、椅子に姿勢正して座ってるカリファ。

そして今まで何度も俺を殺して来た女性。

「政府からの要請よ——まあ破いたけどね」

世界の闇で帝王とも呼ばれる、歓楽街の女王がビリビリに破いた紙を持って妖艶にワインを飲んでいた。

なんでこの面子が揃ってるのか、それは置いておいても良いだろう。長い月日をかけて殺りあつた結果だと思つてくれ。

あと、

「仕事中に呑むなよ——ステューシー」

「ウフフ…良いじゃない私達の仲なんだし」

雷が落ちるようには見えない良い天気だったが、突如として艦隊は荒波に揉まれた。た。

ジンベエ大丈夫かな？

—————

新世界はとある島。エレジア近海の島を目指して航行中の我が艦隊。

軍艦総数7隻、帆船10隻という大艦隊だ。

乗組員も練度が高く数が多い。

なにせ千人乗り込める軍艦一つにつき、一人の本部大佐が乗ってる。

バスターコールにも見劣りしない、それほどの圧倒的な戦力である。そんな艦隊を率

いている俺だが……

「野郎ども！戦闘準備だア!!」

『オオ!!』

「……ヤル気のようなね。全艦、鶴翼の陣を張りなさい!」

『了解!!』

「貴方達は私に続いて!」

『ハツ!!』

……目の前には赤髪海賊団が殺る気満々でいる。

いや、ホントに何で温厚なはずの赤髪海賊団と戦う必要が有るんだよ。おかしいな。おかしすぎないか?

俺なんか逆鱗にでも触れた事はしてないだろう?だって遭遇してわずか3分だもん。

その時間だけで俺以外の皆は戦闘準備完了したっばいけどな。俺?俺は指揮官としてどっしり構えとくよ。さあ逃げよう。

まさか、今回の討伐対象の同盟に関わっていないよな?

「フフフ……まさか彼らが仕掛けてくるとはね」

「……………怪しいな?」

「あら、裏切りは女のアクセサリ」じゃなかったかしら?——もつとも裏切る気

は微塵もないけど」

怪しさしかないなあ……。俺が前に言ってた言葉を言うあたり、本当に裏切ったわけじゃ無さそうだが、はてさてどうすんのよ。

赤髪海賊団って言ったなら知らない奴はいないレベルの大海賊だ。今現在の四皇の一人かどうかは忘れちまったが、いずれ間違いなくなる男だ。

正直戦いたくない。

まあ、俺の能力を使えば海戦で負ける事はないだろうが。

「アイト、攻撃の合図を！」

「やるしかないわよ？」

「はあ……。聞けえ！赤髪海賊団っ！俺は海軍本部准将・漂流巡回（アルゴリズム）のアイトだ！」

「……。相変わらず変ね」

「……。どこまでも変よね」

「……。ダサ……。くはないわね」

「……。セクハラです」

ウルセエ!!!俺だっって好きで名乗ってないわ！誰だよこんな変な二つ名よこした奴！これなら前の棒雀の方が良かったわ！

「この前ゼファー先生なんか「……黒腕いるか？」って言ってきたからな!?メチャクチャ可哀な目をされたんだからな!？」

心なしか赤髪海賊団からも哀れみの目を向けられてるし!

「とにかく!俺たちはお前達と交戦するつもりはない!互いに手を引こうじゃないか!

……もしそれが出来ないなら…… 龍燐(ウツセミ)!

「つーコイツは……」

「おいおい……!」

俺は能力を使い赤髪海賊団の周囲を囲むように巨大な水竜を8体生み出す。大ききさとしては、一体一体が俺の獣型の時よりも小さい。

それでも馬鹿でかいからな。軍艦の3倍くらいの長さだし。

牽制としては十分だろう、これで話ぐらいは聞いてくれる――

――なんてことは無かった。

――

「俺達を…甘く見るな！」

「！」

お頭がそう言った瞬間に、俺以外の仲間たちが水で作られた龍を消し飛ばす。その事に向こうの指揮官は驚いたようだが…その驚きは実力に対するものでは無いようだ。

どちらかと言えば、「なぜ戦う？」という意味を含んでる顔だ。俺としても無駄な事は副船長として止めるべき何だろうが、今回はこの海兵達の目的が分からない以上、どうしようもない。

こここの近くにはエレジアがある。そう、あのエレジアがあるんだ。万が一、億が一でもウタに危害を追わせやしない。

置いていくことしか出来なかった俺達は、せめて外敵から少しでも守ることしか出来ない。

だか、もしコイツらがエレジアに行くのであれば、それは——

「——俺らは数で劣ってるんだ。氣い引きしめて行くぞ！」

『オオ!!!』

「ベックマン！船を頼…!!？」

「なっ!?!」

お頭が腕の立つヤソップ達を引き連れて乗り込もうとした時、突如俺の体は海に投げ

出されていた。

船の上にいるにも関わらず、下から海水が押し上げてきていた。

これはどう言う事だ？

一体なぜ俺は宙を飛んでいる？

「コレの予測すら出来ないとは………買い被っていたのかもしれないな」

完全に虚をつかれた俺達の耳に響いた、「ガツカリだ」と言うような声。空は曇ってはいるが、雨は降っていない。それなのに船の甲板はずぶ濡れで、噴水のように下から吹き出し続けている。

その水の中から現れたのは、他でもない、海軍の指揮官だった。

その立ち振る舞いや、覇気から伝わる威圧感。

どう考えても強敵だ。

—————

「ウオオオ……オオ?!?」

「ラツキー・ルウ!？」

巨漢の男が高速回転をしながら突っ込むが、海軍本部大佐・白雪姫（シラユキ）のモネの雪に包まれて海に投げ飛ばされる。

それを見た仲間がフォローに入りつつ、目の前の雪人間に警戒をする。　　“ハウリング
“ガブはラツキー・ルウの攻撃を、あつさり受け流したモネを警戒する。

対するモネも油断せずに能力を発動し続ける。赤髪海賊団から見て、右翼側で起こる
2対1の戦いは、周囲の部下を巻き込み拡大し続けている。

一方、その反対側、左翼では2本の双剣を扱い、六式を駆使して縦横無尽に動き回りながら戦うのは、同じく海軍本部大佐・刹剣（セツケン）のアイン。

双剣だけでなく脚を使つての斬撃・嵐脚も使うため、実質四刀流の彼女の攻撃を前に、ビルディング・スネイクやライム・ジュースらは苦戦を強いられていた。

どう考えても大佐の実力では無い彼女らを前にして、赤髪海賊団とは言えど攻めあぐねていた。ただでさえ数で劣っているのだ、状況は常に不利に決まっている。

それを打破する為にも一刻も早く目の前の大佐を撃破しなくてはならないが、それは海軍側も同じこと。

赤髪海賊団の実力はよく知られており、個々の実力が平均的に高い為一切の油断がでない。その為海兵1人1人の警戒心も高い。

その事に赤髪海賊団のホンゴウもまたどちらの救援に行くか判断がしきれない。幹部として1人で多くの海兵を相手取るのが良いか、指揮官クラスの撃破を助けるか。

「今日も平和で… 世界が優しくあります様に!!!」—— 直角閃光 〃ボーン空割（ソワール）〃!!」

「モ〜サ〜モ〜サ〜!!」

迷ってる暇はあまり無い。目の前のこの2人もまた厄介な相手だ。油断せずに戦わねば退ける事は難しい。

だが、それよりも気になるのは、あの奇妙な2人組だった。

「…クソツ…ちよこまかと」

赤髪海賊団の狙撃手、チエイサーとも言われるヤソツプは狙った標的に当たらない事に苛立つ。

狙った獲物は外さないのが自分の最大の武器だと言うのに、目の前の女は紙のようになつて交わし続ける。そうかと思えば、高速で接近もしてくる。

諜報員、それも世界屈指の実力を持つステューシーが相手となつては、さすがに狙撃は難しいところがあつた。

ステューシーもその事を理解して、確実に仕留めるべく距離を詰める。

明確に迫る危険にヤソツプは狙撃場所を何度も変えながら、追い詰められないように立ち回る。

「全く、一人一人が強いなんて……厄介な事この上ないわ」

「そりやお前らもだろう！」

まるで遊んでるかのよう飛び回り攻撃をしてくるステューシーは、楽しくワルツをしているようで、普通に腹立たしい。

そして特に厄介なのが――

――船を飛び回りながら戦うのが、自分たち以外もいるということだ。

カリファはステューシー程の実力は残念ながら身につけていない。決して鍛錬を怠つたことは無いが、それでもまだまだ差がある。

彼はその事を気にする事はない、人それぞれ得手不得手があるのだから、と優しく接してくれたが、それで向上心が無くなる事は有り得ない。

むしろ、より厳しく鍛えるようになった。

そうしていく中で、船大工たちの秘書として働きながらも、ステューシーと鍛錬を積むことで、格上の倒し方の1つとして連携を高める事が出来た。

「動けな!?……グワツ!!」

「ウキキツ!!」

六式の1つ、鉄塊は自身の体を鉄のように固くするように、慣れれば触れた相手の動きを止める事が出来る。

CP9として出来るのはカリファだけであり、これを身につけた事で随分と敵を狩りやすくなった。

今もボンク・パンチとモンスターの動きを止め、ステューシーに攻撃をしてもらった。これがカリファなりの戦い方だ。

攻撃力こそ高くないが、こうした搦手で抑え込む。

そうして戦う諜報員の2人は顔を隠していた。

正体を隠さなくても良いかも知れないが、この世界どんな所で繋がってるかは分からない。

まして自分は船大工の街で活動をしているのだ。万が一を想定して仮面を被りなが

ら戦うのは、決して悪手では無い。

方や新世界の闇の帝王の1人で、方や造船島の秘書のこの2人。

この2人が戦う場所から少し離れて、1人の槍使いが敵の核たる2人と激突していた。

「水・砕・牙ツ!! (スイ・サイ・ガ)」

「ウオオ!!」

荒れる海の上で海水を纏いながら槍で刺突してくる男、海軍本部准将・漂流巡回（アルゴリズム）のアイト。

薙刀のような先端と、3尺槍のような先端をつけた槍を振るい、海戦に置いて無類の強さを誇る。

今もシャンクスと切り結びながら、何度も船を沈めようとジンベエに教わった「槍波」という技をぶつけるが、副船長ベン・ベックマンに防がれている。

開戦の合図となったアイトの貫通式で出来た船底の穴を塞ぎ、その後の攻撃も防いでいる。

アイトはシャンクスかベックマンがいなければ直ぐに沈められたなあ、と考えながら目の前の燃える剣士を見やる。

正直、海戦じゃなければ一方的に殺られただろう。殺られっぱなしになるつもりは無いが、十中八九負ける事は想像に難しくない。

しかし、得意の海戦でも押し切れていないのは事実。互いに決め手を欠き膠着状態になっている。

アイトとしては直ぐにでも終わらせたい。その為には此方が下手に出ても良い。だが、いきなりやめるなんて事は誰も納得してくれない。

何故かは分からないが、赤髪海賊団が聞く耳を持つてくれないのも事実。なら聞く耳を持つてくれるようにするにはどうすべきか。

——1つだけ思いついたが、コレをやるのはかなり疲れるので、出来ればあまりやりたくない。

この後に本命である、億超同盟を捕えなきやならないからだ。

決してビビちゃんが怖いから、待たせすぎてるのに、さらに待たせた時が怖いのでは無い。

ないったらない。

—————

「ここまでだ………終末期（ワルキューレ）」

そう敵の海兵が言うと、海水面がどんどん下がっていく感覚がやって来る。一体何をやったと敵を見れば、そいつの槍の先端に球体状に続々と集まっているのが分かる。

目に映ったのは、巨大な水玉。

黒雲の下にありながら、水晶のように光っている。

味方には勝利を告げ、敵には絶望を与える。

「仕留めに入ったわね」

「皆！ 衝撃に備えて！」

「ちよつと待て待て待て!!」

「あんなの……どうすりゃ……」

まずい。デカい、デカすぎる……！もしあの巨大な水玉が降ってきたら、いくら俺でも船を守りきれない。

大きさで言えばそこらの島よりデカいのではないか……。なにせ海面がどんどん下がっていくのを感じるほどだ。

一体どうすれば――

一閃

――気づいた頃にはシャンクスが真つ二つに切り裂いていた。

「ダツハツハツハツハ！お前いける口だなあー！」

「ワツハツハツハツハ！お前の方こそー！」

肩を組んで酒を飲む互いのトップ。

さつきまで本気の殺し合いをしていた海賊と海軍は、アイトの必殺技をシャンクスが真つ二つにした事で停戦となった。

ただでさえ島より大きい水玉が目の前に現れて、次の瞬間にはそれを真つ二つに切っていた。その変化についていけず、混乱し一周まわって静かになった所で、アイトが停戦を申し込んだ。

そうしてお互いの事を話したところ、お互いに勘違いをしていた事が分かった。

その事について話していたら、ステューシーが水のようにワインを飲んでいた事に目をつけたシャンクスが「よし！宴にするか！」と言った結果、あれよあれよという間に酒宴が始まったのだった。

「プハッ！にしても凄いなあアイトは……何人の彼女がいるんだ？ウチのベックマンよ
り手が早いんじゃないかねえか？」

「いやいや、流石に島に着く度に家庭を作る男には」

「家庭は持つてねえよ」

「で、子供は何人だ？」

「話聞いてたか!？」

「もし出来たら教えろよ？」

「お頭も何言つてんだ……俺らにやアイツがいるだろうに」

「アイツ？」

しつかり者でちゃらんぽらんなプレイボーイ、ベン・ベックマンがこぼした「アイツ」という言葉。その言葉を聞いた瞬間、赤髪海賊団は途端に表情が暗くなった。

アイトが詳しく聞けば、なんでも近くのエレジアに娘がいるんだとか。なんでそんな所にと聞けば、「そうするしか……」と苦しそうに言う。

これ以上聞くのは野暮かもしれないが、それでも気になったアイトはズカズカ進む。

そうして聞き出せたのは「トットムジカ」という魔王と「ウタ」という娘の話。

とても可愛らしくて、とても歌が上手くて、とても優しい子だということ。

その子の元に封印されていた「トットムジカ」がやって来てしまったこと。

それを「ウタ」が読んでしまい、魔王が現れ赤髪海賊団でも止めきれなかったこと。

「ウタ」が幼かったから、何とかあったが、次はどうなるか分からないとのこと。

その話の全てを聞いたアイトはこう言った。

「アインよろしく」

モドモドの實の能力者である彼女の前に、トットムジカは消え去ったのだった。

その呆気なさに赤髪海賊団は顎を外し、重い話にアイトは「ほへえー」と驚き、問題が無くなった「ウタ」はアインに懐きつつ、シャンクスの船にゴードンと共に乗っていた。

おしまい。

にじゅうよんわ

「よく来たな——火拳のエース！」

「……おう」

場所は新世界。

前半の海より遙かに過酷な海のある島。

かつてこの島はのどかな牧場が広がっている島だった。

スパーード海賊団が降り立った今は、荒れ果てた荒野が広がるだけだが。

カラカラカラ……と錆び付いた風見鶏が揺れ動くだけの島だ。

スパーード海賊団の船長・火拳のエースは、荒れ果てた土地の至る所に落ちている骨や死体と思わしき体を見やる。

どの骨も衣服はボロボロで、焼け焦げたようであったり、剣や槍が突き刺さったままになっている。

物言わぬ死体は見るも無惨な、まるでゴミのようにボロボロで腐敗臭を出している。

その臭いに顔をしかめる者もいるが、エースはまるで気にしてなかった。

いや、気にしてないのでは無い。そう見えるだけで、内心フツフツと燃え上がる火を出さないように必死だ。

そんなエース達に相對するは、新世界で四皇の誰にも屈さず、戦い続けている海賊たち。

彼らは四皇自信や四皇の最高幹部などに勝てる実力は無いし、四皇に積極的に挑むこともしない。

だが、彼らは賢かった。他と比べて優秀な頭脳を持っていた。だからここまで狡猾に立ち回り、今こうしてエース達の前に五体満足・大軍で立っている。

そしてこの同盟に入っている船長の中で、1番低い懸賞金の男でも2億を超える凶悪海賊だ。

船の大きさも、船員の数も質も、エース達・スペード海賊団では比べる事すら出来ないほどの差がある。

そうして圧倒的優位な立場で、彼らがエースに提案するのは自分たちの同盟に加わる事。

七武海の勧誘を蹴り、海軍将校にも真つ直ぐ向かって行き、撃退する実力を持つエー

スは、海賊同盟からすると喉から手が出るほど欲しい鉄砲玉。

常に慎重に考えてから行動を起こす、海賊にしては珍しく彼らは「頭」でここまで成り上がっている。

当然、懸賞金にふさわしい実力を持つが、やはり後先考えず突っ込んでいく『駒』は、いくらいても足りないくらいだ。

「さあ……返答を聞こうか……！」

多くの凶悪な部下を従えて、同盟の中心人物である海賊・ランドルーツは特徴的な赤いボサボサの髪の毛を靡かせ、緑の瞳でエースを貫くように凝視する。

(自分らに付けば良い……付かなければ、戦力差で屈させれば良い)

ニヤニヤと、手を組むよなと同盟に所属する海賊たちが見守る中。

エースは一つ息を吐いて声を出す。

「この島をメチャクチャにしたのは……お前らか？」

「……ああ？……フンツ……当たり前だろう！この世は弱肉き」——火拳!!!」!?!?」

エースはランドルーツが全てを話す前に、船長格を纏めて吹き飛ばした。

その事に驚きつつも、同盟に所属する海賊たちは直ぐに武器を持って襲いにやって来る。

口々に馬鹿だとエースの行動を嘲笑いながら迫る。

「……わりい…お前ら」

「気にすんな」

「そうさ!」

「やってやろうぜ!」

『ウオオオ!!』

何倍もの差があるにも関わらず攻撃してくるスピード海賊団を前に、直に火拳を食らった船長達は気にせずには号令を下す。

「……テメエら、徹底的にすり潰しちまいな!」

1人は同盟の中心人物 動物系の実を食べて、恐竜人間になった男・ランドルーツ。

「火拳はロギア…覇気を使えない奴は下がってなさい!わかったわねえ!?!」

続くは同盟内で最も懸賞金の高い海賊。虹色の髪色で背は普通、中立人間・無能力者のニユトシントン。

「ルーキーに現実を教えてやれえ!こちとら弱い80のご老体じゃぞい!イタワレエ!」

見た目は20、中身は80の自称世界一のヨガマスター、黒髪黒目の可愛い小顔に筋骨隆々の体を持つ、推定15頭身の男、アン・チェジング。

「ドウルルドウルウイヤアウルウルウオアウオオオ!!」

「腹が減ったアー! つつてます!」

「知るかッ!」

片手に本を持ちメガネをかけているが、人語を忘れライオンの顔をした船長、キングラーが叫べばそれを直ぐに翻訳する副船長。

仲良し2人組に突っ込みを入れたのは、同盟に所属する船長 エキリ・ウーナパー。海軍も危険視する5人の億超海賊団による同盟。

総数6000を超える大軍勢。

1000を数える賞金首。

大地を揺るがし進撃してくる同盟軍の雄叫びに、スペード海賊団の面々も僅かに後ずさる。

それを鼓舞しようとエースは特大の火を放つ。

自身の能力を発動させ襲い来る敵を倒す——はずだった。

「取り込み中——失礼するよ」

エースの目の前に轟音を伴って現れた一人の男。

その声は静けさを持っていた。

聞いた者を深海の中にいるように感じさせる、そんな声だった。

海兵のマントを靡かせ、槍を背負い刀を抜き身で振るい土煙を吹き飛ばす。

「カリーナ（カリファ）、足は引つ張らないでね」

「ステインガー（ステューシー）先輩こそ」

「ラ、ランドルーツ船長オ！大変です！沖合に海軍の艦隊が!!!」

「エース船長オ！大変だ！後方に海軍の軍艦が!!!」

続々とそこに到着する海兵達と、そこに遅れて同盟の中心人物であるランドルーツの

部下とエースの部下が走ってやって来た。

「……………そう見てえだなあ」

「……………みてえだなあ」

海賊同盟とスピード海賊団のちょうど真ん中に降り立った海兵。彼らから感じる覇気に海賊同盟の船長達に動揺が走る。

「……………何故ここに海兵が？情報が行かないように徹底していたはずだ——）……………俺達を

売ったか？火拳のエース？」

「…するわけねえだろ」

普通に考えて、海賊同盟に参加しないつもりならそもそもこの島に来なければ良い。わざわざ断る為だけに来た所で、圧倒的戦力差で潰されるだけだからだ。

なら、七武海の勧誘を蹴ったという誤情報を流し、火拳のエースに海賊同盟が食いつく所を海軍と協力する。

そう考えるのが普通だろう。

向こうだって馬鹿では無い。

だが、彼らを見ると、本当にここに断りに来ただけにしか見えなかった。

「エース…船を奪われた！まずは取り返すぞ！お前は「よし！俺の火で——」何もすんな！！」……はい」

自分達の船を取り返す為にエースがメラメラの能力を使おうとすると、すぐさま仲間にゲンコツを貰っている。

あの様子だと、海兵と繋がっていると見るのは難しい。船長がどう見てもそういうった事に向いてない。

それに、馬鹿では無いとさっき言ったが、案外ただの馬鹿なのかもしれない。

「…ん？なんか雪降ってねえか？」

「ここはグランドライン後半だぞ？普通だろ」

「…足が動かねえんだが」

「ここはグランドライン後半だからな」

エースたちの足元をあつと言う間に覆い尽くす雪。天気の変化が激しい海とはいえ、ここまでなんの前兆もなく起こるだろうか。

だがここはグランドライン後半。今までの常識は通じないと考えるべきだろう。

「あら、火の能力者はいないのかしら？」

「ウォー！なんだあの美人は!？」

「服装が最高だ!!」

「エース船長!あの美人仲間にしましょうよ!」

「空気が良くなるぜ!」

「何してやがる…副船長として言うが、やめておけ」

「……………そ、そんな美人だなんて」

「なんでお前は照れてんだ!!」

「オイ、デユース!あの子メチャクチャ可愛いぞ!」

「お前もかよ!!」

黄色い声援を送るスピード海賊団の面々と、その声にただただ照れて悶える女海兵。

雪に埋まることなく歩いてきたと思つたら、その場で顔を真っ赤にしている。

「……つていうか、そこ通してくれねえか？俺達引き上げたくてよ」

「そうだった！船を返してくれ！——俺達の邪魔をしないでくれ！」

副船長デユースと船長エース。その2人がそういった時、今まで照れてクネクネしていた海兵の顔から感情が抜け落ちる。

「……万年雪」

「ん？」

「お？」

そう呟いた海兵が仲間達を襲い初める。

足元に広がっていた雪は次々に海賊達を飲み込まんとしていく。放っておけば直ぐに彼らはリタイアだろうが、ここには火の能力を持つ男がいる。

「お前ら！俺より前に出るな！」

スピード海賊団船長・ポートガス・D・エース。

瞬時に広げた炎で仲間を助けつつ、目の前の女海兵を睨みつけて相対する女海兵の實力を推し量る。

「火拳ッ！」

「雪垣」

大きな手の形をした火が迫るが、それは容易く防がれる。

その事にエースはより警戒心を上げる。『コイツは俺がやらなければならぬ』と。

「お前から先に行け！俺がコイツをやる！」

「エース！危険だ！逃げる事を優先しろ！」

「っ！そうですよ船長！船長の『火拳』を簡単に対処されたんすよ？」

「船を取り返さなきゃ！戦っても意味ないですって！」

だが、エースが強いと気付いたように、仲間たちもそれに気づく。完封できる實力差があれば別だが、エースの火拳をアツサリ防いだのだ。

そもそも自分達は同盟に入る気もないのだし、この島からサツサと離脱してしまえば良いのだ。

「——俺は逃げねえ……!!」

「ツ!!……分かった。死ぬんじゃねえぞ！」

「副船長オ!!」

エースが1度決めたら考えを変えない、という事を知ってるデューズはいち早くエースの邪魔にならないように、船の奪還に動く。

しかし——

「——アイトの邪魔をする人を……私は逃さない……! 雪之丞（ユキのジョウ） ツー!」
離れようとするスピード海賊団の道を塞いだのは女海兵が作った雪の壁。まるで城塞のような重厚さを持ち、登りきる以外に突破方法がないようなそんな巨大で何処までも続く壁だ。

「火拳ツ……なら! 神火 不知火（しんか しらぬい）!!」

壁を壊そうとエースが全力の火拳を放つが、表面に僅かにヒビを入れる程度。そこで貫通力を重視した炎の槍を放つが、それでも刺さるだけ。

「あなたたち全員、私が逃さないわ」
「俺は逃げねえ!」

仲間達を襲わせないように、エースは女海兵に真っ直ぐぶつかり合う。炎と雪。完全に対極に位置している2人は、2度3度と鏝迫り合いのようにつつかり合う。

「火拳ツ!」

「また?——雪垣」

海軍本部大佐 白雪姫・モネ。彼女は3度目となるエースの技をまたもや軽く防ぐ。

エースとしてはモネを仲間の元へ行かせないために、ヘイトを集めている訳なので防がれるのは期待通り。

「安心して？ 貴方の仲間に手は出さないから——雪華・吹雪（カミ・ふぶき）」

そのエースの考えを読み取り、彼が望む通りのⅠV SⅠに持ち込むモネ。足元の雪原からかつてほかの敵に使った技のアレンジ版を放つ。

固まった雪の華が宙を舞いエースを中心に吹雪が吹き荒れ体を傷つけていく。視界がはつきり見えない状況にしてからじわじわと確実に仕留める。これがモネの “格下” との戦い方だ。

その戦い方と話し方に見下されてる事に気付いたエースは、自信を中心に巨大な炎を生み出し、手を銃の形にして火の弾丸を放ち迎撃する。

「——ツぶねえー！」

（……今の避け方……まさか、いえ、さっさと捕縛する……）

その時、エースは明らかに見えてないはずの攻撃を “直感” か、それとも別の方法で避けた。

その事にモネは警戒度を上げる。今までも多くの覇氣使いと戦ってきたのだが、覇氣が個人個人で向き不向きが異なる以上、油断が出来ないからだ。

「—雪原定理—」

モネがそう呟くと様々な形の立方体が雪で生み出される。大きさは様々でバリエーションが豊富だ。

人一人簡単に潰せるであろう巨大な物から、子供ぐらいの細さのものまである。

そしてエースが吹雪を突破する前に手を握り、四方七方から吹雪を突き破りエースへ殺到した。

「あつぶねえな……！」

「！」

しかし間一髪でエースは潰されずに目の前に現れる。

モネがワザと四方八方ではなく一つつ空けといた場所から、エースはギリツギリで回避した。隙間がエースからは見えない角度にも関わらずだ。

「見聞色……」

「？：なんか言ったか？」

本人は気づいてないようだが、エースが見聞色を無意識に使っている可能性がある。

もしソレをここで会得されると少々厄介だ。モネとしてはここで彼と全力で戦うつもりは無い。

戦闘開始前にアイトが「せんべいの家族らしいから、足止めだけでお願い」と言った為に、七武海への再勧誘をこの後で行う予定なのだ。

「逃がしはしないわ……！」

「っ！火拳っ！——ってマジか?!」

今度はノーモーションで雪原定理を発動し、数多の雪の立方体がエースへ迫る。一つがかなりの質量を持つ為、エースの代名詞・火拳をアツサリと突き破る。

それが一発や二発ではなく、無限に迫ってくるのだ。完璧に見聞色を会得していても避け切ることは不可能。

「――ぐべらッ!!」

エースは下から打ち上げられる。体制を整えようとするが、間髪入れずに次から次が迫る。

ラツシユとも言える一方的な攻撃でエースは地面に叩き伏せられる。

死なないように加減をしているとは言え、意識を一時的に奪うぐらいには充分強力な攻撃だった。

「カマクラ十草紙」

倒れ伏したエースを覆うように作られたのは雪で作られたカマクラ。何十に重ねて作られたカマクラは新世界の億超でも壊すだけで一苦勞。

ここにエースとモネによる戦いが集結した。

—————

場所と時を戻して億超同盟の後方に位置するは、アイトの懐刀の1人にして、最近アイトのボケがしよぼくなつてることにさえ苛立っている二刀流の剣士・アイン。

「うるテイ、ペーたん、Tボーンさん、海賊船の拿捕をお願いします。ピンズは砲撃の指揮をお願いします。どつちも終わり次第、島の海賊の掃討もお願い」

(言葉はいつも通りナス……でも)

(顔が怖いんですけど……でも)

(果たして……しかし)

(ううむ……的確な支持だと思いが……しかし)

「私はサツサと切り捨ててきます」

((顔が怖すぎる……!!))

口では絶対に言わない、言えない。何せアイトを蹴り飛ばして軍艦を一度に4つおジャンにした噂があるアインである。

イラついてる顔、戦闘狂、アイトの役に立つ……様々な感情で顔がよく分からない事になつてるアイン。

日頃からこの顔にならないようにコントロールしてるせいとか、ボーカーフェイスばかり上手くなる今日この頃。

その腕前はステューシーらに手放しで褒められるほど。

あの一件以来共にいるとはいえ、元々命を狙ってきていた敵にそこまで褒められると、嬉しいやら悲しくなるやら。

「——双剣乱舞!!!」

「ぎゃあああ!!!」

「ぐわああ!!」

「のわあああ?!!」

様々な感情を胸にしまわずに、顔に表しながら好きないように切り飛ばし切り飛ばす。

空気抵抗の少ない体で、目にも止まらぬ速度で飛び回り斬撃をド派手に撒き散らしながら、アインは止まることなく切り進んでいく。

何処までも続く荒野を切り捨てながら進み、敵船の船長らと対峙する。

1人は同盟内で最も懸賞金の高い海賊で虹色の髪色で背は普通な中立人間・無能力者のニユトシントン。

もう1人は見た目は20、中身は80の自称世界一のヨガマスター、黒髪黒目の可愛い小顔に筋骨隆々の体を持つ、推定15頭身の男、アン・チェジング。

共に近接戦闘を得意とする海賊だ。

連携が何処まで出来るのかは知らないが、一人一人が強い事は分かる。

「センチュリオン！」

「体様零敗！（たいようれいはい）」

大きな刀を真つ直ぐ縦に振り下ろすニュトシントンと、お辞儀しながら合掌した手を突き出すアン・チエジング。

今まで幾度の死線をくぐり抜けてきた2人の最初から全力の攻撃。

その技を見て海賊たちは盛り上がる。

が、その盛り上がりは文字通り「一瞬」で掻き消される。

「那羅黒（ならく）」

真つ黒に輝く2振りの剣により、2人の船長は地面に叩きつけられた。双剣を地面と平行に体の左側に構え、力いっぱい2人の船長を上から切ると言うより叩き潰した。

命を奪えはしなかったが、この2人はこの時点で脱落する。

次に彼らが活躍するのは、とある大海賊に下つたときだ。

にじゅうごわ

「爬琥荒気（ハクアキ）！」

「牙突！」

覇気を纏った黒い拳と刀の衝突。

人型になった恐竜の拳と刀は周囲に衝撃波を生む。

曇天の空の下、荒れ果てた大地で行われている、海賊同盟と海軍の指揮官同士のぶつかり合い。

傍目から見れば拮抗しているように見える戦いだったが、戦闘は終始アイト率いる海軍のペースだった。

「ぐぬう!？」

拮抗したのは一瞬で、恐竜の拳を弾き返すと同時に、アイトはランドルーツの後方にいた。

横を通りすぎた時にアイトは幾らか斬撃を与えたが「恐竜」の硬い皮膚を貫通するほどの威力ではなかったようだ。

「——まるで「アイツ」みたいだな」

その頑丈な体に、新世界に派遣されてしばらくたったある日、突如として攻め寄せてきたもの達を思い出す。

奴は恐竜の能力者ではないが、頑丈な体に苦勞させられた事は同じで、思い返さずにはいられない。

そして、ランドルーツは動物系 古代種 アンキロサウルスの能力者。

アンキロサウルスというか、アンキロサウルスを含めた鎧竜（よろいりゅう）は、頭頂部と背中全体が多角形の堅い骨板で形成された鎧で覆われ、尾の先端には大きな骨の塊を持つ。

その能力者の彼は人獣型となり、背中を中心に生える角、太く分厚い皮膚、荒々しく振り回す尻尾を持つ。

厄介で凶悪な能力だが、アイトは余裕だと言わんばかりに構え直す。

その姿にイラついたのか、角がアイト目掛けて飛んで行く。

「（これでも喰らえい！）」

「い!?!? ロケットだとお!?!」

しかし、不意をついた攻撃でもアツサリ塞がれるだけ。

「……アキアキアキ……油断しやがっ……!?」

「危ねえな。恐竜はホント読めない事してくるから楽しいが——それだけなんだよなあ」

折角アイツと同じで刃を通さない皮膚をしているんだ。とある覇気の練習台としてちょうど良い。

「簡単に倒れてくるなよ?」

「!!」

両陣営のN.O. 1 同士の戦いの決着まであと少し。

—————

時を同じくして、海賊同盟の海賊船では、これまた一方的な戦いとなっていた。

動物系 古代種 パキケファロサウルス

頭骨が非常に頑丈なのが特徴な恐竜で、強力な頭突きで敵を倒してたとされている生物だ。

その能力者こそ、うるティである。

「うる頭銃!」

跳躍して頭に武装色の覇気を纏わせながら、相手に頭突きをかますうるティの代名詞

と言える技。

直撃すれば命の保証は出来ないが、直撃せずとも周囲に衝撃波を放つ強力な技だ。船に乗っていた海賊たちが吹き飛んでいき、甲板から船底まで貫く穴を開けた。

【うるティは本当に優しいお姉ちゃんなんだな】

そう言つて優しく頭を撫でてくれたアイトを思い出す。

あの時の感触はペーたんを抱きついた時と似ていて、とても落ち着いて良い気分になる。

その一方で「独り占めしたい」というような想いも出てきた。

頑張れば頑張るほど、役に立ったかどうかは関係なく優しく褒めてくれるから、力いっぱい海賊を倒す。

沈みかけてる船の上で。

「姉貴、沈めるなって言われてだろう!?もしかしたら一般人や財宝が乗ってるかもしれねえから——つ邪魔だア!!」

船を破壊し、沈んでいく海賊船で「♪」な顔でキャーキャー言ってる姉・うるティ

に注意しながら、弟・ページワンも海賊達を蹴散らす。

動物系 古代種スピノサウルス

スピノサウルスは脊椎から伸びる扇状の突起物が特徴な恐竜で、大きな顎と大きな体を持つ。

言わずもがな、うるテイの弟・ページワンの能力である。

その巨軀に見合う攻撃力を持ちながら、船を壊しすぎない程度に加減しながら戦う。

【抱え込むなよっていうか、誘ってくれよ】

姉に付きまとわれるのに疲れて、海釣りを誰もいないような穴場でしていた時、アイトはいきなり隣に座ってきた。

聞けば彼も周りの女性たちから逃げてきたんだとか。

その中に姉もいたとの事で、場所を変えようとした時に言ってきたのがさっきの言葉だ。

【お互い女性で苦労しているもの同士、な?】

顔に少し影を残し、疲れてるんだとハッキリ分かるしていた彼。

初めてできた兄のような彼も、自分と似たところがある。その事に親近感を覚え、より仲良くなった。

あの時はその後すぐにアイトの電伝虫に連絡が来て、大人な声？の人と話をしたので
2人きりとはならなかったが、とても良い空気だった。

だから頑張る。

アイトという憧れの彼の役に立つ。

そう思つて次々と海賊を倒す。

姉さえ来なければ、ペーたんが苦戦することはないのでと分かる、そんな蹂躪劇だ。

どの船にも約4000万の賞金首が乗っていたが、4人の海兵がなんて事はなく撃破
していく。

「直角飛鳥 〃ボーン大鳥（オオドリ）〃！！」

直角に折れる軌道を描く斬撃を放ち、直線上の対象を一直線に貫く。

骨ばった瘦躯という、異様な風貌から醸し出される 〃陰鬱〃な雰囲気とは裏腹に、他
者の幸福を第一に行動する男・Tボーン。

とある国の騎士の過去を持つこの男は、『自己犠牲の正義』をもっとも体現している。

【俺の技は理不尽に晒される人々を助けるためにある】

彼が思い浮かべるのは指揮官であり、親友とも呼べる若い海兵。そんな彼を助ける為にも、力を持たない人々に安心の日々をもたらす為にも、一切の手加減をせずに海賊を流れるように切り倒していく。

「モ〜サ〜モ〜サ!」

「なんだ……種?」

「……忍者?」

「ぬ〜ん!!!かあ!!」

「!?!」

「ぎゃあ!?!」

苦しうに、くねくね動いていた男はピンズ。彼の能力は植物の成長を操る。

とある島に生息している「ポップグリーン」という、特殊な植物の種を使って戦う。

アイトと共に巡回してた時に上陸した島になっていた物だ。

中心部まで行つてから島の外に出るのには、文字通り骨が折れたがそれだけの価値がある強力な種。

能力で無限に種を増やせることも相まって、ピンズはこの戦いの後には大佐に昇格す

ることにもなっている。

圧倒的な力を持つ彼らによって、海賊同盟の船団は全て沈められるか拿捕される。時間にして2時間と少し。

確保は仲間に任せて、4人は1人で海賊達を蹂躪しているアインの元へ動き出した。

—————

時を同じくして、雪原の中にポカンと立っている鎌倉の中。

スピード海賊団船長である、ポートガス・D・エースが目を覚ましていた。

周囲を見渡せば、暗闇の空間にしんしんと雪が降っていて、外からの音も聞こえない全くの無音の世界。

自らの炎で照らしながら脱出方法を考えるが、雪の壁は自身の全力でも砕けない硬さ。

まず簡単に壊すことは出来ない。

しかし、だからと言ってモタモタする訳にはいかない。エースがこうしてる間にも、仲間たちが苦戦を強いられているはず。

「……………どうすつかなあ」

時間はない。

そして方法も思いつかない。

「——そう言えば、シャボンの島で戦った時……………そうか！」

新世界に入る前に立ち寄ったシャボンティ諸島では、とある海兵達と戦闘になりその戦いでエースはとても濃い経験をした。

その経験の1つが、相手の海軍中将が使っていた「覇気」というもの。

あの時は咄嗟に使えたが、それ以来上手く扱うことが出来なかった。

それを使おうと考えたのだ。

何故かは分からないが、今のエースは覇気を「使える」気がするようで、集中して今自分が出せる最大火力と覇気を合わせ——

「——オラア!!!」

見事、何重にもなるカマクラを破壊した。

一枚壊すのに5発殴った事と、手がかなり痛い事は、ココだけの話である。

「え!?じゃあお前たちがここに来たのって…」

「ええ。行方不明の海兵の搜索と、七武海への勧誘よ。少なくとも捕らえるつもりはな
いわ」

エースがカマクラから出てくる少し前、後方の軍艦を指揮するモネはエースを除くス
ペード海賊団と話し合いをしていた。

雪でできた城壁を踏破し船を取り返そうとしていた彼らだが、モネによる説明を聞き
戦闘をやめていた。

加えて雪で作られた椅子に座っている。

「でも、エースは七武海にはならないと思うぞ?」

「でしようね。というか、私は船長のポートガス・D・エースを鍛えてくれって頼まれて
るのよ——不思議な話でしょ?」

海軍のコートを羽織り足を組んで、怠そうにため息を吐く。

(……あの2人に今なら勝てるかしら?)

自分が作ったカマクラよりも奥に登る土煙。覇気で確認したがアソコでアイトとほか2人が戦っているようだ。

実力を心配してる訳では無いが、女の勘とでも言うか、片方が怪しく感じるのだ。

1人は問題ないだろう。彼女はもう既にアイトに取り込まれている。

だが、もう片方はそうでは無い。

厄介なことにならないければ良い――

「――火拳!!」

「……覇気が上がってる……黒棺(ごっかん)!!」

大きな火の拳が空から落ちてきて、黒い壁とぶつかり大きな衝突音が響き、モネは攻撃してきた奴を見る。スピード海賊団の面々が何か言ってるようだが、無駄だろう。

ポートガス・D・エースが本当にガーブさんの親類なのなら。

「俺を捕えなかったこと、後悔させてやるぜ!」

「……もう既に後悔してるわよ」

アイトの頼みでもなければ、さつさと首を切つて終わるのに……。そう思いながらモネは再び攻撃を開始する。

対するエースは空から落ちてきている最中で、月歩を習得してないが為に少し焦る。

「雪原定理！」

「炎戒 火柱！」

が、体を地面と水平にしながら火柱を放つ事で事なきを得る。

エースが無事である事を確認したモネは、確実に意識だけを奪う技を発動する。

「たびら雪 肌刀 一閃」 雪月死期（ユキゲシキ）！」

目にも止まらぬ速さで接近し、片方の腕に作られた三日月型の刃の峰で殴りつけるが、咄嗟に体を変形され回避された。

その後もエースとモネはぶつかり合い、ついに互いの最大技を使う。

「大炎戒 炎帝（だいえんかい えんてい）！！」

“大炎戒”で展開した炎をまとめ上げ、太陽を彷彿とさせる巨大な炎の塊を作り出すエース最大の技。

「白澤（はくたく）」

対するモネが生み出したのは、中国に伝わる瑞獸（神獸・聖獸）の一種を模した雪像。白い獅子の顔に牛のような二本角、山羊のような髭を蓄え、伝説の生物の麒麟のような動物をしている。

大きさはどちらもほぼ同じ。

互いに覇気を込めた全力の一撃。

周囲の天候を完全に変え、見守っている海賊も海兵もただ自分の身を守る事しか出来ない。

2人は雄叫びを上げあがら激突した。

—————

ビッグマム海賊団との戦いに明け暮れていたとある日、その女は突然目の前に現れた。

「何の用だ？」

「冷たいわね、深い仲なのに」

アイトが赴任している海軍支部の最上階にある一室にやって来たのは、CPのトップの一員にして裏の世界の帝王の1人・ステューシーだ。

分厚い封筒を見せびらかして妖艶にアイトを挑発する。

ドレスローザで当時大佐であったヒナ穰と戦い捕縛して、アイン達を大いに困らせた彼女。

当然、アイトは警戒心を剥き出しにしている。

疲れているにも関わらず、槍をかまえて片腕に武装色を纏い臨戦態勢。

そのアイトを見て可笑しく見えたのか、ステューシーは笑って両手をあげる。

「良い提案をしに来ただけなんだから」

そう言つてアイトに投げ渡したのは、ステューシーと先輩後輩の関係にある、女性の作戦立案書。

そこにはアイトを貶める為の作戦が記されていた。

「アイン、頼んでいいか？」

「この近くを通る王族・商人らの船を囮に、海賊達の足止め……世界政府加盟国を利用するなんて」

「でも、合理的だ。モネやバカラが近くに居ないし、俺達もビッグマムとの戦いで苦しんでる。実行されたら間違いないく天竜人を動かせる」

ステューシーが渡した書類の中身はこうだった。
カリファの作戦

アイトの支部の近くに王族の船が通る航路を海賊のアジトやナワバリに設定する。これを同じタイミングで複数引き起こす（囹は商船等でも可）。アイトは助けるしかないが、さらに近くの支部と町で惨殺行為を敢行。また、前日に動かせる船を減らしておく。

五老星の許可 確認

王族の航路 確認

海賊のアジト 確認

支部・町への潜入 確認

決行日 今日より7日後

「ここまでしてくるか……俺そんな嫌われる事したか？」

「今更でしょ？天竜人の護衛をバツクれて、天竜人の事を公の場で馬鹿にして、白ひげと親しくして、クロコダイルに圧をかけて、CPと喧嘩して……上げればキリがないわ」

「流石は俺だな」

「全く、貴方が無事なのは私達がいるからなのよ？」

「分かってるって。流石にここまで暴れてきたからね、その辺は大変に理解してますよ……ビッグママとの戦いの時もね」

「私とモネに任せつきりだったのは、傘下とかでしよう？ 貴方が大変な時に外敵ぐらいなんとか出来なきや、いる意味がないじゃない？」

「感謝してるよ。お礼に何が良い？」

「そうね……一揉み」張り倒すわよ」

「そこは生足キツクで」

「この変態が」

「そうそう、女ヶ島から連絡なんだけどき」

「話を聞きなさい？」

「〃もしもの時は任せろ〃って言ってなかったんだけど」

「予想どお……言ってなかったの？……まあ何か考えがあるんじゃない？」

「腹立つからって」

「どうせセクハラしたんでしょ」

「失礼な！ 匂いを嗅いだだけだ！」

「してんじゃない！」

「蛇のな！」

「……反応に困る事しないでくれる？」

「そしたらさ、〃なにをしておるか!!〃 って蹴り飛ばされて」

「そりやなるでしょう」

「思わずニヨン婆を身代わりにしちゃって」

「本当に何をしているのよ………それなら、なんでハンコックの腹が立ったのかしら？」

「？俺一言もハンコックがって言ってないぞ？」

「え？でも女ヶ島からって」

「ニヨン婆がな」

「あつ、そういう……」

「痛っ!?!ちよ、痛い痛い！」

「ハンコックったら、可愛いことするのね。絶対面白がって言ってたわね」

「頭ぐりぐりやめてくれ〜!!」

カリファの作戦決行日

嵐や津波など、様々な異常気象が発生↓アイトはすぐさま部下を近くの島々の民を助けに向かわせるが、付近をたまたま遊覧していた天竜人は完全に無視していた。

本来なら強い海兵が護衛につくはずだったが、近くにアイトという海に優れた猛者が

いるという事もあり、直属の護衛だけでいいと考えられて天竜人の船は離れた無人島に瀕死で座礁する。

アイトの元に天竜人をすぐに助けるように連絡が来るが、嘘だと思つて天竜人の命よりも島民を助けた。ただ、一応確認も込めて確認しに行くと瀕死の天竜人がいた。監獄船に引越す。

カリファもまた、天竜人が作戦区域に入るとは予想もしておらず、突然のことに対応できず王族や商船も被害を受けた。

つまり

ステューシー↓カリファを裏切り情報提供↓アイト一応信用し対策する↓アイト天竜人を見殺し。

↓カリファ天竜人を危険に晒す、協力した王族等は海賊に襲われる。

↓ステューシーアイトとカリファを両方嵌めて確実に仕留めた。

↓アイト↓天竜人を助けなかった罪&カリファ↓天竜人を巻き込むような作戦・任務失敗↓共に監禁される。

「じゃあ、想定外だったわけだ」

「ええ、まさかこんな事になるとはね……まあ、貴方がこのザマだし、半分成功かしら」
場所はステューシーが用意した監獄船。

捕まってるのはアイト、カリファのみで、船を動かしてるのはステューシーだけだ。アインやモネはビッグマムとの戦いで、アイトが捕まってるとは夢にも思ってた。た。

「お前は？」

「貴方が死ねば私は用済み。造船所も上手くやるんじゃない？」

「なんで自分の身を軽く見る？」

「？私は……私達は世界政府の為に生きてるもの」

「弱いのに？」

ステューシーによる拷問を受けてすっかりボロボロになった二人。アイトは海楼石をつけられてることもあって意外とまずい状況だ。

「……そうよ。私はステューシーさんのように強くないし、貴方を倒すことも出来ないし、作戦も満足に出来ないし、暗殺者失格よ」

「オイオイ……」

「——私に出来ることは何も無い。せめてもの救いは、あなたも死ぬ可能性があることと、造船所は上手くいったことね」

繰り返すかのように同じ言葉を言うのは、少しでも良い事を考えたいからか、カリファの目は魂が抜けたかのような雰囲気。

これまでの努力や、練りに練った作戦も、目標を達成する事に生きがいを感じていたからできていた。

しかし、今日まで数十と仕掛けて上手くいかなかったのだ。

時には海賊を、時には盗賊を、王族、商船、諜報員、ありとあらゆる手段、規模で指揮を取り、実行したが、結果は全て失敗。

人のやる気は、失敗で挫けるものだ。

「お前は強いし、色んなことが出来るだろ?」

「このみすばらしい姿を見て言える?——ガン見しないでくれる?セクハラよ」

「エロかったもんで(失礼)」

「本音と建前が逆ね?」

鎖は付けられておらず、手錠がついてるだけ。アイトのは海楼石で作られたもの。

それもあってアイトは檻の中を動き回る。

「……お前が強くないなら、六式を使えない奴はなんなんだ?胸もないのか?」

「露骨すぎ……見たければ好きただけどうぞ?——下のやつなんか見てる暇ないでしょ」

「俺はお前は絶対に強いと思うし、勝てないとは思わない」

「なんか変な文ね?」

そんな事を無いと呟いて、カリファの顔に自分の顔を近づけていく。

「確かにお前はステューシーぐらいの実力はない、断言する」

「……」

「毎日地道に鍛えてるんだろうけど、苛立つくらい才能の差を実感してるんだとも思う」
「…そうね、周りは怪物ばかり」

カリファの周りにいる人を想像する、ロブ・ルツチにカク、ジャブラ、長官、などなど。

アイトの周りにいる人を想像する、ゼファー、せんべい、アイン、モモンガ、などなど。

「（俺のが怪物に囲まれてね？）……なんで気にする？」

「……………するでしょ？馬鹿なの？変態なの？セクハラよ」

「限界まで覗いてるだけだが？」

「牢屋を曲げながら言わないでくれる？海楼石つけられてるのよね？」
言われた気付いたかのように、腕を前に突き出して疲れた顔をする。

「お陰様で体がだるい」

「その割に下半身は元気ね」

「お陰様でな」

「最低ね」

まるで誇りとも言うかのように胸を張る。この男、この状況でもこの男なのである。

「ちなみにサイズは？」

「自信あるけど、言うのは嫌」

「なんで」

「ハーレム野郎には言いたくないわ、セクハラよ」

「今更」

鼻で笑うかのように、それでいて自信満々な顔。その態度にカリファの苛立ちが増していく。

「開き直らないでくれる？」

「でも、体には自信があるんだな？」

「そうね、女としての武器はちゃんと揃えてるわ」

「ならそれでいいじゃん」

「遊女にでもなれと？」

「俺専属の」

「蹴り殺すわよ」

「元気出た？」

「殺気しか出ないわ」

「ならよし」

「どこが」

「話を戻そう」

「どこに」

「カリファは凄いやつだと思っただ」

「また体の話？」

「9割はそう…残りの1割は違う」

「……………1割って？」

「カリファが努力家で、プライドがあつて、面白くて、スタイル良くて、美人で——」

「てつきり実力を褒められるかと思つた私が馬鹿だったわ」

「——すごい、いい女だつてこと」

「…口説いてるの？悪いけど他へどうぞ、鼻息荒く、柵を壊して、命を狙われるような男に興味はないわ、ごめんなさい」

「いやだから、カリファに向いてるものがあるつてことだよ！」

「ハニートラップでしょ？」

「現在進行形だと」

「他に何かあるのよ」

「いつぱいあるぞ？まず俺は男で、潜入なんて出来ないし、口説くことも出来ないし」

「ええ、10割増しで向いてないわ」

「秘書も出来ないし、メガネも似合わないし、月歩は今でもミスるし、施設はよく壊すし、上官にも部下にも馬鹿にされるし」

「…何が言いたいの？」

「あれ？ツツコミは？」

「何が言いたいのよ！」

「お前が必要だつてこと」

「……………はあ？何も上手くないかな？私が必要？馬鹿にしないで。仮に政府を裏切つて貴方に付くとして、見返りもなければリスクしかない——間違いなく上手く出来

ないわ」

「さっき造船所のことなんて言った？」

「…それは」

話し始めたばかりの時、カリファは「造船所は上手くいく」と言うような事を2度も言った。

それだけ、成果が欲しかった。

自分にも出来ることがあると言いたかった。

常に女として下に見られて、周りには天才ばかりいた。

「安心しなよ、カリファに出来ることはいっぱいある。役立つ事も、カリファにしか出来ないことも沢山な」

「……………貴方につけば」

「うん？」

「貴方に味方したら、私は何を得られるの？」

「自分の価値？」

「即答しといて疑問なのね…」

「俺だからな」

「彼女達が思いやられるわ」

「もう手遅れだよ……そんなじゃあ早速」

「そうね……」

「一揉み行きまし「脱出するの！」……はい」

「カリファはステューシー程の実力は残念ながら身につけていない。決して鍛錬を怠ったことは無いが、それでもまだまだ差がある」

「彼はその事を気にする事はない、人それぞれ得手不得手があるのだから、と優しく接してくれたが、それで向上心が無くなる事は有り得ない。」

これがカリファとアイトの物語だ。

—————

「エース！そこまでにしてくれ！話を聞いてくれ！！」

「っ!?!お前ら……!?!」

「落ち着いてくれると助かるわ」

息を切らして血を流し、膝をついているエースと、数人がかりでエースを止めようとするスピード海賊団の者たち。

その光景を余裕たつぷりの顔でモネが見ていた。

スピード海賊団との戦い 終結

海軍の指揮官・重傷

諜報員 最後の足掻き

海賊同盟の戦力は0

次回、金獅子登場

にじゅうろくわ

火拳のエース率いる、スパード海賊団との戦いが集結し、海賊同盟のもの達もアインを初めとする海軍によって沈静化された今。

残っているのは、たった1人だった。

時間は、少しだけ遡る。

—————

「ごんな……どころでええ!!」

「……お前の旅はここまでだ」

その言葉と共に巨体を振り回していた男は崩れ、槍を振るった海兵だけがその場に立った。

恐竜の能力者として、大規模な海賊同盟の実質的な長として、グランドライン後半の海「新世界」にて、名を上げようとしていた男。

この男と共に同盟を組み、勢力を広げようとしていた各海賊団の船長達も、全員を捕

らえたことでアイトは海軍本部へと向かおうとした

その時だった。

「——ん、苦勞さま♡」

アイトの背中側から抱きつき、海楼石入りの口紅を体に当て、アツサリとアイトはその女に組み伏せられた。

「ツ……今さら何をやる気だ？——ステューシー！」

「……………悪あがき……かしらね」

そういうが早く、脊髄の近くを指銃で刺される。苦悶の表情をするアイトを見ながら、ステューシーはさらに指銃を放ち、アイトを追い詰める。

モネはエースの所に、アインは海賊達の捕縛に忙しい今、アイトの元に直ぐに来れる味方はいない。

時間は無いが、こうなるとアイトの命を取るのに時間はかからない。

しかし、ステューシーは指銃でダメージを負わせるだけに済ましている。

「グッ……………あの時、俺とカリファを見逃しておいて……………グウツ！……………今さら何だ

と聞いているんだ！」

「確実に殺す……その為よ。その為に——

初めて会った時、それは今から随分と前のこと。しかし今でもアリアリと目の裏に浮かぶ。

五老聖から任務を託され、カリファと共に彼らを分断する策を練り、実行した。本当ならジワジワと追い詰めていく予定だった。

アイトのように海軍の上層部に繋がりが深い者を、いきなり世界政府の駒にする事は難しいからだ。もしそうすれば、必ず企みが露見する。

それはあつてはならないが、そもそも、五老聖が危険視している理由も曖昧だ。今までは、いくら優秀でもこんな事をする事は無かった。

それなのに、アイトは確実に消すか、味方に引き入れるように通達されている。

任務を受けた時からの疑念は、任務を失敗するにつれて晴れていく。

なるほど確かに。この男は何故か死なない。運命にでも生かされてるかのような、そんな不思議なしぶとさだ。

五老聖はこの男の不思議なしぶとさと、謎となつてゐる出生地も、彼がその身に宿している能力も、不気味なのだろう。

その事もあつてか、任務に対する疑念が晴れると共に、何時までも何の変哲もない暗殺の失敗に、C Pの上層部からの突き上げは非常に強くなつた。

【何も事情を知らない無能ども】

そんなヤツらの相手などしてゐる暇は無い。五老聖から頼まれた任務なのだ。必ず完遂してみせる。

そう意気込んで前に進んできた。

だが……そもそも……私は、ここまでC Pの為に働く理由は無い……はずだ。

そう考えた時、その考えにたどり着いた時、私の中の何かが弾けた。

アイトの本質を、「謎の生存力」を知らずに、彼の仲間の強さを知らずに、勝手に実行して3度失敗した無能な長官。

私と違い、本部で日々のうのうと、何もせずに暮らしている同僚共。

彼らに協力の要請もした。だが、彼らが手を貸すことは無かつた。たまたまタイミン

グが悪かったのかもしれない。しょうがなかった、かもしれない。

だとしても……私が、ここまで、苦勞して、最後まで行う。

そのことに対して、私にメリツトは？

あの方の役に立つ為なら、アイトに手を貸してもらうのも、悪い話では無いはずだ。

彼はもう既に天竜人や政府の上層部と真つ向から対立の姿勢を見せている。

それでなお、彼が処分されないのは、彼の実績と実力と彼の身内の存在。

そして彼がSWORDだから。

SWORDとは、自由に動ける精鋭部隊のこと。

上手くやれば、アイトという強大な戦力を味方にして、あの人の為に役立てるかもしれない。

それに、CPに入ったままアイトの仲間に成れば、アイトに良い情報を流すこともできる。

あの人は今世界政府側……だからCPを初めとする世界政府と真つ向から対立するアイトと完全に手を組めるとは思わない。

しかし、あの方は発明をする事が出来れば何でも良いと思っっている。

しかも、彼の能力はあの人も興味がある。

考えれば考えるほど、アイト側の方が良く考えられる。

「——努力してきたのよ」

アイトを組み伏せたまま、独りごちてため息をひとつ。

血で黒く染った指を舐めて、空を見上げるその顔は、酷く疲れていた。

「つまり？」

「無理ね。ここで殺す気だった。そのためにずっといたのよ。だけど、今までの苦労が報われるというのに、解放されるというのに、貴方を殺せなかった。今も……やつぱり出来ない。任務を感情で怠るのは、諜報員として「死」と同義よ」

「……時々理性を失う俺なんかより、ずっと人間らしく生きてんなあ……お前らは」

「!？」

「？」

アイトの言葉に虚をつかれたのか、一瞬言葉に詰まったステューシー。その事を不思議がるアイトだか、アイトはワノ国編の序盤しか知らない。

その為、無意識のうちにステューシーの心に残り、彼女もまたアイトとの居心地の良

い空間に籠絡されていくわけだか、それはまだ先の話。

見上げてみれば、戦いが始まった頃は雲で暗かった空が、星々によつて綺麗に彩られている。

数にして17個。そして真ん中には一際大きな星が一つ。この星達は未来を表している……かもしれない。

—————

「護送の準備は出来た？」

大規模な海賊同盟との抗争、CPとの繋がり、そしてエース率いるスピード海賊団との関係。

色々あつて疲れたが、とにかくも、「海兵」として俺が先ずするのは捕らえた奴らの送だ。折角捕まえたのだ、元気になる前にサツサとインペルダウンの中に投げ込むのが良い。

なんなら、俺の能力で海底を引き摺りながら、ブルゴリ（インペルダウンの獄卒獣）専用の入り口から入るのも手だ。

海賊達の命？まあ、死なないよ多分。

それで終わるのなら良いんだが、残念ながら今回の海賊は規模がデカイ上に、任務として俺はここに来たのだ。

である以上は、護送船団の指揮を執る大佐と書類の確認をしなきゃならない。

はあ、昇格してからチマチマと細々したものを沢山書かなければならないとは……よくガープさん中将やってるよな。

よし、報告書の書き方教えてもらおう。それまでは皆んなに書いてもらおう。

そうと決まれば、頼りになる双剣のペチャパイ様にお預けしよう。映画で揺れなかっただけで、全然ペチャには見えなかったのは置いておこう。

ワンピースの懸賞金インフレは有名だが、胸のデカさのインフレは最初の方から行われているのだ。故に、揺れなければ下位なのである。

閑話休題

「えーつと……海賊を……えーつと……捕らえました………後アインお願い」
「ダメに決まってるでしょ」

とはいうものの、手のかかる子でも言うかのように、アインはスラスラと代わりに認めていく。

本来なら、捕らえた海賊達の危険度や強さを考えて、アイト達が護送も行う予定であったが、ビビに早く会わなくてはならないし、たしぎの相手をする約束もしている。

加えてアイトはガープよりエースを七武海に誘うよう言い聞かせられている。モネから説得されても無理だった以上、今更やっても仕方ないだろうが形だけでも誘わなく

ては、上司に嘘をつく事になってしまふ。

見聞色の覇気のせいで嘘がバレてしまふのだ。

アイトは海兵を率いて、エースは海賊を率いて、握手できる距離にまで近づいて話す。

「で、聞くけど——エース君、七武海にならないか？」

「断る」

その言葉に身構える海兵と海賊だが、アイトは終始笑顔を浮かべていた。また、アイトを始めとした海軍の指揮官達もリラックスしている。

一切考えることなく即決したエースを満足そうに見たアイトは、特に何もせずに向きを変えて、書類に汚い字を書いて帰り出す。

「よし、オケ、解散」

「本当に解散すんのな……」

気の抜けた顔のエースを見ながら、クスクスと笑いながらモネが揶揄う。

「独房に入れたかつたら着いてきてもいいわよ？」

「誰がいくか!?!」

「私と一緒にならどう?」

「いっ……きません!!」

「アホらし……」

「セクハラです」

「アイトは？」

海賊達の反応見て軽蔑する女達。そんな中、ステューシーはアイトの方を見るが、案の定、アイトも海賊達と同じ反応をしている。

「……いや、だって、行きたくない？」

「貴方つてもしかして馬鹿？」

「こんなもんよ、アイトなんて」

「セクハラですね」

冷たい目で見下ろされるアイト。周りに他の海兵や海賊がいながら、全く性格を尊敬されない、悲しい奴である。

そんな落ち込むアイトに近づくとメガネの女性が……

「アイト」

「ん？」

「セクハラです」

「何が!？」

さらなる追撃を一つ。

戦闘が終わった今、終始和やかな雰囲気がある。その傍らでこの島で犠牲になっ

てしまったもの達を埋葬していく。

赤髪との接敵の時のように宴が始まりそんな気配を感じたアインは、必要な事を全て済ませ次第、出港するよう厳命する。

まずはスピード海賊団が出立し、その後に護送船団が出発し、最後にアイト達が島の周辺や海賊同盟の拠点を制圧し、本部へ帰港する。

「じゃ、俺たちは先に出るよ」

「次会う時も仲良くやろう」

アイトはエースと固く握手をして、護送船の指揮を取る大佐とも握手をする。本来なら先に出たい気持ちを押し殺しているため、若干力がこもっている。

アイト達は、というかアイトはすぐにでもビビに合わねばならない。だって怖いから。今まで会えなかった分、時間をとって会わなくてはならない。だって怖いから。

「出港するぞー!!」

「はっ!!」

イカリを上げ、帆を広げ、舵をとって船を出す。天気は晴れ、風は追い風、つまり絶好の航海日和。

「アイト、海難事故が近くで頻発してるみたいよ」

「まあ、俺の能力なら大丈夫大丈夫」

船は気持ち急いで本部へ向かう。

航海日和の天候は急転、真つ黒な暗雲に包まれた。強風と波に煽られる護送船の上で、指揮官は険しい顔をしていた。

ただの悪天候ならなんて事はない。

「大佐！緊急事態です！」

雨風に帽子を飛ばされた部下から怒号に近い声が響く。そうでもしなければ顔を突き合わせていても聞こえない位、天候は最悪だった。

「分かっている！」

そして、それを引き起こしたのは目の前にいる1人の男である。

「ジツハハハハハ！お前らが来るのを待ってたぞ……！」

かつて海を文字通り飛び回り暴れ回った金獅子のシキ、大海賊と恐れられガープとセングクという海軍の二大戦力によって捕えられた筈の男である。

「おのれ……！何故こんなところに金獅子が……!!とにかく、アイトさんに連絡——!!」

「させねえよ……さつきここを通った奴らの船長だろう？あの強さの連中が揃ってる以

上、来られると面倒だ」

指揮を執る大佐が連絡をさせようとするも、指示を受けた部下の首ごと、あつさり腕を切り落とされる。

かつてロジャーを初めとした大海賊達と覇を競った、残忍でクレバーな伝説の海賊・金獅子のシキ。

護送船の周囲の波が落ち着くと共に、フワリと軍艦の甲板に降りて来た彼は、護送されてる海賊たちに用があつた。

「大人しく海賊共を寄越しな」

「そうしたところで、我々の命を奪うのだろうか？」

「聡いな」

「——全員！覚悟を決めろ！我々はこれから死地に向かう！だが！ここで我々が任務を遂行することで！数え切れない市民の命を救うことに繋がるのだ！——行くぞオオオオ！！」

「オオオオオ！」

「……………くだらん」

クイツと指を上げると、途端に荒れ狂い始める海。揺れに足を取られながら、懸命に金獅子のシキに挑む海兵達。

彼らの決死の戦いは誰にも知られることなく、ただ一方的な虐殺となる。アイトや本部へ連絡をしようとしても、激しく上下する中では小さなでんでん虫を使うことも出来ず、彼らは人知れず海に沈んで行った。

世界の正義の中心地、海軍本部……に向かう途中で——

軍艦に設けられた執務室にて、アイトは電電虫を握っていた。

「今大丈夫？」

「……ああ……どうかしたか」

電話越しから聞こえてくる女性の声に、アイトは若干の警戒を声に乗せながら、周囲を見渡し自身が1人であることを確認する。

「実はアラバスタに着くのが遅くなりそうで」

「まあ仕方ないだろう。敵なんだから」

船底にて声を抑えて話すアイン、場所はこの船に長く乗ってる者でも、ごく少数の者しか知らない倉庫である。

「ええ、赤髪海賊団と戦うなんて思わなくて」

「そりゃあ……あー何が欲しい?」

電話主の声から伝わる遠回しな言葉に、下手に長話するのはマズイと判断し、アイトは単刀直入に聞き出す。

「そうじゃなくて!——かくかくしかじかで」

「動くのか? 民間人への被害は減らしてくれよ?」

思わず大声を出してしまったアイトは、体を少し丸めながら手短に要件を伝えていく。

「当然よ! そんな事しないわ!」

「ならいい。コッチで手を打つよ。丁度本部に向かってるしな」

「モネ! 緊急重要会議だ!」

電話が終わるや否や、部屋の扉を少し開けて近くにいたモネを部屋へと連れ込み、偉そうな椅子に深く腰掛け、何処ぞのゲンドウのように指を合わせる。

やけに真剣な顔をしているアイトの顔に、これはアホな事を言う時の顔だと察したモネは、海風で若干傷んできている髪の毛を手櫛で手入れをしながら、付いていく。

「私はそろそろ、自分の現状に立ち向かわなくてはならない」

「…なんの話かしら」

「海よりも広く、秋の山のような話だ」

「?早く本題に入ってくれない?おハゲさん」

「いないな!ストレートにいないな!」

ああ、何を言いたいのか分かったモネはコレ幸いと自分の機嫌を良くする為に、アイトを弄ることにした。

「分かったわよ、育毛後進国さん」

「オブラートに包めとも言っていない!」

「だからなんなのよ、貴方の生え際が下がってる事は……皆んな薄々気づいてるわよ?」
「やめろい!覚悟を決めたとはいえ……脆いんだ!」

少し涙目になりながら頭を、正確には髪の毛を手で押さえるアイト。その仕草が余計にモネの嗜虐心を刺激する。

「そうね、どんどん減っていつてるもんね。それで?緊急重要会議ってなんなの?」

「それがこの話だよ!言わせんな!」

「なんだそんな事?別に誰も気にしないわよ」

「するの!俺が!ゼファー先生も胃を痛めてるセンゴクさんも、しつかり生えてるのに……」

不公平だと抗議しながら部屋の中を歩き回るアイト。最初は椅子に座って異様な雰

困気を出していたと言うのに、この主人公には空気を維持する事は出来ないようだ。

「良かったじゃない、まだ貴方に人らしいところがあつて」

「嬉しか無いわ!」

「というか…な・ん・で・私に聞くの?」

髪のことですアイトを揶揄つてるうちに、ふと、自身の髪の毛が気になってきたモネ。

「ここで勝手に機嫌が悪くなつていく。

「………なんか機嫌悪く無い?」

「貴方が髪の毛の話をするから、私も気になってきたのよ!」

「えっ…モネさんもしかして…ハゲ」

「てないわよ!!髪の毛が!海風のせいだ!ボロボロなの!気にしないようにしてたのに……!」

「してたとのに?」

ロギアなのに海風で傷むのか?と疑問に思うアイトと、イライラで手から冷気が漏れ始め、果てにはシンプルに嘔み、その羞恥まで現れてきたモネ。

爆発3秒前である。

「貴方が髪の毛の話をするから!気になって痒くなつてきちゃったのよ!」

「搔けば良いじゃねえか!」

「好きな人の前で掻きむしりたいと思う!」

「嬉しいな! ありがとう!」

「……あ……もう!!」

「ギャツ!」

—————

電話を終えて帰って来たアインは自分の上の階から響く、重たい衝撃に驚きつつ駆け足で現場に向かった。

「———なんの音? すごい音が聞こえたけど……モネ?」

「アイン……ごめんなさい、つい」

アインが執務室に入ると、そこには雪の柱の中に閉じ込められたアイトと、その前で肩で息をしているモネがいた。

「良いわよ、どうせアイトがデリカシーのない事を言ったんでしょ。それより、髪の毛ちゃんと手入れしてるの?」

「私ロギアだから、髪の毛の根本をあつたためてサラサラにするやつ出来ないのよ」

「私がやってあげるわ、行きましょ」

モネの背中に手を回し、連れ立って部屋を出る2人。アイト以外に被害が出る時はないように、とちよつとした小言を言いながら楽しげに談笑して行った。

「アノ……オテヲ……ア」

—————

「カリファはいつから『セクハラです』が口癖になったんだ？」

「セクハラです」

「言葉が!？」

あの後、アイトの元へやって来たのはペーさんにライドオンしたうるティであった。分厚い壁をぶち破つて現れて、首を抑えられたペーさんが暴れた事で、アイトは解放された。

2人が開けた大穴を治してもらう間に、アイトはカリファとステューシーの元に避難

していた。

落ち着いた雰囲気を感じる部屋の真ん中にあるテーブルを囲み、紅茶を飲んで温まっていた。

「…むかし、まだ候補生の時の話だけれど、新人の教官が際どい所を触ってくる人だったから、そのせいね」

「ええ、命知らずだな。カリファみたいな隠れゴリラに手を出すなんて」

「アイト」

「うん？」

「セクハラです」

「そうだね！今のは10割俺だわ！それでヒールが痛い！頭凹む！」

行つた瞬間に体を椅子から落とされ、横向きになった所を踏まれるアイト。先ほどモネに痛い目に遭わされたというのに、ここでもまた痛い目に遭う。学習しない男である。

「あら、楽しそうなことしてるわね」

「ステューシー…！実はかくかくしかじかで…」

「ふうん、私の時はそんな人いなかったわね」

グリグリと少しずつ圧力をかけてくる足の痛みに耐えかねて、アイトは脱出しようと

身を振っていた時に入って来たステューシー。

もしや助けてくれるのでは、と淡い期待をするアイトを見ながら、ステューシーも会話に参加する。

「そうなの？」

「ええ、一度だけ触ろうとした人がいたけど、嵐脚の練習と称して股間を蹴り飛ばしてやったわ」

「ヒエツ…」

思わず股間を抑えて縮こまるアイト。想像するだけでヒユツとする言葉である。

「殺したんですか？」

「——殺すだなんて、そんな物騒なことしないわよ」

「どの口が言うんだ？…嘘ですごめんなさい背骨をヒールで踏まないで！」

ついこの前殺されかけたが故に、口から出た言葉は救世主（仮）になる可能性のあったステューシーを見事に敵に回した。

「それ以来私が近づいたらすぐ離れるようになって、気づいた時にはいなくなってたわね」

「うわあSだあ…トラウマになってるじゃんその元男教官」

「アイトはMよね」

「それ踏まれてる事以外要素ないよね!？」

「これ以上ないMの素養よ。誇ったら?」

「誇るかこのドSどもめ!」

別に俺はノーマルだよ!どっちも好きだよ!変態だよこのやろー!と雑に言葉を並べているアイト。

しかし、女性の前でそんな事を口走れば――

「――アイト」

「なんだよカリファ、また“セクハラです”か?」

「キモいです」

「うーわあ…シンプル悪口イ…グスン」

「…可愛いでしょ?」

「ですね、もつといじめましょう」

「」

――

「あー酷い目にあつた」

「どつちも貴方が悪いわよ」

あの部屋からの脱出を果たしたアイトは少々げつそりとした様子で、フラフラとおぼつかない足取りで甲板に出て来た。

癒しを求めてアイトを捕まえたが、一定の距離を取られ、釣れない態度をされ続けている。

「そんなこと言うなよアイン」

「仕事中よ」

「たまには息抜きしないと張り裂けるぞ？」

「それ誰情報？」

「センゴクさん」

「…重みが違うわね」

アイトは目にするたびに胃薬を飲んでいる元帥を思い返し、その胃痛の要因の1人であるアイトをより厳しくしようと思ひ直す。

「その為に俺のことを名前前で呼んでみない？てか呼んで？呼んで欲しい」

「プライベートで呼んでるから良いじゃない」

そうとは知らずに、グイグイと近づいてくるアイトを片手で止め続けるアイト。面倒臭い男である。

「あ、さては恥ずかしいんだな」

「夜の貴方の甘え方のほうが」

「それはマジでやめて……ん……どうやったら名前呼びをしてくれるのやら」

抑揄おうとしたアイトだが、アツサリとやられて顔を甲板に埋める。その姿を見て溜め息を吐くアイン。さながら倦怠期を感じる溜め息である。

「お悩みでございましょう？」

「ん？……どこから……うるティ!? 船の外側に貼り付いて何してんだ!？」

「危ないから速く登りなさい！」

そんな2人の元に下から響く声があった。天啓でも何でもない、ピンチのうるティの声である。

「そんなことより、なんでアインはアイトの事を名前で呼ばないんでございましょう？」

「仕事だからよ、それ以外に理由はないわ」

「嘘でございましょう？」

「え、嘘なの!？」

予想もしてなかったうるティの言葉に、嬉しそうに反応するアイト。その言葉に若干の動揺を見せるアインの声音は少し上擦っている。

「何信じてんのよ……うるティ? 適当な事言わないで……!」

「テキトーも何も、アインはアイトと夫婦ごっこをしたいんでございませよ？だから旦那として「貴方」って呼ぶんでございませよ？」

「だっ……！ちがつ……！！なっ……何を根拠に?！」

「否定するのが馬鹿馬鹿しいでございませよ」

「」

あつけらかんと明かされた自分の本心に、脳がフリーズしているアインは絶句してしまっている。

その一方で、ふと、アイトが違和感を覚え、嫌な予感を持つてうるティに聴き込む。

「固まっちゃったよ……マジか……あれ？うるティ、ペーたんは？一緒に貼り付いてないのか？」

「ペーたんなら海に入ってるでございませよ。船の縁でペーたんに乗ってたたら、船が揺れたんでございませよ」

今更でございませよ、と澄まし顔をするうるティを見て、ますます危機感を覚えるアイトと、脳が復活したアインが身を固くしている。

「……じゃあ今ペーたんは」

「あ、アインが復活してる」

「あちきが落ちないように踏み台にしたから、ペーたんは……」

「……」

「ペーたんンンン!!」

「船を止めて!今すぐに!」

「アチキも行くでござんしょ!」

「うるテイ!?!待つて!ダメよ!?!」

「うおおおいいい!ペーたん!しつかりしろペーたん!」

「なんて奴で……!ござい……ましよ……ペーたんを……!海に……!突き落とす……なんて!」

「可哀想なペーたん……ひとえにペーたんが泳げないせいだが」

「……色々言いたいけど、部屋から出てって?十円ハゲさん」

「禿げてないわ!」